AJAN 拡張コマンド リファレンス

目 次

第	1章	i はじめに	8
第	2章	世一機能説明	9
	2.1	Python 連携の基本	9
	2.2	オーディオ入出力の基本	11
		2.2.1 オーディオ入出力できない時の確認事項	12
		2.2.2 途切れなくオーディオ入出力を行う方法	13
	2.3	グローバル共有の基本	16
		2.3.1 読み書きを行う変数名の注意とお願い	18
		2.3.2 配列の読み書きを行う	18
		2.3.3 連想配列の読み書きを行う	20
		2.3.4 両端キューに追加・取り出しを行う	22
		2.3.5 型と存在の確認と削除	24
		2.3.6 排他処理をかける	25
		2.3.7 別コンピュータに対して読み書きする	26
		2.3.8 通信を暗号化しつつ、別コンピュータに対して読み書きする(ssh版)	27
		2.3.9 別プログラムにメッセージを通知・受信する	29
		2.3.10構造体を扱う際の注意	31
		2.3.11通信回線切断などのトラブル時の注意	32
		2.3.12データベースの個数を増減したい時	34
		2.3.13グローバル共有のデータを全てクリアしたい	34
		2.3.14グローバル共有のデータを別のグローバル共有に複製したい	35
		2.3.15複数のサーバを起動したい	36
		2.3.16グローバル共有のデータをバックアップする	39
		2.3.17グローバル共有モニタの紹介	40
第	3 章	ロリファレンス	41
	3.1	コマンド一覧	41
	3.2	数値・文字列に関する関数・命令	47
		3.2.1 ARRAY2BINBLK\$	47
		3.2.2 ARRAY2STR\$	48
		3.2.3 BINBLK2ARRAY	49
		3.2.4 CBOOL	51
		3.2.5 CDBL	52
		3.2.6 CINT	52
		3.2.7 CLNG	53
		3.2.8 CSNG	53
		3.2.9 CLOCK2DATETIMESTR\$	54
		3.2.10CONVBIN	55
		3.2.11CONVPHY	57
		3.2.12CONVUNIT	58

3.2.12.1 <単位変換名一覧>	58
3.2.13DATEADD	59
3.2.14DATETIMESTR2CLOCK	60
3.2.15DAY	61
3.2.16FORMAT\$	62
3.2.16.1 <format\$の数値表示書式表></format\$の数値表示書式表>	62
3.2.16.2 <format\$の日付時刻表示書式表></format\$の日付時刻表示書式表>	63
3.2.16.3 <format\$の文字列表示書式表></format\$の文字列表示書式表>	63
3.2.17FORMATDATETIME\$	65
3.2.18HASH\$	66
3.2.19HOUR	67
3.2.20ICONV\$	68
3.2.21JOIN\$	69
3.2.22LCASE\$	69
3.2.23LEFT\$	70
3.2.24LEFTB\$	70
3.2.25MATH ISEQ	71
3.2.26MINUTE	72
3.2.27MKUUID\$	72
3.2.28MONTH	73
3.2.29PASSWORD_HASH\$	74
3.2.30PASSWORD_VERIFY	74
3.2.31RIGHT\$	75
3.2.32RIGHTB\$	75
3.2.33SECOND	76
3.2.34STR_BASE64_DECODE\$	77
3.2.35STR_BASE64_ENCODE\$	77
3.2.36STR_DUMP\$	78
3.2.37STR_AND\$	79
3.2.38STR_OR\$	79
3.2.39STR_XOR\$	79
3.2.40STR_IMP\$	80
3.2.41STR_EQV\$	80
3.2.42STR_REPEAT\$	80
3.2.43STR_HAN2ZEN\$	81
3.2.44STR_ZEN2HAN\$	82
3.2.45STR_HIRA2KATA\$	83
3.2.46STR_KATA2HIRA\$	83
3.2.47STR_STARTSWITH	84
3.2.48STR_ENDSWITH	84
3.2.49STR_REMOVEPREFIX\$	85
3.2.50STR_REMOVESUFFIX\$	85
3.2.51STR_VALIDUTF8	86
3.2.52STR_ISALNUM	86
3.2.53STR_ISALPHA	87
3.2.54STR ISCNTRL	87

	3.2.55STR_ISDIGIT	88
	3.2.56STR_ISGRAPH	88
	3.2.57STR_ISLOWER	89
	3.2.58STR_ISPRINT	89
	3.2.59STR_ISPUNCT	90
	3.2.60STR_ISSPACE	90
	3.2.61STR_ISUPPER	91
	3.2.62STR_ISXDIGIT	91
	3.2.63STR_ISASCII	92
	3.2.64CHRTYPE	93
	3.2.64.1 <情報 ID:"type" の値>	94
	3.2.64.2 <情報 ID:"break_type"の値>	94
	3.2.65STR2ARRAY	96
	3.2.66STRDELB\$	97
	3.2.67STRINSB\$	98
	3.2.68STRREVERSE\$	99
	3.2.69STRREVERSEB\$	99
	3.2.70TRUNC	100
	3.2.71UCASE\$	100
	3.2.72UUIDCOMP	101
	3.2.73YEAR	101
3.3	配列演算に関する関数・命令	102
	3.3.1 DIMAVG	102
	3.3.2 DIMMEDIAN	102
	3.3.3 DIMMAX	103
	3.3.4 DIMMIN	103
	3.3.5 DIMSUM	104
	3.3.6 DIMSTDEVP	104
	3.3.7 DIMVARP	105
	3.3.8 DIMVARS	105
	3.3.9 DIMADD	106
	3.3.10DIMADD\$	107
	3.3.11DIMSUB	108
	3.3.12DIMDIV	109
	3.3.13DIMMOD	110
	3.3.14DIMMUL	111
	3.3.15DIMNOT	112
	3.3.16DIMAND	113
	3.3.17DIMOR	114
	3.3.18DIMXOR	115
	3.3.19DIMIMP	116
	3.3.20DIMEQV	117
	3.3.21DIMSHL	118
	3.3.22DIMSHR	118
	3.3.23 DIMROL	119
	3 3 24 DIMR OR	110

	3.3.25DIMEQ	120
	3.3.26DIMNE	121
	3.3.27DIMLT	122
	3.3.28DIMGT	123
	3.3.29DIMLTE	124
	3.3.30DIMGTE	125
	3.3.31DIMIIF	126
	3.3.32DIMIIF\$	127
	3.3.33DIMCINT	128
	3.3.34DIMCLNG	129
	3.3.35DIMCSNG	130
	3.3.36DIMCDBL	131
	3.3.37DIMCSTR\$	132
	3.3.38DIMFIND	133
	3.3.39DIMGET	135
	3.3.40DIMGET\$	136
	3.3.41DIMMAP	137
	3.3.42DIMMAP\$	138
	3.3.43DIMREDUCE	139
	3.3.44DIMSET	140
	3.3.45NUM2BIT	141
	3.3.46BIT2NUM	141
	3.3.47ONEDIM SORT	142
	3.3.48ONEDIM SORT\$	142
	3.3.49TWODIM FILTER	143
	3.3.50TWODIM FILTER\$	144
	3.3.51TWODIM JOIN	145
	3.3.52TWODIM JOIN\$	146
	3.3.53TWODIM EXISTS	147
	3.3.54TWODIM EXISTS\$	148
	3.3.55TWODIM NOT EXISTS	149
	3.3.56TWODIM NOT EXISTS\$	150
	3.3.57TWODIM SORT	151
	3.3.58TWODIM SORT\$	152
	3.3.59TWODIM TRANSPOSE	153
	3.3.60TWODIM TRANSPOSE\$	153
3.4	Python 連携に関する関数・命令	154
	3.4.1 PYOBJ CREATE CODE	
	3.4.2 PYOBJ CALL FUNCTION	155
	3.4.3 PYOBJ CALL METHOD	156
	3.4.4 PYOBJ CLOSE	158
3.5		
	3.5.1 SNDOPEN	
	3.5.2 SNDCLOSE	
	3.5.3 SNDREAD	
	3.5.4 SNDRFADLEN	

	3.5.5 SNDWRITE	163
	3.5.6 SNDWRITELEN	164
3.	.6 ファイル・フォルダに関する関数・命令	165
	3.6.1 CURDIR\$	165
3.	.7 プロセスに関する関数・命令	166
	3.7.1 GETCOMMANDLINEARGS\$	166
	3.7.2 GETSYSTEMINFO\$	167
	3.7.3 ENVIRON\$	168
3.	.8 グローバル共有に関する関数・命令	169
	3.8.1 COMMON OPEN	169
	3.8.2 COMMON CLOSE	171
	3.8.3 COMMON FREEFILE	171
	3.8.4 COMMON ERASE	172
	3.8.5 COMMON INPUT	173
	3.8.6 COMMON INPUTR	174
	3.8.7 COMMON READ	175
	3.8.8 COMMON PRINT	176
	3.8.9 COMMON WRITE	177
	3.8.10COMMON LOCK	178
	3.8.11COMMON UNLOCK	179
	3.8.12COMMON NOTIFY	180
	3.8.13ON COMMON CALL	181
	3.8.14COMMON ON / OFF	182
	3.8.15COMMON CDIM	183
	3.8.16COMMON GET_DICT_KEYS\$	184
	3.8.17COMMON HAS DICT KEY	
	3.8.18COMMON LDICT	186
	3.8.19COMMON LDIM	186
	3.8.20COMMON UBOUND	187
	3.8.21COMMON VARTYPE	188
	3.8.22COMMON DEQUE PUSH	189
	3.8.23COMMON DEQUE LPUSH	
	3.8.24COMMON DEQUE POP	191
	3.8.25COMMON DEQUE LPOP	
	3.8.26COMMON DEQUE BACK	
	3.8.27COMMON DEQUE FRONT	
	3.8.28COMMON DEQUE LEN	195
	3.8.29COMMON VLIST\$	196
	3.8.30COMMON SWAPDB	
	3.8.31COMMON2 ERASE	198
	3.8.32COMMON2 CDIM	199
	3.8.33COMMON2 GET_DICT_KEYS\$	
	3.8.34COMMON2 HAS_DICT_KEY	
	3.8.35COMMON2 LDICT	
	3.8.36COMMON2 LDIM	
	3.8.37COMMON2 UBOUND	

第6章	重要な情報	222
第5章	索引	219
4.1	サンプルプログラム	217
第4章	サンプルプログラム	217
3	3.10.1GET_OCR\$	216
3.10	拡張コマンドのサブルーチン集	215
3	3.9.1 QRCODE_GET	213
3.9	その他に関する関数・命令	213
3	3.8.46COMMON2 VLIST\$	212
	3.8.45COMMON2 DEQUE LEN	
	3.8.44COMMON2 DEQUE FRONT	
	3.8.43COMMON2 DEQUE BACK	
	3.8.42COMMON2 DEQUE LPOP	
	3.8.41COMMON2 DEQUE POP	
	3.8.40COMMON2 DEQUE LPUSH	
3	3.8.39COMMON2 DEQUE PUSH	205
3	3.8.38COMMON2 VARTYPE	204

第1章 はじめに

本ドキュメントは、AJANの拡張コマンドの説明を記載しています。

拡張コマンド以外のコマンド(標準コマンド、IO制御コマンドなど)は、別マニュアルを用意しているので、別途参照ください。

本ドキュメントでは、説明で表現している表記として下記のように定義します。

- ・コマンドの書式の説明において、[]内の引数は省略できます。
- ・文字の大小について コマンドは大文字 / 小文字のどちらでも動作します。 変数名は大文字 / 小文字も同じものとして扱われます。 ファイルパス / ファイル名は大文字/小文字で区別されます。



本ドキュメント記載の、AJANはIoT用プログラミング言語です。

Interface Linux System上でのみ動作可能です。

第2章 機能説明

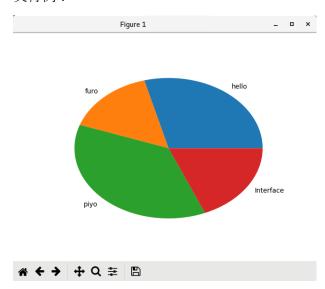
2.1 Python連携の基本

AJANからPythonエンジンを内部で呼び出し、Pythonに処理を依頼し、結果を受け取る事ができます。

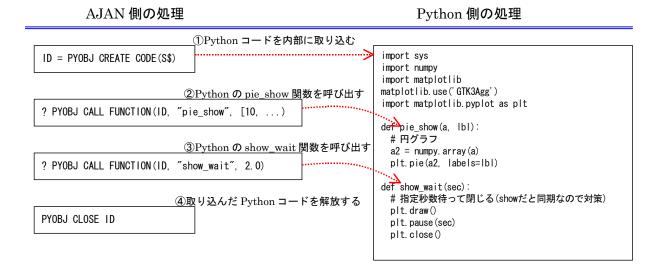
例えば、以下のコードを実行すると、下図のような円グラフが表示されます。

```
↓Pythonコード部
s$='''import sys
import numpy
import matplotlib
matplotlib.use('GTK3Agg')
import matplotlib.pyplot as plt
def pie_show(a, lbl):
  # 円グラフ
  a2 = numpy. array(a)
  plt.pie(a2, labels=lbl)
def show_wait(sec):
  # 指定秒数待って閉じる(showだと同期なので対策)
  plt.draw()
 plt. pause (sec)
 plt.close()
'Pythonコードを読み取る
ID = PYOBJ CREATE CODE(S$)
'円グラフ(pie)の呼び出し
? PYOBJ CALL FUNCTION(ID, "pie_show", [10, 5.3, 12.6, 6.4], ["hello"; "furo"; "piyo"; "Interface"])
? PYOBJ CALL FUNCTION(ID, "show_wait", 2.0)
PYOBJ CLOSE ID
```

実行例:



このコードは、おおよそ以下のように動いています。



このように、Pythonと連携して処理することができます。

2.2 オーディオ入出力の基本

製品に搭載されているオーディオ入出力機能(マイク入力、ライン出力端子など)を、アナログ入出力機能に見立てて制御できます。



本機能を使用するには、オーディオ入出力を使って、実際に音が出たり、入力できる事が必要です。

例えば、16kHzのサンプリング周波数、-1[~]+1の範囲のデータ値を、オーディオ入力したい場合、 以下のように記述します。

'オーディオ入力をオープン(16kHzで入力)

SNDOPEN "?RATE=16000&FORMAT=FLOAT32LE" FOR INPUT AS #1

DIM BUF (511)

BUF = SNDREAD(1, 512) 'オーディオ入力から512件読み取る

'オーディオ入力をクローズ

SNDCLOSE #1

また、乱数を使って作ったサンプリングデータを、同じ条件でオーディオ出力したい場合、以下 のように記述します。

'オーディオ出力をオープン(16kHzで入力)

SNDOPEN "?RATE=16000&FORMAT=FLOAT32LE" FOR OUTPUT AS #1

DIM BUF (511)

' 乱数を使ってサンプリングデータを作る

FOR I=0 TO LDIM(BUF)-1

BUF(I) = RND()

NEXT I

SNDWRITE #1, BUF ′作ったサンプリングデータ(512件分)を、オーディオ出力する

'オーディオ出力をクローズ

SNDCLOSE #1

2.2.1 オーディオ入出力できない時の確認事項

以下のように、オーディオ入出力を動かそうとしてもエラーになる場合、後述する確認事項を試してみてください。

\$./SNDREAD_SNDWRITE

Error! &H01000008:ファイルのオープンに失敗しました(オーディオデバイスを開けません((null), INPUT, 6,接続拒否))[/home/user/cajan/src/EXT001/src/samples/SNDREAD_SNDWRITE.AJN:line 9]

■ 確認① サウンドの入出力が有効か確認する

まず、サウンドの入出力機能が有効になっているか確認しましょう。

Linuxメニューのアプリケーション→システムツール→Preferences→設定を選択します。 「すべての設定」ダイアログが起動します。ここで、「サウンド」アイコンをクリックすると、 サウンドの設定ダイアログが開きます。



「出力」タブがサウンド出力、「入力」タブがサウンド入力の設定です。 ここで、機能が「オン」になっている必要があります。「オフ」の場合「オン」に設定しなおし てください。





サウンド出力の場合、ダイアログ下部に「スピーカーのテスト」ボタンがありますので、これを 選択してテストを行い、正しく音が聞こえてくるか確認します。

サウンド入力の場合、マイクなどと繋いで音声入力しつつ、入力レベルのゲージが変化する事を 確認します。

2.2.2 途切れなくオーディオ入出力を行う方法

途切れなくオーディオ入出力を行うには、十分な入出力バッファを確保し、バッファに蓄えられたデータが途切れないように、入力ないしは出力を行う事が肝要です。

入出力バッファの指定は、「SNDOPEN」時に指定できます。

例えば、オーディオ出力を行う際、出力バッファ長を指定する TLENGTH と、出力開始するサイズ 長を指定する PREBUF を用います。

`オーディオ出力時、出力バッファ長を20000、出力開始サイズ長を200とする
SNDOPEN "?RATE=1000&FORMAT=FLOAT32LE&TLENGTH=20000&PREBUF=200" FOR OUTPUT AS #1

上のコード例では、TLENGTH で指定した 20000バイト ほどの長さの出力バッファを用意し、 PREBUF で指定した 200バイト ほどの長さの出力データが溜まる都度、オーディオ出力が行われる事になります。

(指定しない時、システムが自動的にバッファサイズを決定します)

この為、出力バッファにデータが残っている間に、次のデータを 「SNDWRITE」で出力バッファにセットする事で、途切れなくオーディオ出力する事が可能となります。

「SNDWRITELEN」で、出力バッファの書き込み可能件数が得られます。

「SNDOPEN」 直後、「SNDWRITELEN」で得られる値が、出力バッファが空時の値とみなせるので(正確には、OSが認識できないハードウェアが持つ出力バッファ分が別途ある)、この値にならないように、「SNDWRITE」で出力データを書き込んでいきます。

出力バッファに書き込むデータの余裕があれば、出力バッファにデータをセットした後、「SNDWRITE」は直ぐに戻ります。

しかし、出力バッファに余裕が無い場合、データを出力バッファにセットするまで、待機して戻りません。

これを応用して、データを逐次書き込む例を示します。

`オーディオ出力時、出力バッファ長を20000、出力開始サイズ長を200とする
SNDOPEN "?RATE=1000&FORMAT=FLOAT32LE&TLENGTH=20000&PREBUF=200" FOR OUTPUT AS #1

LIST ARY

'出力する波形データを生成
ARY = CALC CREATE SINWAVE(1, 100.0, 400.0, 1000)

' バッファが空時の、出力バッファの書き込み可能件数 SZ_INIT = SNDWRITELEN(1)

'初回の出力データ書き込み。これより出力開始 SNDWRITE #1. ARY

AJAN 拡張コマンドリファレンス

```
SZ_1 = SNDWRITELEN(1)
ASSERT SZ_1 > 0, "書き込み直後にバッファがOになるなら、TLENGTHが少なすぎる"
' 出力バッファが空になる手前のしきい値を決める
SZ_CHK = SZ_INIT - ((SZ_INIT - SZ_1) / 2)

DO WHILE TRUE
SZ = SNDWRITELEN(1)
IF SZ > SZ_CHK THEN
' 出力バッファにデータを書き込む
SNDWRITE #1, ARY
END IF
```

オーディオ入力の場合は、入力バッファ長を指定する FRAGSIZE を用います。

```
'オーディオ入力時、入力バッファ長を10000とする
SNDOPEN "?RATE=16000&FORMAT=FLOAT32LE&FRAGSIZE=10000" FOR INPUT AS #1
```

上のコード例では、FRAGSIZEで指定した 10000バイト ほどの長さの入力バッファを用意し、オーディオ入力が行われる事になります。

(指定しない時、システムが自動的にバッファサイズを決定します)

入力バッファに蓄えられた件数は、「SNDREADLEN」で得られます。

「SNDREAD」で指定した件数のデータを抜き取るとき、入力バッファに件数以上のデータがあれば、データを抜き取って、関数は直ぐに戻ります。

入力バッファに件数未満のデータしか無い場合、関数は指定した件数のデータが得られるまで、 待機して戻りません。

これを応用して、入力バッファに1000件のデータが溜まる都度、データを抜き取る例を示します。

```
' オーディオ入力時、入力バッファ長を10000とする
SNDOPEN "?RATE=16000&FORMAT=FLOAT32LE&FRAGSIZE=10000" FOR INPUT AS #1

LIST ARY
DO WHILE TRUE
   SZ = SNDREADLEN(1)
   IF SZ > 1000 THEN
    ARY = SNDREAD(1, SZ) ' SNDREADLEN で得た件数分を抜き取る
END IF
LOOP
```

「SNDREAD」で抜き取る件数は、「SNDREADLEN」で得られた件数を指定する事を推奨します。 得られた件数以外の件数を抜き取ろうとした時、時折若干長い待機待ちが発生する現象を確認しております。 2022/4 より、「SNDREAD」で抜き取る件数に負数を指定したとき、入力バッファにあるデータのみを抜き取り対象にする事ができるようになりました。 これを応用すると、データの抜き取り例は、以下のようになります。

```
' オーディオ入力時、入力バッファ長を10000とする
SNDOPEN "?RATE=16000&FORMAT=FLOAT32LE&FRAGSIZE=10000" FOR INPUT AS #1

LIST ARY
DO WHILE TRUE
SZ = SNDREADLEN(1)
IF SZ > 1000 THEN
ARY = SNDREAD(1, −1) ' 入力バッファの一塊分を抜き取る
END IF
LOOP
```

2.3 グローバル共有の基本

グローバル共有は、アプリケーション同士で値をやり取りできる機能です。やり取りする値は一意であり、ネットワークをまたぐ事もできます。

この機能を使って、AJANプログラム同士が、任意の値をやり取りする事ができます。



グローバル共有機能は、内部で Redis(https://redis.io)と呼ばれるソフトウェアが使用されています。

例えば、以下のプログラムを実行すると、CNTの値をグローバル共有に書き込みます。

'簡単な書き込み事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'CNTの値を初期化する

CNT = 123

'CNTの値を、グローバル共有に書き込む

COMMON PRINT #1, CNT

COMMON CLOSE #1

グローバル共有に書き込んだCNTの値を読み取るには、以下のように書きます。

簡単な読み込み事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'CNTの値を読み取る

IF COMMON INPUTR (1, CNT) = 0 THEN

'読み取り成功した

PRINT "CNT="; CNT

ELSE

'読み取れなかった

PRINT "グローバル共有にCNTが存在しません"

END IF

COMMON CLOSE #1

グローバル共有に、CNTの値が存在する事が自明ならば、以下のようにも書けます。

簡単な読み込み事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'CNTの値を読み取る

COMMON INPUT #1. CNT

'読み取った値

PRINT "CNT="; CNT

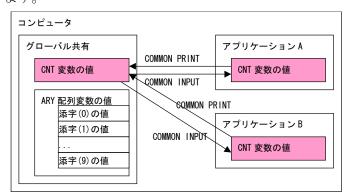
COMMON CLOSE #1

COMMON INPUTR 関数やCOMMON INPUT命令で、グローバル共有からCNT変数の値を取り出し、COMMON PRINT 命令で CNT変数の値をグローバル共有に格納します。

例えていうと、グローバル共有は、コンピュータに1つだけ存在する、データの格納庫のようなものといえます。

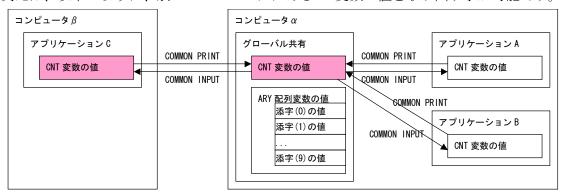
イメージを図にすると、以下のようなものです。

グローバル共有にある CNT変数の値と、自アプリケーションプログラムのCNT変数の値を、 COMMON PRINT 命令とCOMMON INPUTR 関数、COMMON INPUT命令を使って、やり取りします。



イメージ的には、CNT変数という変数そのものを、グローバル共有という場所に格納し、取り出すという事です。

グローバル共有は、ネットワークを介して値をやり取りすることもできます。 例えば、以下のように、別のコンピュータにあるCNT変数の値を取り出す事が可能です。



グローバル共有で書き込んだ値は、アプリケーション終了後も残り続けます。 従って、上のプログラムを実行後、再び実行すると、前のCNTの値に対して読み書き操作が行われ ます。

このように、グローバル共有は、アプリケーション同士を連携させるための糊のような役割を持たせる事が可能です。

2.3.1 読み書きを行う変数名の注意とお願い

一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバル共有の読み書き対象とするのは、避けてください。

これらのグローバル共有の変数名は、弊社から提供するサービス、アプリケーション、ユーティリティ等で使用いたします。

お客様が間違えて該当する変数名を使用して衝突すると、誤動作の可能性があります。

2.3.2 配列の読み書きを行う

グローバル共有は、配列の読み書きができます。 以下に、配列の読み書き事例を示します。

'簡単な配列の読み書き事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

DIM ARY (9)

'配列ARYの値を書き込む

COMMON PRINT #1, ARY

ARY = [0;0;0;0;0;0;0;0;0;0] '初期化

'配列ARYの値を読み取る

COMMON INPUT #1, ARY

PRINT "配列ARY="; ARY

COMMON CLOSE #1

配列を扱う際に重要なのは、まず一旦全体をグローバル共有に書き込む事です。いきなり読もうとしても、グローバル共有に値が書き込まれてないと、エラーとなります。

一旦 値を書き込むと、配列の添字を指定して、グローバル共有に対する部分読み書きが可能となります。

['] 簡単な配列の部分読み書き事例 COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1

DIM ARY(9)

FOR I=0 TO UBOUND (ARY)

'配列ARY(I)の値を読み取る COMMON INPUT #1, ARY(I)

ARY(I) = ARY(I) + 1

['] 配列ARY(I)の値を書き込む

COMMON PRINT #1, ARY(I)

NEXT I

COMMON CLOSE #1

配列の部分読み書きは、配列の要素数が大きい時に、グローバル共有との間で、最小限のデータのやり取りで済むメリットがあります。

特にネットワーク経由で、大きなサイズの配列をやり取りする際に、パフォーマンスに大きく影響します。

しかし、指定した添字以外の値は、グローバル共有と不一致になる可能性がある点に留意が必要です。(別のプログラムが添字の要素を書き換えてしまった場合など)

他に、グローバル共有にある配列から値を取り出す前に、配列の情報を得られる関数が幾つか用 意されています。

COMMON CDIM	グローバル共有の配列の、次元数が得られます。
COMMON LDIM	グローバル共有の配列の、要素数が得られます。
COMMON UBOUND	グローバル共有の配列の、指定次元の添字最大値を得られます。

例えば、グローバル共有に、ARY配列があると仮定した際、その情報を得るには以下のように書きます。

'簡単な配列の情報読み取り事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

LIST ARY

['] 配列ARYの次元数を得る

JIGEN = COMMON CDIM(1, ARY)

PRINT "次元数="; ARY

'配列ARYの各次元の要素数を得る

FOR I=1 TO JIGEN

PRINT "次元"; I; "の要素数="; COMMON LDIM(1, ARY, I)

NEXT I

COMMON CLOSE #1

2.3.3 連想配列の読み書きを行う

グローバル共有は、連想配列の読み書きができます。 以下に、連想配列の読み書き事例を示します。

簡単な連想配列の読み書き事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

DICT ARY

ARY ("hoge") = 123 ARY ("fuga") = 456

'連想配列ARYの値を書き込む

COMMON PRINT #1, ARY

CLEAR_DICT ARY

i 連想配列ARYの値を読み取る COMMON INPUT #1. ARY

PRINT "連想配列ARY="; ARY

COMMON CLOSE #1

連想配列を扱う際に重要なのは、まず一旦全体をグローバル共有に書き込む事です。 いきなり読もうとしても、グローバル共有に値が書き込まれてないと、エラーとなります。

一旦 値を書き込むと、連想配列のキーを指定して、グローバル共有に対する部分読み書きが可能となります。

'簡単な連想配列の部分読み書き事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

DICT ARY

i 連想配列ARYの値を読み取る COMMON INPUT #1, ARY("hoge")

ARY("hoge") = ARY("hoge") + 1

i 連想配列ARYの値を書き込む COMMON PRINT #1, ARY("hoge")

PRINT "連想配列ARY="; ARY

COMMON CLOSE #1

連想配列の部分読み書きは、連想配列のキー数が大きい時に、グローバル共有との間で、最小限のデータのやり取りで済むメリットがあります。

特にネットワーク経由で、大量のキーを持つ連想配列をやり取りする際に、パフォーマンスに大きく影響します。

しかし、指定したキー以外の値は、グローバル共有と不一致になる可能性がある点に留意が必要です。(別のプログラムがキー以外の要素を書き換えてしまった場合など)

他に、グローバル共有にある連想配列から値を取り出す前に、連想配列の情報を得られる関数が 幾つか用意されています。

COMMON GET_DICT_KEYS\$	グローバル共有の連想配列の、キー一覧が得られます。
COMMON HAS_DICT_KEY	グローバル共有の連想配列の、指定キーの存在有無を確認で
	きます。
COMMON LDICT	グローバル共有の連想配列の、キー総数を得られます。

2.3.4 両端キューに追加・取り出しを行う

グローバル共有に、両端キューを設置して、値の追加と取り出しができます。 以下に、両端キューを使った、追加と取り出し事例を示します。

′両端キューを使った追加・取り出し事例(スタックのような動作)

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

"両端キューの末尾に、値を追加

LV = 1

COMMON DEQUE PUSH #1, LV

LV = 2

COMMON DEQUE PUSH #1, LV

LV = 3

COMMON DEQUE PUSH #1, LV

PRINT "両端キューLVの個数="; COMMON DEQUE LEN(1, LV)

'両端キューの末尾から、値を取り出し

DO WHILE COMMON DEQUE POP(1, LV) > 0

PRINT "LV="; LV ' 3, 2, 1の順に取り出されます

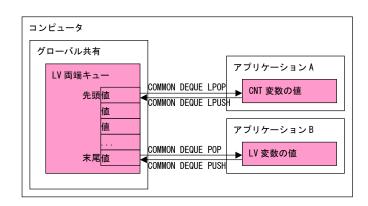
L00P

PRINT "両端キューLVの個数="; COMMON DEQUE LEN(1, LV)

COMMON CLOSE #1

両端キューとは、先頭または末尾に対して、追加や取り出しが可能な待ち行列のようなものです。 通常の値読み書きの場合、グローバル共有にある変数名の値は一意ですが、両端キューの場合 幾 つも積み重ねる事ができます。

また、通常の値読み書きは、グローバル共有には必ず値が存在しますが、両端キューの場合、値 を取り出していくと、空になる事があります。



両端キューを操作する命令および関数は、以下が用意されています。

COMMON DEQUE LPUSH	グローバル共有の両端キューの先頭に追加	
COMMON DEQUE LPOP	グローバル共有の両端キューの先頭から取り出し	
COMMON DEQUE PUSH	グローバル共有の両端キューの末尾に追加	
COMMON DEQUE POP	グローバル共有の両端キューの末尾から取り出し	
COMMON DEQUE LEN	グローバル共有の両端キューの個数を得る	

末尾に追加して、末尾から取り出すやり方をすると、スタックのように扱えます。(本を机の上に 積んで、上から取り出すのを想像してください)

また、末尾に追加して、先頭から取り出すやり方をすると、キューのように扱えます。(お店のレジに並ぶ姿を想像してください)

2.3.5 型と存在の確認と削除

グローバル共有へは、アプリケーションが自由に値を読み書きする事ができます。 この為、読み書きしようとする値が、確かにグローバル共有にあるのか?その値の型は、自分が 扱いたい型であるか、判断する方法が必要です。

これらの用途には、COMMON VARTYPE 関数が使用できます。

COMMON VARTYPE 関数の戻り値が負数だと、指定した変数名は無く、0以上の正数だと 値の型情報が得られます。

COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 'CNTの値が有るか?その型は何か調べる。 TYP = COMMON VARTYPE(1, CNT) IF TYP < 0 THEN

PRINT "グローバル共有にCNT値はありません"

ELSE

PRINT "グローバル共有のCNT値の型="; TYP

END IF

COMMON CLOSE #1

グローバル共有にある値を削除するには、COMMON ERASE 命令で指定します。 例えば、グローバル共有のCNT変数を削除するには、以下のように呼び出します。

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'CNTの値を削除する

COMMON ERASE #1, CNT

COMMON CLOSE #1

2.3.6 排他処理をかける

複数のプログラムが、同じ変数名に対して読み書きを行うとき、値が順序よく更新されるように する為に、排他処理をかける必要が出てきます。

排他処理を行うには、COMMON LOCK 関数でロックを取得し、読み書きを行った後に、COMMON UNLOCK 関数でロックを解放します。

以下に、プログラムの事例を示します。

```
簡単な排他処理事例
COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
' "TEST"という名前で、5秒間 ロックを取得する
IF COMMON LOCK(1, "TEST", 5) > 0 THEN
  CNTの値を読み取る
 IF COMMON INPUTR (1. \text{ CNT}) = 0 THEN
   '読み取り成功したら 1 を加算
   CNT = CNT + 1
 ELSE
   '読み取れなかったら、初期値 0 を与える
   CNT = 0
 END IF
 'CNTの値を書き込む
 COMMON PRINT #1, CNT
 'ロックを解放する
 F = COMMON UNLOCK(1, "TEST")
ELSE
  'ロックが取得できなかった ... 暫くして再挑戦してください
END IF
PRINT "CNT="; CNT
COMMON CLOSE #1
```

COMMON LOCK 関数でロックを取得する際、有効期限を秒単位で指定します。

これは、ロックを取得した後、何がしかの不具合などにより、ロックを解放せずにプログラムを 終了してしまうと、誰もロックが取得できなくなるために、有効期限を設定してもらいます。

複数のプログラム同士で排他制御を行うコツは、それぞれが同じ名前でロックを取得して、読み 書きした上で、ロックを解放することです。

誰か別のプログラムが、ロックを取得せずに、勝手に読み書きすると、排他制御は意味を持たなくなります。



排他制御の間に、グローバル共有に格納された値を読み書きする対象に対して、同じ ロック名を指定してください。

異なるロック名を指定すると、排他制御の意味がありません。

2.3.7 別コンピュータに対して読み書きする

別コンピュータの、グローバル共有の値を読み書きするには、COMMON OPEN 命令で、別コンピュータのIPアドレスを指定します。

別コンピュータのIPアドレスが 「192.168.1.1」 ならば、以下のように記述します。

COMMON OPEN "192, 168, 1, 1" AS #1

なお、この機能を使うには、別コンピュータの設定ファイルの内容を、一部書き換える必要があります。

Linuxのメニューから端末を開いて、以下の手順で設定ファイルの内容を書き換えた後、コンピュータを再起動してください。

- 1. Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末を選んで、端末を起動する。
- 2. 「su」コマンドを呼び出し、パスワードを入力して、管理者権限を得る。
- 3. 「nano /etc/redis/redis.conf」を入力し、設定ファイルをエディタで開く。
- 4. 「bind 127.0.0.1」と書かれている箇所を、「bind 0.0.0.0」と書き換える。
- 5. Ctrl+Xキーで終了を選び、Yキーで設定ファイルを保存して終了する。
- 6. 「reboot」コマンドを呼び出し、コンピュータを再起動する。



設定ファイルの変更例「bind 0.0.0.0」により、どのコンピュータからでも読み書きできるようになります。

アクセス制限を加えたい場合、Redis(https://redis.io)のドキュメンテーションを参照し、読解して各種設定を行ってください。

2.3.8 通信を暗号化しつつ、別コンピュータに対して読み書きする(ssh版)

「別コンピュータに対して読み書きする」では、設定ファイルを書き換える事で、別コンピュータからのアクセスを許可するようにして、グローバル共有の値を読み書きできるようにしました。

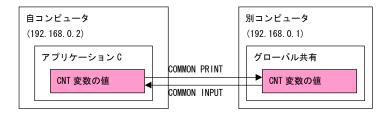
これとは別の方法で、sshポートフォワーディングという技術を利用すると、設定ファイルを書き換える事なく、別コンピュータに接続でき、更に通信内容を暗号化する事が可能です。



sshポートフォワーディングを利用するには、別コンピュータおよび自コンピュータ で、sshサービスを有効にする必要があります。

sshサービスを有効にするには、Linux端末上から「sudo systemctl restart sshd」を 入力して Enterキーを押します。

仮に、自コンピュータと別コンピュータの関係が、以下のようだとします。



自コンピュータから別コンピュータに対して通信を通すために、まず、sshポートフォワーディングの設定を施す必要があります。

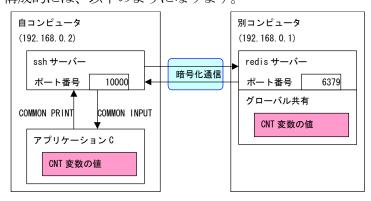
Linuxのメニューから端末を開いて、以下の手順でコマンドを入力します。

- 1. Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末を選んで、端末を起動する。
- 2. 以下のように入力して、Enterキーを押す。

\$ ssh -NL 10000:192.168.0.1:6379 user@192.168.0.1

3. 「user@192.168.0.1's password:」と表示されて、パスワードを求められるので、別コンピュータの user アカウントのパスワードを入力してEnterキーを押す。

これにより、自コンピュータから別コンピュータに対する通信路が開かれます。 構成的には、以下のようになります。



自コンピュータでは、以下のようにプログラムを書きます。

'sshポートフォワーディングを使用して、別コンピュータに対して読み書きする例 COMMON OPEN "127.0.0.1:10000" AS #1

'CNT値を初期化する

CNT = 123

'CNTの値をグローバル共有に書き込む

PRINT "CNT="; CNT

COMMON CLOSE #1

ここで重要なのは、COMMON OPEN命令のIPアドレスとポート番号の指定で、IPアドレスを自身のアドレスとし、ポート番号を「10000」としている事です。

これを実行すると、自コンピュータの10000ポートに対して接続しようとします。

すると、Linux端末で ssh コマンドを使って開いた通信路を介して、別コンピュータの6397ポート(グローバル共有を実現するredisの基本ポート番号)が開かれます。

自コンピュータと別コンピュータの間の通信路は、ssh と呼ばれる暗号化された通信データでやり取りされます。

これにより、設定ファイルを変更せず、暗号化しつつ別コンピュータとの読み書きが可能となります。

2.3.9 別プログラムにメッセージを通知・受信する

グローバル共有を介して、複数のプログラムに対して、任意のメッセージを通知・受信すること ができます。



この機能は、Redis の pub / sub機能を用いて実現しています。

メッセージの通知・受信を使うには、COMMON NOTIFY 関数でメッセージを通知し、ON COMMON CALL 命令でメッセージを受信するサブルーチンを定義し、COMMON ON / OFF 命令でメッセージ受信機能のON / OFFを行います。

まず、以下にメッセージを通知する事例を示します。

'簡単な通知事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'TESTというトピック名に対して、「Hello AJAN」というメッセージを送ります

CNT = COMMON NOTIFY(1, "TEST", "Hello AJAN")

PRINT "受信者期待数="; CNT

COMMON CLOSE #1

次に、メッセージを受信する事例を示します。

'簡単な受信事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

'トピック名:"TEST"にメッセージが来たら CB_TEST ルーチンにジャンプします

ON COMMON(1, "TEST") CALL CB_TEST

'受信機能をONにします

COMMON ON #1

'30秒ほど待機します

ST = CLOCK

DO WHILE (CLOCK - ST) < 30

L00P

COMMON CLOSE #1

'メッセージを受信したら呼び出されるサブルーチン

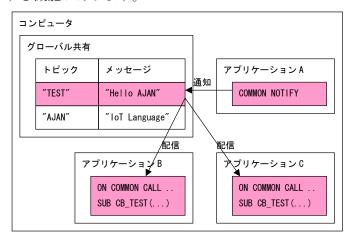
SUB CB_TEST(NUM%, TOPIC\$, MSG\$)

PRINT "メッセージを受信しました", NUM%, TOPIC\$, MSG\$

END SUB

受信する事例のプログラムを複数起動しておいて、通知するプログラムを実行すると、 それぞれの受信プログラムに、「Hello AJAN」というメッセージが表示されます。 通知プログラムは、受信した数が表示されます。 イメージを図にすると、以下のようなものです。

グローバル共有内に、メッセージを一旦受け取って、受信したいアプリケーションに対して配信 する機能があります。



COMMON NOTIFY 関数で、トピック名とメッセージを、グローバル共有に通知します。 グローバル共有は、ON COMMON CALL 命令で、トピック名が一致するアプリケーションに対 して、受け取ったメッセージを配信し、サブルーチンが呼ばれることで、トピック名とメッセー ジを受信する事ができます。

メッセージの受信は、トピック名が一致する、複数のアプリケーションが受信できます。

2.3.10 構造体を扱う際の注意

構造体を使って値を読み書きする際、グローバル共有との間を構造体まるごとやり取りされる点に注意してください。

例えば、要素100の配列を読み書きする例を考えます。

'要素100の配列の読み書き事例

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

DIM ARY (99) '要素100の配列を作る

ARY = [1 to 100] '初期化

配列ARYの値を書き込む

COMMON PRINT #1. ARY

'配列ARYの値を読み取る

COMMON INPUT #1, ARY

PRINT "配列ARY="; ARY

COMMON CLOSE #1

構造体も、メンバに配列を定義できるので、似たような読み書き処理が可能です。

"要素100の配列の読み書き事例(構造体版)

COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1

DEFINE STRUCT INFO

DIM ARY (99) アスポープ 要素100の配列を作る

END STRUCT

STRUCT INFO V / 構造体を宣言

V. ARY = [1 to 100] '初期化

'構造体Vの値を書き込む

COMMON PRINT #1, V

'構造体Vの値を読み取る

COMMON INPUT #1. V

PRINT "構造体V="; V

COMMON CLOSE #1

ここで注意したいのは、グローバル共有との間で、要素100の配列全体の読み書きが発生している 事です。

配列の要素数を1000、10000、と増やしたり、別のコンピュータ間で読み書きを行うようにすると、「たった1コマンド」で、大量の情報量のデータが行き来する事が判ります。

処理上 必要な事なら仕方ありませんが、仮にグローバル共有にある配列の一部を参照したい場合、 このようなやり方は「非常に無駄」な事です。 グローバル共有にある配列の一部を参照したい場合、配列や連想配列ならば、以下のようにして 一部の値のみを読み取る事ができます。

. . .

DIM ARY (99) アストリング 要素100の配列を作る

'配列ARYの一部の値を読み取る

COMMON INPUT #1, ARY(10) 'この例では、添字10の値を読み取っています。

. .

しかし、構造体では、メンバの配列の一部のみを読み取る事はできません。常に構造体全体を読み取る事しかできません。

状況に応じて、構造体を使うケース、配列や連想配列を使うケースを工夫してください。

2.3.11 通信回線切断などのトラブル時の注意

通信回線が断線などの理由で、別コンピュータに対して読み書きに失敗する事態が発生したとします。

通信異常に対して、コマンド発行に対してタイムアウト時間を指定することで、異常事態を検知したい場合は、COMMON OPEN 呼び出し時に「TIMEOUT」パラメータを指定します。

すると、コマンド発行から指定秒数が経過して応答が無い場合に、エラーとなります。

- '192.168.1.1のコンピュータに対して接続
- 'コマンド発行のタイムアウト時間を10秒に設定する

COMMON OPEN ["192.168.1.1"; "TIMEOUT=10"] AS #1

'ここで、ケーブル断線などにより、回線異常が発生したとする

COMMON ERASE #1, MSG\$

- '↑この呼び出しで、タイムアウト時間を経過すると、以下のようなエラーが表示される
- '「Error! &H01000012:ドライバまたはライブラリの呼び出しに失敗しました(システム共有データへの削除ができません(1, 1, リソースが一時的に利用できません, 184))...」

また、COMMON OPEN 呼び出し時に、タイムアウト時間を指定したい場合は、「CONNTIMEOUT」パラメータを指定します。

ここで、ケーブル断線などにより、回線異常が発生したとする

- '192.168.1.1のコンピュータに対して接続
- 'オープン時の接続タイムアウト時間を10秒に設定する
- 'コマンド発行のタイムアウト時間を10秒に設定する

COMMON OPEN ["192.168.1.1"; "CONNTIMEOUT=10"; "TIMEOUT=10"] AS #1

- ↑この呼び出しで、タイムアウト時間を経過すると、以下のようなエラーが表示される
- '「Error! &H01000012:ドライバまたはライブラリの呼び出しに失敗しました(システム共有データ(192.168.1.1:6379)の接続に失敗(1, ホストへの経路がありません))...」

ON ERROR CALL 等で、このエラーを検知して、通信回線が元に戻った後、再度コマンドを発行しようとする時、COMMON OPEN を使って再度接続しなおす必要があります。

この再接続を自動で行いたい場合、COMMON OPEN 呼び出し時に「RECONNECT」パラメータを指定します。

'エラーが発生すると、CB_ERR ルーチンを呼び出すように ON ERROR CALL CB ERR

ERROR ON

"エラーが発生した際の処理ルーチン

SUB CB_ERR(I_ERR, I_ERM\$, I_ERL)

END SUB

- '192.168.1.1のコンピュータに対して接続
- 'コマンド発行のタイムアウト時間を10秒に設定する
- が回通信異常によるエラーが起きていた場合、自動再接続してからコマンドを発行させる COMMON OPEN ["192.168.1.1"; "CONNTIMEOUT=10"; "TIMEOUT=10"; "RECONNECT=1"] AS #1
- 'ここで、ケーブル断線などにより、回線異常が発生したとする

COMMON ERASE #1, MSG\$

↑この呼び出しで、タイムアウト時間を経過すると、エラーが発生して CB_ERR ルーチンにジャンプ

IF G ERR \Leftrightarrow 0 THEN

'前のCOMMON ERASE 呼び出しでエラーが起きていたので、再度実行する

 $G_ERR = 0$

COMMON ERASE #1. MSG\$

` ↑前のコマンドと同じ処理をリトライする

IF G ERR <> 0 THEN

PRINT "再度コマンド発行したが、またエラーなのでプログラム終了します"

END

END IF

END IF

2.3.12 データベースの個数を増減したい時

「COMMON OPEN」のオプション設定で「SELECT」オプションを使うと、異なるデータベース番号にアクセス可能です。これは、数字で指定する、Excelのワークシートのようなものです。

このデータベースの個数はデフォルトが16個で、0から15まで指定可能です。データベースの個数を増やすには、設定ファイルの内容を、一部書き換える必要があります。

Linuxのメニューから端末を開いて、以下の手順で設定ファイルの内容を書き換えた後、コンピュータを再起動してください。

- 1. Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末を選んで、端末を起動する。
- 2. 「su」コマンドを呼び出し、パスワードを入力して、管理者権限を得る。
- 3. 「nano /etc/redis/redis.conf」を入力し、設定ファイルをエディタで開く。
- 4. 「databases 16」と書かれている箇所の、数値の部分を任意の値に書き換える。 (データベースの個数を20に増やしたい場合、「16」を「20」に書き換えます)
- 5. Ctrl+Xキーで終了を選び、Yキーで設定ファイルを保存して終了する。
- 6. 「reboot」コマンドを呼び出し、コンピュータを再起動する。

2.3.13 グローバル共有のデータを全てクリアしたい

グローバル共有のデータを、一旦全てクリアしたい場合、グローバル共有が使用している Redis というソフトウェアが提供している、「redis-cli」コマンドの機能を組み合わせて行えます。

- 1. Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末を選んで、端末を起動する。
- 2. 「redis-cli flushdb」と呼び出す。グローバル共有のデータはクリアされます。 別のデータベース番号を指定したい場合は、「-n 〈db番号〉」を使用します。例えば、データベース番号1 のデータをクリアしたい場合は、「redis-cli -n 1 flushdb」とします。



データのクリアは、Redis の 「FLUSHDB」 コマンドを使用しています。 詳しくは、Redis の コマンド説明を参照ください。

2.3.14 グローバル共有のデータを別のグローバル共有に複製したい

グローバル共有のデータを、別のグローバル共有や別のデータベース番号に複製したい場合、グローバル共有が使用している Redis というソフトウェアが提供している、「redis-cli」コマンドの機能を組み合わせて行えます。

例えば、グローバル共有のデータを「1.2.3.4」のIPアドレスのグローバル共有に複製したい場合、Linuxの端末から、以下のように呼び出します。

(Linuxの端末の起動は、Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末 を選びます)

 $\$ redis-cli --scan \mid xargs redis-cli migrate 1.2.3.4 6379 '' 0 5000 copy replace keys OK

上の例では、「redis-cli --scan」で、グローバル共有の全てのキー名を列挙しつつ、「|(パイプ記号)」で、次のコマンドに処理を引き渡しています。

次の処理は「xargs」コマンドで、後続の「redis-cli」コマンドとパラメータの後に受け取った キー名を連結して実行します。

「redis-cli」コマンドの呼び出しでは、Redisの「MIGRATE」 コマンドを呼び出しており、複製 先のIPアドレスとポート番号、空文字列、データベース番号、タイムアウト時間と、挙動(copy と replace により、上書きコピーする)および複製するキー名を指定しています。



データの複製は、Redis の「MIGRATE」 コマンドを使用しています。 詳しくは、Redis の コマンド説明を参照ください。

参考までに、データベース番号0 にあるデータを、データベース番号1 に複製する場合、以下のように呼び出します。

\$ redis-cli --scan | xargs redis-cli migrate 127.0.0.1 6379 '' 1 0 copy replace keys (error) IOERR error or timeout reading to target instance

コピー先がローカルホスト(127.0.0.1の事)を指定すると、事例のようなエラーメッセージが出ますが、2022年2月時点で既知の問題のようです。動作には支障がありません。

2.3.15 複数のサーバを起動したい

グローバル共有を使ってデータを管理するとき、こっちはテスト用、こっちは本番用。という具合にデータを分けて管理したい時があります。

対応としては、「COMMON OPEN」の「SELECT」オプションを使ってデータベース番号を変えて 管理する方法や、異なるコンピュータにあるグローバル共有を用いる方法が考えられます。

これとは別に、サーバを複数起動して管理する方法があります。

グローバル共有が使用する Redisサーバは、デフォルトでは ポート番号:6379 を使用するように設定されています。

であれば、別のポート番号を使用するように設定する事で、複数の Redisサーバを起動する事が可能となります。



Redis はインメモリで動作するサーバなので、多くの Redis サーバを起動すると、メモリ不足に陥る可能性があります。

複数のサーバ起動には、コンピュータのメモリ資源の状況を考慮しつつ、慎重に運用 を行ってください。

Interface Linux Systemにインストールされている Redisサーバの基本設定では、サーバの設定ファイルは「/etc/redis/redis.conf」にあり、systemd と呼ばれるシステム管理下で動くように設定されています。サービス名はデフォルトで「redis-server.service」です。

(類似に「redis-sentinel.service」という分散向けのサービス名もあります)

「redis-server.service」サービスが稼動中か確認するには、Linux端末から「systemctl」コマンドを呼び出します。

(Linuxの端末の起動は、Linuxのメニューから、アプリケーション>システムツール>端末 を選びます)

以下に、稼動中確認の呼び出し例を示します。

\$ systemctl status redis-server.service

• redis-server.service - Advanced key-value store

Loaded: loaded (/lib/systemd/system/redis-server.service; enabled; vendor pre

Active: active (running) since Wed 2022-02-02 19:49:15 JST; 1 day 15h ago

Docs: http://redis.io/documentation,

man:redis-server(1)

Main PID: 31530 (redis-server)

Status: "Ready to accept connections"

Tasks: 4 (limit: 4915)

CGroup: /system.slice/redis-server.service

└─31530 /usr/bin/redis-server 127.0.0.1:6379

lines 1-10/10 (END)

複数のRedisサーバを起動するには、別のポート番号向けに設定ファイルを用意し、別の名前のサービスを設定してやれば良いです。

設定方法の詳細に関しては、Redisのコミュニティや Linuxのsystemd などの関連情報を参考にしてください。

設定について少々面倒なので、設定ファイルの作成を支援するツールを用意しました。 サンプルプログラムフォルダ(「/usr/share/interface/AJANPro/samples/EXT/EXT」)内に、「make_multiple_service.sh」という、bashスクリプトを用意していますので、Linux端末からroot権限を付与して実行してください。

以下に、呼び出し事例を示します。

\$ sudo bash make_multiple_service.sh

引数:[make_multiple_service.sh]

グローバル共有(redis サーバ)の複数起動用の設定ファイルを作ります

新規に作りたいサーバーのポート番号を指定してください

デフォルトはポート番号 6379 です。それ以外を期待します(推奨は 6380 など)

ポート番号:6380

ポート番号:6380 の設定ファイルを作ります

0K?(v/n):v

ポート番号:6380 の設定ファイルを作ります

+ REDIS_CONF=/etc/redis/redis-6380.conf

... <略>

+ systemctl enable redis-server-6380.service

+ set +x

グローバル共有(redis サーバー)の 6380 ポート向けサーバーの設定を作成しました

サーバーを起動するには、「sudo systemctl start redis-server-6380.service」と入力してください

事例では、ポート番号:6380を使用するよう、デフォルトの設定ファイルを元に、新たな設定ファイルと、新しいサービス名(ここでは「redis-server-6380.service」)を作成しています。

サービスを稼動して、動いているか確認している様子を、以下に事例で示します。

\$ sudo systemctl start redis-server-6380.service user@InterfaceLinuxSystem: ~/AjanProWS/Samples/EXT/EXT\$

systemct1

status

• redis-server-6380. service - Advanced key-value store

Loaded: loaded (/lib/systemd/system/redis-server-6380.service; enabled; vendo

Active: active (running) since Thu 2022-02-03 20:28:45 JST; 15h ago

Docs: http://redis.io/documentation,

man:redis-server(1)

Main PID: 311 (redis-server)

redis-server-6380. service

Status: "Ready to accept connections"

CGroup: /system.slice/redis-server-6380.service

└─311 /usr/bin/redis-server 127.0.0.1:6380

lines 1-9/9 (END)

サービスが稼動する事でサーバが起動したら、AJANからは「COMMON OPEN」でIPアドレスとポート番号を明示する事で、新しいサーバのグローバル共有にアクセスできます。

以下に、ポート番号:6380 のグローバル共有をオープンする事例を示します。

'ポート番号:6380 のグローバル共有をオープンする事例 COMMON OPEN "127.0.0.1:6380" AS #1

これにより、複数のサーバの稼動および、どのサーバのグローバル共有にアクセスするか選択できるようになります。

2.3.16 グローバル共有のデータをバックアップする

グローバル共有のデータを、バックアップしたい場合、データの内容が記録されたファイルと場所の把握と、データの更新を一時停止・再開する必要があります。

グローバル共有が使用している Redis というソフトウェアでは、データのファイルと場所は、設定ファイルに記載されています。

設定ファイル中の どの項目を参照すべきか、以下に事例を示します。

項目	初期値	解説
save	900 1	この項目が""(空文字列)で無ければ、dir 項目と
	300 10	dbfilename 項目は有効です。
	60 10000	
dir	/var/lib/redis	dbfilename 項目のファイルが配置される場所です。
dbfilename	dump.rdb	RDB ファイルと呼ばれるデータファイルが、dir 項目の指す
		フォルダに配置されます。
		このファイルには、ある時点のスナップショット(フルダン
		プ)が記録されます。
appendonly	no	この項目が yes であれば、appendfilename 項目は有効です。
appendfilename	appendonly.aof	AOF ファイルと呼ばれるデータファイルが、dir 項目の指す
		フォルダに配置されます。
		このファイルは、更新内容を追記ログのように記録されま
		す。

データファイルの場所が把握出来たら、Redisサービスを一旦止めて、データファイルのバックアップを行い、サービスを再開します。

\$ systemctl stop redis-server.service # サービスの停止

ここで redis サービスが停止するので、データファイルのバックアップ等を行えばよい。

\$ systemctl start redis-server.service # サービスの開始

2.3.17 グローバル共有モニタの紹介

グローバル共有の読み書きを行うプログラミングを行っていると、現在 どのような値になっているのか確認したい欲求が出てくると思います。

そういった時に、グローバル共有モニタ と呼ぶツールを使用すると、システム上に どのような グローバル変数があり、どのような値になっているか簡単に確認できます。

グローバル共有モニタは、デスクトップ画面上部のメニューバーから「アプリケーション」 \rightarrow 「Interface」 \rightarrow 「AJAN」 \rightarrow 「AJANユーティリティ」 \rightarrow 「グローバル共有モニタ」をクリックします。



起動すると、グローバル共有モニタが起動します。ここで「OPEN」ボタンをクリックすると、以下のようなグローバル共有の名前と値が対になって表示されます。



メニューに隣接して「グローバル共有モニタ マニュアル」があり、グローバル共有モニタの使い方の説明があります。ご参照ください。

第3章 リファレンス

使用できる拡張コマンドの使い方について記載します。

(!)	制限事項については、「注意」に記載しています。
<u>.</u>	使用例は動作を保証するもではありません。 実際の使い方は各種サンプルプログラムを参照してください。

3.1 コマンド一覧

コマンド名	機能
数値・文字列に関する関数・命令	
ARRAY2BINBLK\$	数値配列を任意ブロック形式などの書式化文字列に変換します。
ARRAY2STR\$	数値配列を指定したバイト単位で文字列に変換します。
BINBLK2ARRAY	任意ブロック形式などの書式化文字列を数値配列に変換します。
CBOOL	式の値を、論理型値に変換します。
CDBL	式の値を、倍精度実数値に変換します。
CINT	式の値を、単精度整数値に変換します。
CLNG	式の値を、倍精度整数値に変換します。
CSNG	式の値を、単精度実数値に変換します。
CLOCK2DATETIMESTR\$	CLOCK関数の値を日時文字列に変換します。
CONVBIN	連続量の値(アナログデータ)からバイナリ値(デジタルデータ)に変換
	します。
CONVPHY	バイナリ値(デジタルデータ)から連続量の値(アナログデータ)に変換
	します。
CONVUNIT	値を単位変換します。
DATEADD	日付時刻値に対して、指定した時間間隔に加算した値を返します。
DATETIMESTR2CLOCK	日時文字列を秒単位(CLOCK関数相当)に変換します。
DAY	指定日の日を返します。
FORMAT\$	値を指定した書式に従って文字列変換します。
FORMATDATETIME\$	日付時刻値を指定した書式に従って文字列化します。
HASH\$	文字列に対してハッシュを得ます
HOUR	指定時刻の時を返します。
ICONV\$	文字列に対して、文字コード変換を行います。
JOIN\$	1次元配列の文字列を、挿入記号を間に挟んで、1つの文字列に結合しま
	す。
LCASE\$	文字列中の大文字(半角英字)を小文字に変換します。
LEFT\$	文字列の左側から任意の長さの文字列を抜き出します。
LEFTB\$	文字列の左側から任意のバイト数分の文字列を抜き出します。
MATH ISEQ	2つの数値の差分を取って等値比較を行います
MINUTE	指定時刻の分を返します。
MKUUID\$	UUID文字列を生成します。
MONTH	指定日の月を返します。
PASSWORD_HASH\$	受け取ったパスワード文字列からハッシュ文字列を得ます。
PASSWORD_VERIFY	パスワード文字列と、PASSWORD_HASH\$で得たハッシュの内容が一致して
	いるか確認します。

コマンド名	機能
数値・文字列に関する関数・命令	
RIGHT\$	文字列の右側から任意の長さの文字列を抜き出します。
RIGHTB\$	文字列の右側から任意のバイト数分の文字列を抜き出します。
SECOND	指定時刻の秒を返します。
STR BASE64 DECODE\$	BASE64形式にエンコードされた文字列を、元の文字列にデコード(逆変
	換します。
STR BASE64 ENCODE\$	文字列を、BASE64形式にエンコード(変換)します。
STR DUMP\$	単一値をダンプ文字列化
STR AND\$	文字列同士に対して、論理積(AND)を求めた結果を返します。
STR OR\$	文字列同士に対して、論理和(OR)を求めた結果を返します。
STR XOR\$	文字列同士に対して、排他的論理和(XOR)を求めた結果を返します。
STR IMP\$	文字列同士に対して、包含(IMP)を求めた結果を返します。
STR EQV\$	文字列同士に対して、同値(EQV)を求めた結果を返します。
STR REPEAT\$	文字列を指定回数繰り返し連結した文字列を返します。
STR HAN2ZEN\$	文字列の半角文字を全角文字に変換します。
STR ZEN2HAN\$	文字列の全角文字を半角文字に変換します。
STR HIRA2KATA\$	文字列のひらがな文字をカタカナ文字に変換します。
STR KATA2HIRA\$	文字列のカタカナ文字をひらがな文字に変換します。
STR STARTSWITH	文字列が特定文字列で始まるか判断します。
STR ENDSWITH	文字列が特定文字列で終わるか判断します。
STR REMOVEPREFIX\$	文字列の先頭部分が指定文字列と一致すれば、これを削除します。
STR REMOVESUFFIX\$	文字列の末尾部分が指定文字列と一致すれば、これを削除します。
STR VALIDUTF8	文字列全てがUTF8文字列として妥当であるか判定します。
STR ISALNUM	文字列全てが英数文字であるか判定します。
STR ISALPHA	文字列全てが英文字であるか判定します。
STR ISCNTRL	文字列全てが制御文字であるか判定します。
STR ISDIGIT	文字列全てが数文字であるか判定します。
STR ISGRAPH	文字列全てが表示可能な文字であるか判定します。
STR ISLOWER	文字列全てが小文字であるか判定します。
STR ISPRINT	文字列全てが表示可能な文字(空白含む)であるか判定します。
STR ISPUNCT	文字列全てが表示可能な文字(空白と英数字を含まない)であるか判定
	します。
STR ISSPACE	文字列全てが空白、タブ、行区切りであるか判定します。
STR ISUPPER	文字列全てが大文字であるか判定します。
STR ISXDIGIT	文字列全てが16進数文字であるか判定します。
STR ISASCII	文字列全てがASCII文字であるか判定します。
CHRTYPE	文字列の各文字の情報を得ます。
STR2ARRAY	文字列を指定したバイト単位の数値配列に変換します。
STRDELB\$	文字列の任意の位置から指定したバイト長の文字列を削除します。
STRINSB\$	文字列の任意の位置に指定したバイトデータ文字列を挿入します。
STRREVERSE\$	文字列の並びを逆にします。
STRREVERSEB\$	バイナリ文字列の並びを逆にします。
TRUNC	指定数値を指定位置で切り捨てます。
UCASE\$	文字列中の小文字(半角英字)を大文字に変換します。
UUIDCOMP	WID文字列同士が、同じか比較します。
YEAR	指定日の年を返します。
配列演算に関する関数・命令	<u></u>
DIMAVG	配列の平均を返します。
DIMMEDIAN	配列の中央値を返します。
DIMMAX	配列の最大値を返します。
DIMMIN	
DIMSUM	配列の最小値を返します。
DIMSUM	配列の合計を返します。
DIMOIDEAL	配列の標準偏差値を返します。

コマンド名	機能	
数値・文字列に関する関数・命令		
DIMVARP	配列の分散値を返します。	
DIMVARS	配列の不偏分散値を返します。	
DIMADD	2つの配列の各要素に対して、加算した結果を返します。	
DIMADD\$	2つの文字列配列の各要素に対して、連結した結果を返します。	
DIMSUB	2つの配列の各要素に対して、減算した結果を返します。	
DIMDIV	2つの配列の各要素に対して、割り算した結果を返します。	
DIMMOD	2つの配列の各要素に対して、剰余算した結果を返します。	
DIMMUL	2つの配列の各要素に対して、掛け算した結果を返します。	
DIMNOT	配列の各要素に対して、否定(NOT)を求めた結果を返します。	
DIMAND	2つの配列の各要素に対して、論理積(AND)を求めた結果を返します。	
DIMOR	2つの配列の各要素に対して、論理和(OR)を求めた結果を返します。	
DIMXOR	2つの配列の各要素に対して、排他的論理和(XOR)を求めた結果を返します。	
DIMIMP	2つの配列の各要素に対して、包含(IMP)を求めた結果を返します。	
DIMEQV	2つの配列の各要素に対して、同値(EQV)を求めた結果を返します。	
DIMSHL	配列の各要素に対して、ビット単位に左シフトした結果を返します。	
DIMSHR	配列の各要素に対して、ビット単位に右シフトした結果を返します。	
DIMROL	配列の各要素に対して、ビット単位に左回転した結果を返します。	
DIMROR	配列の各要素に対して、ビット単位に右回転した結果を返します。	
DIMEQ	2つの配列の各要素に対して、等しいか比較を求めた結果を返します。	
DIMNE	2つの配列の各要素に対して、等しくないか比較を求めた結果を 返します。	
DIMLT	2つの配列の各要素に対して、小なりか比較を求めた結果を返します。	
DIMGT	2つの配列の各要素に対して、大なりか比較を求めた結果を返します。	
DIMLTE	2つの配列の各要素に対して、小なりイコールか比較を求めた結果を返します。	
DIMGTE	*** 2つの配列の各要素に対して、大なりイコールか比較を求めた結果を返します。	
DIMIIF	評価用の配列の各要素に対して、結果が真であれば真用の配列値を、偽であれば偽用の配列値を返します。	
DIMIIF\$	評価用の配列の各要素に対して、結果が真であれば真用の文字列配列値 を、偽であれば偽用の文字列配列値を返します。	
DIMCINT	文字列または数値配列から、単精度整数の配列に変換します。変換する 対象をマスク用に配列指定できます。	
DIMCLNG	文字列または数値配列から、倍精度整数の配列に変換します。変換する 対象をマスク用に配列指定できます。	
DIMCSNG	文字列または数値配列から、単精度実数の配列に変換します。変換する 対象をマスク用に配列指定できます。	
DIMCDBL	文字列または数値配列から、倍精度実数の配列に変換します。変換する 対象をマスク用に配列指定できます。	
DIMCSTR\$	数値配列から、数文字に変換した文字列の配列に変換します。変換する 対象をマスク用に配列指定できます。	
DIMFIND	配列に対して、検索値と一致する要素の添字番号を求めます。	
DIMGET	1次元または2次元の数値配列に対して、指定した範囲を部分配列として取り出します。	
DIMGET\$	1次元または2次元の文字列配列に対して、指定した範囲を部分配列として取り出します。	
DIMMAP	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、返された値からなる数値配列を作ります。	

コマンド名	機能	
数値・文字列に関する関数・命令	<u></u>	
DIMMAP\$	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、返された値からなる 文字列配列を作ります。	
DIMREDUCE	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、一つの値にまとめます。	
DIMSET	1次元または2次元の配列に対して、指定領域をコピー元配列で上書きします。	
NUM2BIT	数値をビット単位の配列に分解します。	
BIT2NUM	ビット単位の配列を数値に結合します。	
ONEDIM SORT	数値の1次元配列に対してソートした結果を得ます。	
ONEDIM SORT\$	文字列の1次元配列に対してソートした結果を得ます。	
TWODIM FILTER	2次元の数値配列の指定された添え字の値に対して、指定した関数を呼び出し、結果が真の行ないしは列からなる配列を作ります。	
TWODIM FILTER\$	2次元の文字列配列の指定された添え字の値に対して、指定した関数を呼び出し、結果が真の行ないしは列からなる配列を作ります。	
TWODIM JOIN	2つの数値の2次元配列を指定した結合列を基準に、結合した配列を得ます。	
TWODIM JOIN\$	2つの文字列の2次元配列を指定した結合列を基準に、結合した配列を得ます。	
TWODIM SORT	数値の2次元配列の指定した行/列位置に対してソートした結果を得ます。	
TWODIM SORT\$	文字列の2次元配列の指定した行/列位置に対してソートした結果を得ます。	
TWODIM EXISTS	2つの数値の2次元配列を指定した評価列を基準に、一致した行を抜き出した配列を得ます。	
TWODIM EXISTS\$	2つの文字列の2次元配列を指定した評価列を基準に、一致した行を抜き出した配列を得ます。	
TWODIM NOT EXISTS	2つの数値の2次元配列を指定した評価列を基準に、不一致の行を抜き出した配列を得ます。	
TWODIM NOT EXISTS\$	2つの文字列の2次元配列を指定した評価列を基準に、不一致の行を抜き出した配列を得ます。	
TWODIM TRANSPOSE	2次元の数値配列の行列を入れ替えた配列を得ます。	
TWODIM TRANSPOSE\$	2次元の文字列配列の行列を入れ替えた配列を得ます。	
Python連携に関する関数・命令		
PYOBJ CREATE CODE	Pythonと連携する為のコード文字列を渡して初期化します。	
PYOBJ CALL FUNCTION	Pythonの指定した関数を呼び出します。	
PYOBJ CALL METHOD	Pythonの指定のオブジェクトに対するメソッドを呼び出します。	
PYOBJ CLOSE	Pythonとの連携処理を閉じます。	
オーディオ入出力を使ったアナロ		
SNDOPEN	オーディオ入出力をオープンします。	
SNDCLOSE	オーディオ入出力をクローズします。	
SNDREAD	指定件数をオーディオ入力からアナログ変換し、データ配列を得ます。	
SNDREADLEN	9。	
SNDWRITE	データ配列のデータを、アナログ変換してオーディオ出力します。	
SNDWRITELEN	オーディオ出力の出力バッファの書き込み可能件数を取得します。	
ファイル・フォルダに関する関類		
CURDIR\$	現在のカレントディレクトリのパスを取得します。	
プロセスに関する関数・命令	が1上ツルレンドノイレクドソツハヘと収付しまり。	
	コーンドニノン川巻と大声の国コロボーベはナナ	
GETCOMMANDLINEARGS\$ GETSYSTEMINFO\$	コマンドライン引数を文字列配列形式で得ます。	
<u> </u>	指定した取得IDに対応するシステムに関連する情報を得ます。	
ENVIRON\$	環境変数文字列テーブル内の環境文字列を得ます。	
グローバル共有に関する関数・	前令	

コマンド名	機能			
数値・文字列に関する関数・命令				
COMMON OPEN	グローバル共有機能をオープンします。			
COMMON CLOSE	グローバル共有をクローズします。			
COMMON FREEFILE	使用可能な、グローバル共有の管理番号を得ます。			
COMMON ERASE	グローバル共有に格納された、変数名で指定した内容を削除します。			
COMMON INPUT	グローバル共有から、変数名で指定された値を読み取ります。			
COMMON INPUTR	グローバル共有から、変数名で指定された値を読み取り、成功可否			
	が得られます。			
COMMON READ	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で値を読み取って変			
	数に格納し、成功可否が得られます。			
COMMON PRINT	変数名で指定した値を、グローバル共有に格納します。			
COMMON WRITE	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有に格納し			
	ます。			
COMMON LOCK	グローバル共有に対して、指定した名前でロックを取得します。			
COMMON UNLOCK	グローバル共有に対して、指定した名前でロックを解除します。			
COMMON NOTIFY	グローバル共有を介して、トピック名にメッセージを通知します。			
ON COMMON CALL	グローバル共有を介して、指定したトピック名に合致するメッセー			
	ジを受信するサブルーチンを定義します。			
COMMON ON / OFF	COMMONメッセージ受信の許可、禁止を指定します。			
COMMON CDIM	グローバル共有にある、変数名で指定された配列の次元数を返しま			
	す。			
COMMON GET_DICT_KEYS\$	グローバル共有にある、変数名で指定された連想配列のキー―覧を			
	文字列配列として得ます。			
COMMON HAS_DICT_KEY	グローバル共有にある、変数名で指定した連想配列に対して、指定			
	したキーが存在するか否かを得ます。			
COMMON LDICT	グローバル共有にある、変数名で指定された連想配列に対して登録			
	されているキーの総数を取得します。			
COMMON LDIM	グローバル共有にある、変数名の配列の要素数を返します。			
COMMON UBOUND	グローバル共有にある、変数名で指定された配列の指定した次元の			
	添字最大値を得ます。			
COMMON VARTYPE	グローバル共有にある、変数名で指定した値の型を調べます。			
COMMON DEQUE PUSH	変数名で指定した値を、グローバル共有の両端キューの末尾に追加			
	します。			
COMMON DEQUE LPUSH	変数名で指定した値を、グローバル共有の両端キューの先頭に追加			
	します。			
COMMON DEQUE POP	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの末尾より値			
GOV O A COMPTONIE A POP	を取り出します。			
COMMON DEQUE LPOP	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの先頭より値			
COMMON DEGLIE DACK	を取り出します。			
COMMON DEQUE BACK	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの末尾より値			
COMMON DEQUE EDONT	を参照します。			
COMMON DEQUE FRONT	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの先頭より値			
COMMON DEQUE LEN	を参照します。			
COMMON DEQUE LEN	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの個数を得ま			
COMMON VLIST\$	す。 グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得ます。			
COMMON SWAPDB	グローバル共有の変数名のリストを、又子列配列で得ます。 グローバル共有に対して、指定したデータベースの番号を入れ替え			
COMMON SWAI DB	クローハル共有に対して、指定したゲータペースの番号を八れ替え ます。			
COMMON2 ERASE	」			
COMMON LICASE	クローハル共有に格納された、文子列で指定した変数名の内谷を削除します。			
COMMON2 CDIM	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の次			
Common 2 Comm	一つ、大学のでは、大学のでは、大学のでは、中の配列の人一一である。			
	/山外 にぬしみり。			

AJAN 拡張コマンドリファレンス

コマンド名	機能	
数値・文字列に関する関数・命令	ì	
COMMON2 GET_DICT_KEYS\$	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列 のキー一覧を文字列配列として得ます。	
COMMON2 HAS_DICT_KEY	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列 に対して、指定したキーが存在するか否かを得ます。	
COMMON2 LDICT	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列 に対して、登録されているキーの総数を取得します。	
COMMON2 LDIM	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の要素数を返します。	
COMMON2 UBOUND	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の指 定した次元の添字最大値を得ます。	
COMMON2 VARTYPE	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の値の型を 調べます。	
COMMON2 DEQUE PUSH	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有の両端キューの末尾に追加します。	
COMMON2 DEQUE LPUSH	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有の両端キューの先頭に追加します。	
COMMON2 DEQUE POP		
COMMON2 DEQUE LPOP	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で両端キューの先頭 より値を取り出します。	
COMMON2 DEQUE BACK	グローバル共有から、文字列で指定された変数名で両端キューの末 尾より値を参照します。	
COMMON2 DEQUE FRONT	グローバル共有から、文字列で指定された変数名で両端キューの先 頭より値を参照します。	
COMMON2 DEQUE LEN	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で両端キューの個数 を得ます。	
COMMON2 VLIST\$	グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得ます。	
その他に関する関数・命令		
QRCODE_GET	QRコード作成に必要な情報を得ます。	
拡張コマンドのサブルーチン		
GET_OCR\$	画像ファイルに対して、tesseract コマンドを用いて OCR解析によりテキスト情報を取得します。	

3.2 数値・文字列に関する関数・命令

3. 2. 1 ARRAY2BINBLK\$

関数			
機能	粉値配列を任音ブロ、	ック形式などの書式化文字列に変換します。 	
書式			
章 八 戻り値	大学の		
戻り他	戻り値 < 書式に又子列> 又子列 数値配列を元に、変換書式に従って変換された、書式化された文字列が得られます。		
パラ	1	〈数値配列〉 配列 配列	
メータ	1次元の数値配列を		
	2	〈変換書式 〉	
		別に変換する際に、どのような変換を行うか指定します。	
	複数の指定を、配列で	で与える事ができます。	
	亦始まずで ""	を指定しない時、GPIBやSCPIなどの規格で用いられる、任意ブロッ	
		ength Block Response Data)の文字列に変換します。	
	クカシム(Delilite_L	eligtii block kespolise Data)の文子列に変換しまり。	
	変換書式	効果	
	"int8"	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 8ビット長のバイナ	
		リ値に変換します。	
		数値の範囲は、-128 から +127 までです。	
	"uint8" または	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 8ビット長のバイナ	
	"byte"	リ値に変換します。	
		数値の範囲は、0 から +255 までです。	
	"int16" または	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 16ビット長のバイ	
	"short"	ナリ値に変換します。	
_		数値の範囲は、-32768 から +32767 までです。	
	"uint16"	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 16ビット長のバイ	
		ナリ値に変換します。	
	" " " " " " " " " " " " " " " " " " " "	数値の範囲は、-0 から +65535 までです。	
	"cint" または	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 32ビット長のバイ	
	"int32"	ナリ値に変換します。	
	"clng" または "int64"	任意ブロック形式文字列の変換時、整数値を 64ビット長のバイ	
	"float" or	ナリ値に変換します。	
	"csng"	任意ブロック形式文字列の変換時、実数値を 32ビット長のバイ ナリ値に変換します。	
	"double" or	任意ブロック形式文字列の変換時、実数値を 64ビット長のバイ	
	"cdb1"	ナリ値に変換します。	
	"comma"	数値をカンマ区切りで繋いだ文字列を得ます。	
	- Commo	WIECUT FEW / CMR, ICX 1 / 4 C N G / 0	
備考	任意ブロック形式	式の詳細については、SCPIの規格書などを参照ください。	
VIIIJ		式の文字列から数値配列を得るには、BINBLK2ARRAY 関数を使	
	用します。	TOTAL DAN DONNERS TO THE PROPERTY OF THE PRO	
使用例		([1; 2; 3; 4; 5], "byte")	
~/11/7	, 任意ブロック形式の		
		2 / 1 / 0	

3. 2. 2 ARRAY2STR\$

関数				
機	能	数値配列を指定したバイト単位で文字列に変換します。		
書	式	〈(戻り値)変換文字列〉= ARRAY2STR\$ (〈①数値配列〉[, 〈②有効バイト単位〉])	
戻	り値	戻り値 <変換文字列>	文字列	
		数値配列から指定したバイト単位で文字列に変換します。		
	ペラ	①	配列	
メ	ータ	操作対象の数値配列を指定します。		
		② <有効バイト単位>	数値	
		数値から文字列に変換するバイト単位数を指定します。		
		1 / 2 / 4 / 8 のどれかを選択します。省略すると、1 が採用されます。		
備	考	・ 有効バイト数の指定には、「STR2ARRAY」の分割バイト数を指定すると良い	いです。	
使人	用例1	LIST ARY		
		ARY = STR2ARRAY ("123")		
		PRINT ARRAY2STR\$(ARY)		
		' "123" が出力されます。		
使月	刊例2	'? ARRAY2STR\$(配列, 1) を指定した際の動作と同じ処理を記述した例です。		
		LIST ARY		
		ARY = STR2ARRAY("ABC") ' 文字列から数値配列へ		
		S\$ = ""		
		FOR I=O TO UBOUND (ARY)		
		S\$ = S\$ + CHRB\$(ARY(I))		
		NEXT I		
		PRINT S\$		

3. 2. 3 BINBLK2ARRAY

文			
能	任意ブロック形式などの書式化文字列を数値配列に変換します。		
式	〈(戻り値)数値配列〉	= BINBLK2	ARRAY(〈①書式化文字列〉,〈②変換書式〉)
り値	戻り値		<数値配列>
		えられた文	(字列を元に、変換書式に従って変換された、数値配
	得られます。		
ペラ			〈 書式化文字列 〉 文
ータ	主に、GPIBやSCPI	[などの規模	格で用いられる、任意ブロック形式(Definite-Le
	Block Response D	ata)など、	特定の書式に従って作られた文字列を指定します。
	ロエのとこれ事士の	ナムエリナル	1º 11 71/44
	以下のような書式化 No 項目	、又子列をす	ルートしています。 <mark> 説明</mark>
		ь п/. - - -	
	1 任意ブロッ	10形式	任意ブロックは、"#"で始まる文字列です。 例えば、"#512234xxxx" は、最初の"5" が桁数、
			"12234"が、xxxx の部分のバイト数を表します。
			変換時、xxxxの部分がバイナリ値であるとして、変
			換書式で指定された型単位に、値を取り出して配列
			化します。
	2 カンマ区切	り 文字列	"123, 456, 789" という風に、数値を「,(カンマ)」
		• > > < 1 > 1	記号で区切った文字列です。
			カンマ記号単位に値を取り出して配列化します。
	3 数文字		「,(カンマ)」記号の無い数文字は、配列でない単一
			値の値として扱います。
	式の書式文字列を 項目	、数値とし 説明	ノて扱います。
	2進数数値	″#B″ か	プレフィクスに付くと、2進数として扱います。
		例:"#E	30110″は、&B0110 として扱います。
	8進数数値	"#Q" ま	たは "#0" がプレフィクスに付くと、8進数として扱
		います。	
)57″は、&057 として扱います。
	16進数数値		プレフィクスに付くと、16進数として扱います。
	2011 2 2011		15A"は、&H5Aとして扱います。
	ヘッダ付き数値		. 23V″というような文字列を検知すると、"NDCV"のへ
		ツタ部分	分をスキップして +1.23 の数値部分を扱います。
	2		〈変換書式〉
		列に変換す	
	複数の指定を、配列		
	変換書式	効果	
	"int8"	入力デー	-タは、8ビット長の整数値として扱います。
		配列変換	奥時、単精度整数が得られます。
		数値の筆	色囲は、-128 から +127 までです。
	"uint8" または	入力デー	-タは、8ビット長の整数値として扱います。
	"byte"	配列変換	逸時、単精度整数が得られます。
	-, -,		11130
			色囲は、0 から +255 までです。
	//int16″ または	数値の筆入力デー	

配列変換時、単精度整数が得られます。 数値の範囲は、-32768 から +32767 までです。

 ${\it "short"}$

AJAN 拡張コマンドリファレンス

	"uint16"	入力データは、16ビット長の整数値として扱います。
	Į į	配列変換時、単精度整数が得られます。
	<u> </u>	数値の範囲は、0 から +65535 までです。
	"cint" または	入力データは、32ビット長の整数値として扱います。
	"int32"	配列変換時、単精度整数が得られます。
	"clng" または	入力データは、64ビット長の整数値として扱います。
	"int64"	配列変換時、倍精度整数が得られます。
	"float" or	入力データは、32ビット長の実数値として扱います。
	"csng"	配列変換時、単精度実数が得られます。
	"double" or	入力データは、64ビット長の実数値として扱います。
	"cdb1"	配列変換時、倍精度実数が得られます。
	"big-endian"	入力データから値を読み取る順番を、ビッグエンディアンで行い
		ます。(指定しないと、リトルエンディアンで行います)
備考	任意ブロック形式の	D詳細については、SCPIの規格書などを参照ください。
	・ 数値配列から任意フ	「ロック形式の文字列を得るには、ARRAY2BINBLK\$ 関数を使
	用します。	
使用例	PRINT BINBLK2ARRAY("#1512345", "byte")	
	,画面に、[49, 50, 51	1,52,53] が出力されます。

3. 2. 4 CBOOL

日日本/				
関数				
機能	式の値を、論理型値に変換します。			
書 式	<(戻り値)論理型値> = CB00L(<①式>)			
戻り値	戻り値			
	式の値を、論理型値に変換した値が得られます。			
パラ	① 〈式 〉 式			
メータ	数値・文字列 どちらでも指定できます。			
	文字列で渡す場合、数字として認識できる形式で渡してください。			
	数字に変換できない場合、エラーとなります。			
使用例1	PRINT CBOOL(1), CBOOL(0)			
	TRUE FALSE			
使用例2	PRINT CDBL("1"), CBOOL("0")			
	TRUE FALSE			

3. 2. 5 CDBL

関数	
機能	式の値を、倍精度実数値に変換します。
書 式	〈(戻り値)倍精度実数値〉= CDBL(〈①式〉)
戻り値	戻り値 <倍精度実数値> 数値
	式の値を、倍精度実数値に変換した値が得られます。
パラ	① 〈式〉 式
メータ	数値・文字列 どちらでも指定できます。
	文字列で渡す場合、数字として認識できる形式で渡してください。
	数字に変換できない場合、エラーとなります。
使用例1	PRINT CDBL (123. 45)
	123. 45
使用例2	PRINT CDBL ("123. 45")
	123. 45

3. 2. 6 CINT

関数	
機能	式の値を、単精度整数値に変換します。
書 式	〈(戻り値)単精度整数値〉= CINT(〈①式〉)
戻り値	戻り値 <単精度整数値> 数値
	式の値を、単精度整数値に変換した値が得られます。
パラ	① 〈式〉 式
メータ	数値・文字列 どちらでも指定できます。
	文字列で渡す場合、数字として認識できる形式で渡してください。
	数字に変換できない場合、エラーとなります。
使用例1	PRINT CINT (123. 45)
	123
使用例2	PRINT CINT("123. 45")
	123

3. 2. 7 CLNG

関数		
機能	式の値を、倍精度整数値に変換します。	
書 式	<(戻り値)倍精度整数値> = CLNG(<①式>)	
戻り値	戻り値 <倍精度整数値>	数値
	式の値を、倍精度整数値に変換した値が得られます。	
パラ	① 〈式〉	式
メータ	数値・文字列 どちらでも指定できます。	
	文字列で渡す場合、数字として認識できる形式で渡してください。	
	数字に変換できない場合、エラーとなります。	
使用例1	PRINT CLNG(123.45)	
	123	
使用例2	PRINT CLNG("123.45")	
	123	

3.2.8 CSNG

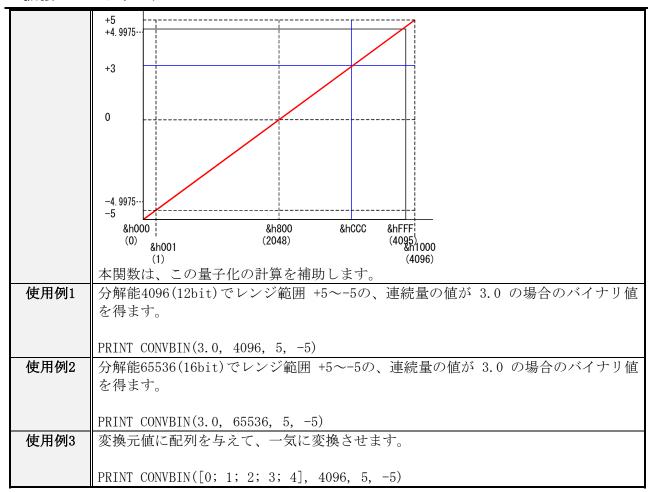
関数				
機能	式の値を、単精度実数値に変換します。			
書 式	〈(戻り値)単精度実数値〉= CSNG(〈①式〉)			
戻り値	戻り値 <単精度実数値>	数値		
	式の値を、単精度実数値に変換した値が得られます。			
パラ	① 〈式〉	式		
メータ	数値・文字列 どちらでも指定できます。			
	文字列で渡す場合、数字として認識できる形式で渡してください。			
	数字に変換できない場合、エラーとなります。			
使用例1	PRINT CDBL (123. 45)			
	123. 45			
使用例2	PRINT CDBL("123.45")			
	123. 45			

3. 2. 9 CLOCK2DATETIMESTR\$

関数			
機能	CLOCK関数の値を日時文字列に変換します。		
書 式	〈(戻り値)日時文字列〉= CLOCK2DATETIMESTR\$(〈①経過秒〉[,〈②オプション〉])		
戻り値	戻り値	<日時文字列> 文字列	
	「年/月/日 時:分:秒」	の形式で文字列を得ます。	
パラ	1	〈 経過秒 〉 数值	
メータ	CLOCK関数で得られる、	経過秒を引数に与えます。	
	2	〈オプション〉 文字列	
	変換時に、ミリ秒、マイ	イクロ秒、ナノ秒の単位まで情報を付加できます。	
	何も指定しないと、秒の	りみです。 	
	12 17 11	内容	
	″m″	ミリ秒単位で得られます。	
	"u"	マイクロ秒単位で得られます。	
	"n"	ナノ秒単位で得られます。	
	"iso8601"	IS08601仕様(基本形式)に変換します。	
		出力する時刻はローカル標準時に合わせます。	
	"iso8601ext"	IS08601仕様(拡張形式)に変換します。	
		出力する時刻はローカル標準時に合わせます。	
備考		3601"と"iso8601ext"は排他の関係です。	
	"m"と"u"と"n"も排他の関係です。		
Marris Seri .		列配列で、"iso8601"と"m"を指定可能です。	
使用例1	? CLOCK2DATETIMESTR\$ (CL		
Ala III bal -		」のような形式で出力が得られます。	
使用例2	, ,	OCK, ["iso8601ext"; "m"])	
	12022-02-24T20:37:50). 495+09:00」のような形式で出力が得られます。	

3. 2. 10 CONVBIN

関数					
機能	連続量の値(アナログデータ)からバイナリ値(デジタルデータ)に変換します。				
書式	<(戻り値)変換後値> = CONVBIN(<①変換元値>, <②分解能>, <③レンジ上限値>, <④				
	レンジ下限値〉[, 〈⑤範囲外オプション〉])				
戻り値	戻り値 				
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	以下の式で、連続量からバイナリ値に量子化変換した、バイナリ値(単精度整数)の配列が得				
	られます。				
	<バイナリ値> = (<分解能> * (<変換元値> - <レンジ下限値>)) / (<レンジ上限値> – レンジ下				
	限値>)				
パラ	(変換元値) 配列 配列				
メータ	変換する元となる連続量の値の配列を与えます。				
	② 数值 数值				
	量子化変換を行う際に用いる指標として、バイナリ値のビット分解能を指定します。				
	例えば、以下のように指定します。				
	12ビット分解能:4096				
	16ビット分解能:65536				
	③ 〈 レンジ上限値 〉 数値 数値 量子化変換を行う際に用いる指標として、連続量のレンジ範囲の上限値を指定します。				
_	重 」 に 数 換 を 1				
	量子化変換を行う際に用いる指標として、連続量のレンジ範囲の下限値を指定します。 ⑤ 〈範囲外オプション 〉 数値				
	上阪値と「阪値の単価を超えるような、変換元値が与えられた原の挙動を指定しより。 計算式の関係上、変換元値に与えられる上限値は、レンジ上限値 – ILSB になる為のオプシー				
	ョンです。				
	範囲外オプション値 挙動				
	0 変換結果が、バイナリ値の上限から下限を超えるとエ				
	ラーとします。				
	2 変換元値にレンジ上限値を与えた時のみ、バイナリ値				
	の上限値になるように補正します。				
	省略時、この設定が採用されます。 2 変換結果が、バイナリ値の上限を越えると上限値に、				
	2 変換結果が、バイナリ値の上限を越えると上限値に、 バイナリ値の下限を下回ると下限値になるように補正				
_					
備考	・ CONVPHY で、バイナリ値から連続量を得る事ができます。				
VIII J	 変換結果の値が、指定した分解能の範囲外になるとエラーとなります。 				
	• C.00 / 0 / 0				
解説	コンピュータで電圧や電流などの連続量(アナログデータ)を扱う際、例えば 3Vは バ				
74, 70=	イナリ値(デジタルデータ)で &hOCCC とする。というように量子化して扱います。				
	関係図で表すと、以下のようになります。				
	п				



3. 2. 11 CONVPHY

関数	
機能	バイナリ値(デジタルデータ)から連続量の値(アナログデータ)に変換します。
書式	〈(戻り値)変換後値〉 = CONVPHY (<①変換元値>, 〈②分解能>, 〈③レンジ上限値>, 〈④
	レンジ下限値〉)
戻り値	戻り値 < 変換後値> 配列
	以下の式で、バイナリ値から連続量へ量子化変換した、連続量の値(倍精度実数)の配列が得
	られます。
	 <アナログ値> = (<レンジ下限値> - <レンジ上限値>) * <変換元値> / <分解能> + <レンジ下限
	(
パラ	① 〈変換元値 〉 配列
メータ	変換する元となるバイナリ値の配列を与えます。
	② 〈分解能 〉 数值 】
	量子化変換を行う際に用いる指標として、バイナリ値のビット分解能を指定します。
	例えば、以下のように指定します。
	12ビット分解能:4096 16ビット分解能:65536
	③ 〈 レンジ上限値 〉 数値
	■・・・・② -
	(4) 〈レンジ下 限値 〉 数値
	量子化変換を行う際に用いる指標として、連続量のレンジ範囲の下限値を指定します。
備考	・ CONVBIN で、連続量からバイナリ値を得ることができます。
	・ 変換結果の値が、指定したレンジの範囲外になるとエラーとなります。
	•
使用例1	分解能4096でレンジ範囲 +5~-5の、バイナリ値が &HCCCの場合の連続量の値を得ま
	す。
	DRINT CONVDITY (*NCCC 4006 5 5)
 使用例2	PRINT CONVPHY(&HCCC, 4096, 5, -5) 変換元値に配列を与えて、一気に変換します。
区/円7月2	友 大小胆に比がてすんし、 X(に友)大しより。
	PRINT CONVPHY([&h000 &h333 &h666 &h999 &hCCC &hFFF], 4096, 5, -5)
	л. — — — — — — — — — — — — — — — — — — —

3. 2. 12 CONVUNIT

値を単位変換します。
〈(戻り値)変換後値〉= CONVUNIT(〈①変換元値〉,〈②変換元単位名〉,〈③変換後単位名
>)
戻り値 <変換後値> 配列
単位変換した後の値配列が得られます。
② 変換元値 〉 配列
単位変換する元となる値の配列を与えます。
② 〈変換元単位名〉 文字列
<変換元値>の単位名を示します。
指定可能な単位名は「<単位変換名一覧>」を、可能な組み合わせは、グループ項同士で
可能です。。
③ 〈変換後単位名 〉 文字列
単位変換する単位名を示します。
指定可能な単位名は「<単位変換名一覧>」を、可能な組み合わせは、グループ項同士で
可能です。
•
45°(度)の値を、ラジアン値に変換します。
PRINT CONVUNIT(45, "deg", "rad")

3.2.12.1 <単位変換名一覧>

グループ	単位名	項目	説明
A	"rad"	ラジアン	
	"deg"	度(°)	
В	"mm"	ミリメートル	
	"cm"	センチメートル	
	"m"	メートル	
	"km"	キロメートル	
	"in"	インチ	
	"ft"	フィート	
	"yd"	ヤード	
	"mi"	マイル	
С	"kg"	キログラム	
	"1b"	ポンド	
D	"celsius"	摂氏	
	″fahrenheit″	華氏	

変換前単位名と変換後単位名で、指定可能な組み合わせは、同じグループ項のみ可能です。

3. 2. 13 DATEADD

関数						
機能	日付時刻値に対して、指定した時間間隔に加算した値を返します。					
書 式	<(戻り値)日付時刻値〉= DATEADD(<①指定時間間隔>, <②加算値>, <③日付時刻値>)					
戻り値	戻り値 <日付時刻値> 日付時刻値> 日付時刻値> 日付時刻値で得られます。					
パラ	(指定時間間隔) 文字列					
メータ	日付時刻値に対して、加算する対象を文字列で指定します。					
	設定値 内容					
	уууу 年に対して、加算します。					
	m 月に対して、加算します。					
	d 日に対して、加算します。					
	h 時に対して、加算します。					
	n 分に対して、加算します。					
	s 秒に対して、加算します。					
	② <加算値> 数値 数値 数値 2 数値 2 数値 2 数値 2 数値 2 数値 2 2 2 2 2 2 2 2 2					
	指定時間間隔で指定した対象に対して、加算する値を指定します。 負数を指定すると、減算できます。					
	- 貝数で相定するこ、 (水昇 くさよす。 -					
	加算対象とする、日付時刻型の値を指定します。					
使用例	PRINT DATEADD("yyyy", 1, CDATETIME("2020/4/1"))					
	'「2021/04/01 00:00:00」が表示されます。					
	PRINT DATEADD("m", -1, CDATETIME("2020/10/31"))					
	'「2020/09/30 00:00:00」が表示されます。					
	PRINT DATEADD("s", 20, CDATETIME("2020/10/31 01:02:03"))					
	'「2020/10/31 01:02:23」が表示されます。					

3. 2. 14 DATETIMESTR2CLOCK

関数			
機能	日時文字列を秒単位(CLOCK関数相当)に変換します。		
書 式	<(戻り値)経過秒>= DATETIMESTR2CLOCK(〈①日時文字列〉)		
戻り値	戻り値 <経過秒>	数値	
	CLOCK関数と同じ、経過秒の形式で値を得ます。		
	「年/月/日 時:分:秒」の形式で文字列を得ます。		
パラ	① 〈日時文字列〉	文字列	
メータ	CLOCK2DATETIMESTR\$ で得られた日時文字列を指定します。		
備考	・ IS08601形式の文字列を指定できます。		
	また、区切り記号に "T" でなく ""(空白) を指定する事も可能です。(RFC3339 で		
	サポートされる形式に相当します)		
使用例	SEC = DATETIMESTR2CLOCK("2022/02/01 18:37:09")		
	'日時文字列から、秒換算の値が得られます。		

3. 2. 15 DAY

関数			
機能	指定日(文字列)の日を返します。		
書 式	〈(戻り値)日〉= DAY(〈①年月日文字列〉[,〈②エラー送出フラグ〉])		
戻り値	戻り値 <日>	数值	
	年月日文字列の日数の値を返します。		
パラ	① <年月日文字列>	文字列	
メータ	日を求める日付(「年/月/日」の形式)を指定します。		
	② <エラー送出フラグ>	真偽値	
	TRUEを指定すると、不正な年月日文字列を渡すと、エラーとします。		
	FALSEを指定すると、不正な年月日文字列の場合に、0を返します。		
	省略すると、FALSEとします。		
備考	〈年月日文字列〉が日付でない場合、0を返します。		
	閏年ではない年に閏日を入力すると、翌月の初日に繰り越されます。		
使用例1	NUM = DAY("2013/07/15")		
	入力値 2013/07/15 の日付部分 15 を変数NUMへ代入します。		

3. 2. 16 FORMAT\$

関数	
機 能 値を指	定した書式に従って文字列変換します。
書 式 ((戻り	值) 変換文字列〉 = FORMAT\$(〈①値〉,〈②変換書式〉)
戻り値 戻り値	i <変換文字列> 文字列
書式	に沿って文字列変換された結果を得ます。
パラ ①	<値>
メータ 文字	三列変換する対象となる値を指定します。
2	<変換書式> 文字列
値を	文字列変換する際の書式を指定します。
値が	数値の場合、「3.2.16.1 <format\$の数値表示書式表>」を参照ください。</format\$の数値表示書式表>
値が	日付時刻型の場合、「3.2.16.2 <format\$の日付時刻表示書式表>」を参照く</format\$の日付時刻表示書式表>
ださ	
値が	「文字列の場合、「3.2.16.3 <format\$の文字列表示書式表>」を参照ください。</format\$の文字列表示書式表>
)単位の区切り記号を表示します。
	MAT\$(123456789, "##, ##0.0")
	56, 789. 0
	マント表示します。
	MAT\$ (0. 25, "0. 00%")
25. 009	
	分: 秒表示します。
	MAT\$(CDATETIME("17:04:23"), "AMPM hh:nn:ss")
	05:04:23 月/日表示します。
	月/日表小しまり。 MAT\$(CDATETIME("2019/05/27"), "yy/mm/dd")
19/05	
	表示します。
	MAT\$(CDATETIME("2020/05/27"), "ggge m/d")
令和2	
	(プラン・
	MAT\$("hello AJAN", ">")
HELLO	

3.2.16.1 <FORMAT\$の数値表示書式表>

文字	効果
なし	指定した数値をそのまま表示
0	桁位置が桁数を指定する時に使う。"0"一つで1桁分の数値を表す。
	数値の桁数が満たない場合、"0"が付加される。
#	桁位置が桁数を指定する時に使う。"#"一つで1桁分の数値を表す。
	数値の桁数が満たない場合、省略される。
•	"0"と"#"を組み合わせて、小数点の位置を指定する際に使用。
%	数値を 100 倍して、パーセント記号("%")を付ける。
,	1000 単位の区切り記号を挿入する。
	","の前後に"0" または"#"を付加する事。
	なお、整数部の右端に","を1つ以上指定すると、1000単位で割った値とな
	る。

¥	すぐ後に続く1文字を、そのまま表示
w"	"(ダブルクォーテーション)で囲った文字列を、そのまま表示

3.2.16.2 <FORMAT\$の日付時刻表示書式表>

文字	効果
С	yyyy/mm/dd h:nn:ss と同じ。
d	日付を表示。
dd	日付を表示。但し、1 桁の場合、0 が付加。
ddd	曜日を英語の省略形で表示。
dddd	曜日を英語で表示。
aaa	曜日を日本語の省略形で表示。
aaaa	曜日を日本語で表示。
ddddd	yyyy/mm/dd という風に表示。
dddddd	yyyy 年 mm 月 dd 日 という風に表示。
W	曜日を表す数値で表示。日曜が1、土曜が7。
m	月を表示。
mm	月を表示。但し、1 桁の場合、0 が付加。
mmm	月の名前を英語の省略形で表示。
mmmm	月の名前を英語で表示。
q	四半期を表す数値を表示。1-4。
g	元号の頭文字を表示。M, T, S, H, R
gg	元号の先頭1文字を表示。明、大、昭、平、令
ggg	元号を表示。明治、大正、昭和、平成、令和
е	元号に基づく和暦の値を表示。
ee	元号に基づく和暦の値を表示。但し、1桁の場合、0が付加。
уу	西暦の下2桁を表示。
уууу	西暦の4桁全てを表示。
h	時間を表示。
	なお、AM/PM 表記になると 0-11、そうでないと 0-23。
hh	時間を表示。但し、1 桁の場合、0 が付加。
n	分を表示。
nn	分を表示。但し、1 桁の場合、0 が付加。
S	秒を表示。
SS	秒を表示。但し、1 桁の場合、0 が付加。
ttttt	h:nn:ss という風に表示。
AM/PM	午前はAM、午後はPMで表示。
am/pm	午前は am、午後は pm で表示。
A/P	午前はA、午後はPで表示。
a/p	午前はa、午後はpで表示。
AMPM	午前は「午前」、午後は「午後」で表示。

3.2.16.3 < FORMAT \$の文字列表示書式表>

文字	効果
@	一つの文字またはスペースを表示。
&	一つの文字を表示。
<	小文字にする。

AJAN 拡張コマンドリファレンス

>	大文字にする。
!	文字を右から左でなく、左から右の順に埋める。

3. 2. 17 FORMATDATETIME\$

関数					
機能	日付時刻値を指定した書式に従って文字列化します。				
書 式	〈(戻り値)日付時刻文字列〉= FORMATDATETIME\$(〈①日付時刻値〉[,〈②変換設定値〉])				
戻り値	戻り値 <日付時刻文字列> 文字列				
	書式に沿って文字列変換された結果を得ます。				
パラ	(日付時刻値)	日付時刻			
メータ	文字列変換する対象となる日付時刻値を指定します。	口 竹 时刻			
/ /	②	数值			
	以下に対応しています。				
		事例			
	1 RFC1123 仕様に変換します。日付の間を"-"で合わせます。	"Wed, 25-Jul-2018 10:32:49 GMT"			
	出力する時刻はUTC(協定世界時)に合わせます。	, ,			
	2 RFC1123 仕様に変換します。日付の間を"-"で合わせます。 出力する時刻はローカル標準時に合わせます。	"Wed, 25-Jul-2018 19:32:49 JST"			
	3 RFC1123 仕様に変換します。	"Wed, 25 Jul 2018 10:32:49 GMT"			
	出力する時刻はUTC(協定世界時)に合わせます。				
	4 RFC1123 仕様に変換します。 出力する時刻はローカル標準時に合わせます。	"Wed, 25 Jul 2018 19:32:49 JST"			
	5 ISO8601 仕様(基本形式)に変換します。	"20180725T193249+0900"			
	出力する時刻はローカル標準時に合わせます。				
	6 IS08601 仕様(拡張形式)に変換します。 出力する時刻はローカル標準時に合わせます。	"2018-07-25T19:32:49+0900"			
	1	"2018/07/25 10:32:49"			
	8 IS08601 仕様(基本形式)に変換します。	"20180725T103249Z"			
	出力する時刻はUTC(協定世界時)に合わせます。				
	9 IS08601 仕様(拡張形式)に変換します。	"2018-07-25T10:32:49Z"			
	出力する時刻は UTC (協定世界時) に合わせます。 15 5 の設定に対し、ミリ秒表記が付加されます。	"20180725T193249. 345+0900"			
	16 6の設定に対し、ミリ秒表記が付加されます。	"2018-07-25T19:32:49.345+0900"			
	17 7の設定に対し、ミリ秒表記が付加されます。	"2018/07/25 10:32:49.345"			
	18 8の設定に対し、ミリ秒表記が付加されます。	"20180725T103249. 345Z"			
	19 9の設定に対し、ミリ秒表記が付加されます。	"2018-07-25T10:32:49.345Z"			
	省略時、設定値は「1」として扱われます。				
	DATETIME D				
	D = DATE\$				
	D = DATE3 $D = D + CDATETIME (TIME$)$				
使用例					
	? FormatDateTime\$(D)				
	, "Wed, 25-Jul-2018 10:32:49 GMT"のような出力が彳	事られます。			
	, _ : J :	Wed, 25-Jul-2018 10:32:49 GMT のような出力が得られます。			

3. 2. 18 HASH\$

関数				
機能	文字列に対してハッシュを得ます			
書 式	<(戻り値)ハッシュ値> = HASH\$(〈①ID〉,〈②元文字列〉)			
戻り値	戻り値 <ハッシュ 値 > 文字列			
	元文字列に対してハッシュした結果が、バイナリ文字列形式で得られます。			
パラ	①	7407221177	<id></id>	文字列
メータ	■ ハッシュを停■ 以下が指定可	る為のアルゴリズムを、 	又子列形式 で指定し	ます。
	ID 引数	形です。 アルゴリズム	戻り値のサイズ	
	SHA512	SHA-2、512bit 長	戻り値のサイス	
	SHA384	SHA-2、384bit 長	48	
	SHA256	SHA-2、256bit 長	32	
	SHA224	SHA-2、224bit 長	28	
	SHA1	SHA-1、160bit 長	20	
	MD5	MD5	16	
	WH1RLP00L	Whirlpool	64	
		•	•	
	② 対象とかろ文		元文字列>	文字列
備考				·合、使用するアルゴリズ
	ムをよくよく検討してください。			
	一般に、MD5アルゴリズムは、脆弱性が見つかっている事が知られています。			
	・得られるハッシュ値はバイナリ文字列形式のため、そのままPRINTすると文字化けし			
	ます。			
使用例		A\$ = HASH\$("SHA512", "hello Interface world")		
	B\$ = HASH\$("SHA512", "hello Interface WORLD")			
	IF A\$ = B\$ THEN			
	PRINT "ハッシュ同士の比較は一致しました"			
	ELSE			
	PRINT "ハッシュ同士の比較は不一致でした" END IF			
	בווע וו			
	SHA-512を使って、文字列「"hello Interface world"」および「"hello Interface			
	WORLD"」のハッシュ値を得ます。			
	その後、得られ	たハッシュ値を比較して	ています。	

3. 2. 19 HOUR

関数		
機能	指定時刻(文字列)の時を返します。	
書式	((戻り値)時> = HOUR((①時分秒文字列> [, 〈②エラー送出フラグ>])	
戻り値	戻り値 <時>	数値
グノ IIE	時分秒文字列の時の値を返します。	
	1474 D 26 1 2 1 2 1 2 1 2 2 2 2 3 1 3 1 3 1 3 1 3	
パラ	① <時分秒文字列>	文字列
メータ	時を求める時刻(「時:分:秒」の形式)を指定します。	
	② <エラー送出フラグ>	真偽値
	TRUEを指定すると、不正な時分秒文字列を渡すと、エラーとします。	
	FALSEを指定すると、不正な時分秒文字列の場合に、0を返します。	
	省略すると、FALSEとします。	
備考	〈時分秒文字列〉が時刻でない場合、0を返します。	
	時刻の書式は、24時間表記とします。	
	閏年ではない年に閏秒を入力すると、翌分の0秒に繰り越されます。	
使用例	NUM=HOUR("14:03:15")	
	変数NUMに指定時刻「14:03:15」から時の部分「14」を代入します。	

3. 2. 20 ICONV\$

関数					
機能	文字列に対して、文字コード変換を行います。				
書 式	〈(戻り値)変換後文字列〉= ICONV\$(〈①変換元文字列〉,〈②変換先コードセット名〉,〈				
	③変換元コードセット名〉[,〈④オプション〉])				
戻り値	戻り値 <変換後文字列> 文字列				
	変換先コードセット名で指定した、文字コード変換された文字列が得られます。				
パラ	①				
メータ	文字コード変換したい元の文字列を指定します。				
	② <変換先コードセット名> 文字列				
	文字コード変換したい先の、コードセット名を指定します。				
	代表的なコードセット名は、「UTF-8」や「CP932」です。				
	③ <変換元コードセット名> 文字列				
	文字コード変換したい元の、コードセット名を指定します。				
	④ <オプション> 文字列				
	文字変換時の特殊な動作を指定できます。				
	省略時は、通常の動作を行います。				
	オプション動作				
	"ignore" 文字変換できない時、先頭から変換できない文字をスキッ				
	プレ、次の文字から変換を挑戦します。				
	全ての文字が変換できないと、空文字列が得られます。				
備考	・指定可能なコードセットは、Linuxの端末上で「iconvlist」コマンドで確認してください。				
VIII J	・Interface Linux SystemおよびAJANのコードセットは「UTF-8」です。				
	それ以外のコードセットに変換した文字列をPRINTした場合、得られる表示結果は不定です。				
	多くの場合、文字化けと呼ばれる文字が判読できない現象を起こします。				
	・参考までに、日本語表示されたWindowsで、一般によく使用されるコードセットは「CP932」 です。				
	・IDE上で UTF-8以外のコードセットに変換した文字列を表示した場合、Linux端末上で実行し				
	た結果と異なる事があります。				
	(IDEの場合、表示自体が行われない場合が観測されています)				
	・変換元文字列の末尾が、変換できない文字の場合、それ以上の変換が行われない場合があり				
	ます。				
使用例1	S\$ = ICONV\$("テスト", "CP932", "UTF-8")				
	STR_FWRITEALL "memo.txt", S\$				
	"テスト"という UTF-8形式の文字列を、CP932形式のエンコード文字列にして、S\$に代				
	入します。				
	次に、STR_FWRITEALLコマンドで、変換した文字列を"memo.txt"ファイルに書き込みま				
	す。このファイルは、日本語環境のWindowsで読めます。				
使用例2	S\$ = "おはようございます"				
	¹ → 先頭2バイト目から文字列を取り出しているので、不正なUTF-8文字列です。				
	S2\$ = MIDB\$(S\$, 2)				
	'不正なUTF-8文字列を、"ignore"オプションで、正常な文字列を取り出します。				
	S3\$ = ICONV\$(S2\$, "UTF-8", "UTF-8", "ignore")				
	PRINT S3\$ '「はようございます」が表示されます				
	不正なUTF-8文字列から、正常なUTF-8文字列を取り出す呼び出し事例です。				

3. 2. 21 JOIN\$

関数			
機能	1次元配列の文字列を、挿入記号を間に挟んで、1つの文字列に結合します。		
書 式	〈(戻り値)結合後文字列〉= JOIN\$(〈①文字列配列〉[, 〈②結合文字列〉])		
戻り値	戻り値 <結合後文字列> 文	字列	
	1次元配列の文字列を、挿入記号を間に挟んで、1つの文字列に結合した文字列を	返し	
	ます。		
パラ	①	配列	
メータ	結合対象となる文字列の1次元配列。		
	② <結合文字列> 文	字列	
	文字列と文字列の間に挟む結合文字列。		
	省略すると、1文字の空白("")となります。		
使用例1	DIM A\$(3)		
	A\$(0) = "a"		
	A\$(1) = "b"		
	A\$(2) = "c"		
	A\$(3) = "d"		
	AA\$ = JOIN\$ (A\$, "+")		
	A\$の配列の各文字列に「+」の文字を追加		
	$\lceil a+b+c+d \rfloor$		

3. 2. 22 LCASE\$

日日本仁	
関数	
機能	文字列中の大文字(半角英字)を小文字に変換します。
書 式	<(戻り値)小文字文字列> = LCASE\$(<①文字列>)
戻り値	戻り値 <小文字文字列> 文字列
	文字列中の大文字(半角英字)を小文字に変換した結果が得られます。
パラ	① 文字列> 文字列
メータ	変換対象の文字列を指定します。
備考	小文字を大文字に変換するには「UCASE\$」を使用します。
使用例1	SMP\$=LCASE\$("SAMPLE")
	変数SMP\$へ指定値「SAMPLE」を小文字へ変換した値 「sample」を代入します。
使用例2	SMP\$=LCASE\$("samPLE")
	変数SMP\$へ指定値「samPLE」を小文字へ変換した値 「sample」を代入します。

3. 2. 23 LEFT\$

関数	
機能	文字列の左側から任意の長さの文字列を抜き出します。
書 式	〈(戻り値)抜き出し後文字列〉= LEFT\$(〈①文字列〉,〈②抜き出す文字数〉)
戻り値	戻り値 <抜き出し後文字列> 文字列
	文字列の左側から任意の長さの文字列を抜き出した文字列が得られます。
パラ	①
メータ	抜き出し対象の文字列を指定します。
	② <抜き出す文字数> 数値
	抜き出す文字列の長さを0以上で指定します。
	〈文字列〉の長さより大きい場合、〈文字列〉をそのまま返します。
使用例1	SMP\$=LEFT\$ ("SAMPLE", 4)
	SMP\$へ指定文字列「SAMPLE」を左から順に4文字抜き出した値「SAMP」を代入します。
使用例2	SMP\$=LEFT\$("あいう", 4)
	指定文字列「あいう」の文字数「3」に対し、抜き出す文字数「4」が上回っているので、文
	字列「あいう」をそのまま変数SMP\$へ代入します。

3. 2. 24 LEFTB\$

文字列の左側から任意のバイト数分の文字列を抜き出します。
〈(戻り値)抜き出し後文字列〉= LEFTB\$(〈①文字列〉,〈②抜き出すバイト数〉)
戻り値 <抜き出し後文字列> 文字列
文字列の左側から任意のバイト数分の文字列を抜き出した文字列が得られます。
(文字列) 文字列
抜き出し対象の文字列を指定します。
②
抜き出す文字列の長さを0以上のバイト数単位で指定します。
〈文字列〉の長さより大きい場合、〈文字列〉をそのまま返します。
・ この関数は、文字列のデータをバイトデータとして扱う為に用意されています。
・ 得られる値は文字列形式ですが、PRINT文などで表示できない場合があります。
(PRINT文で表示するには、UTF-8形式の文字列である必要があります)
SRC\$=CHRB\$ (0) +CHRB\$ (1) +CHRB\$ (2) +CHRB\$ (3)
SMP\$=LEFTB\$(SRC\$, 2)
SRC\$は、4バイトのバイトデータ(文字列形式)です。
LEFTB\$により、先頭2バイトのバイトデータを抜き出し、SMP\$には「CHRB\$(0)+CHRB\$(1)」
のバイトデータが得られます。

3. 2. 25 MATH ISEQ

日日本仁			
関数			
機能	2つの数値の差分を取って等値比較を行います		
書 式	<(戻り値)判定値>= MATH ISEQ(<①左辺値>, <①右辺値> [, <②許容値>])		
戻り値	戻り値 <判定値>	真偽値	
	〈左辺値〉と〈右辺値〉の差分を取って、〈許容値〉の範囲内にあれば、		
	等値と見なし TRUE を返します。そうでなければ FALSEを返します。		
パラ	① <左辺値>, <右辺値>	数値	
メータ	等値比較を行う値の対象です。		
	② < 許容値 >	数值	
	等値比較に用いる許容値です。		
	指定しない場合、〈左辺値〉,〈右辺値〉の計算機イプシロンが用いられます。		
備考	・ 等値判定を行う際は、許容値の指定に注意してください。		
	実数演算は、一般的に、大きな値を用いると誤差が大きくなります。		
	・ 計算機イプシロンとは、実数(浮動小数点数)において、1より大きい最小の値と、		
	1との差を指します。		
	・ 左辺値と右辺値に配列を指定すると、配列の各値と等値比較します。		
	この時、2つの配列の要素数を合わせてください。		
法田房	? MATH ISEQ(1.0 - 0.9, 0.1)		
使用例	TRUE		

3. 2. 26 MINUTE

関数	
機能	指定時刻(文字列)の分を返します。
書 式	〈(戻り値)分〉= MINUTE(〈①時分秒文字列〉[, 〈②エラー送出フラグ〉])
戻り値	戻り値 <分> 数値
	時分秒文字列の分の値を返します。
パラ	(中分秒文字列) (本)
メータ	時を求める時刻(「時:分:秒」の形式)を指定します。
	② <エラー送出フラグ> 真偽値
	TRUEを指定すると、不正な時分秒文字列を渡すと、エラーとします。
	FALSEを指定すると、不正な時分秒文字列の場合に、0を返します。
	省略すると、FALSEとします。
備考	〈文字列〉が時刻でない場合、0を返します。
	時刻の書式は、24時間表記とします。
	閏年ではない年に閏秒を入力すると、翌分の0秒に繰り越されます。
使用例1	NUM = MINUTE("14:03:15")
	変数NUMにMINUTEの実行結果3を代入します。

3. 2. 27 MKUUID\$

関数	
機能	UUID文字列を生成します。
書 式	<(戻り値)UUID文字列〉= MKUUID\$()
戻り値	戻り値 <uuid文字列>文字列</uuid文字列>
	UUID文字列を生成して得ます。
備考	・UUID(Universally Unique Identifier)は、ソフトウェア上でオブジェクトを一意に
	識別する為の識別子です。
	128ビット長の数値ですが、この関数では、使用例のような文字列を返します。
	・UUID値の比較を行うには、UUIDCOMP 関数を使用してください。
使用例	? MKUUID\$()
	0aeeca8e-eab5-4c2d-8510-6e55cadcde7d
	'↑上の出力事例は、実際には呼び出し毎に値が変わります。

3. 2. 28 MONTH

関数		
機能	指定日(文字列)の月を返します。	
書 式	〈(戻り値)月〉= MONTH (〈①年月日文字列〉[, 〈②エラー送出フラグ〉])	
戻り値	戻り値 <月>	数値
	年月日文字列の月の値を返します。	
パラ	<年月日文字列>	文字列
メータ	月を求める日付(「年/月/日」の形式)を指定します。	,
	② <エラー送出フラグ>	真偽値
	TRUEを指定すると、不正な年月日文字列を渡すと、エラーとします。	
	FALSEを指定すると、不正な年月日文字列の場合に、0を返します。	
	省略すると、FALSEとします。	
備考	〈年月日文字列〉が日付でない場合、0を返します。	
	閏年ではない年に閏日を入力すると、翌月の初日に繰り越されます。	
使用例1	NUM = MONTH("2013/07/15")	
	変数NUMにMONTHの実行結果7を代入します。	

3. 2. 29 PASSWORD_HASH\$

関数	
機能	受け取ったパスワード文字列からハッシュ文字列を得ます。
書 式	〈(戻り値)ハッシュ文字列〉= PASSWORD_HASH\$(〈①パスワード文字列〉)
戻り値	戻り値 <ハッシュ文字列> 文字列
	パスワード文字列からハッシュ文字列を得ます。
パラ	①
メータ	パスワードとなる文字列を与えてください。
使用例	? PASSWORD_HASH\$("hello")
	パスワード文字列 "hello" のハッシュ文字列が表示されます。 "\$2b\$12\$WB4vvIwbx.oQevVP9Tb/300wfIBg8vGcknkonnsEp0LgHRUKD48zy" のような文字列 が得られます。(内容は、実行毎に変化します)

3. 2. 30 PASSWORD_VERIFY

関数			
機能	パスワード文字列と、PASSWORD_HASH\$で得たハッシュの内容が一致しているか確認しま		
	す。		
書 式	〈(戻り値)一致結果〉= PASSWORD_VERIFY(〈①パスワード文字列〉,〈②ハッシュ文字列		
	>)		
戻り値	戻り値 <一致結果> 数値		
	ハッシュ文字列とパスワード文字列の内容が一致すれば1を、		
	不一致ならば0が返ります。		
パラ	① <パスワード文字列> 文字列		
メータ	パスワードとなる文字列を与えてください。		
	② <ハッシュ 文字列> 文字列		
	PASSWORD_HASH\$ で得たハッシュ文字列を与えてください。		
注意	・パスワード文字列に、PASSWORD_HASH\$の値を与えてはいけません。不正な動作		
	を起こします。		
使用例	A\$ = PASSWORD_HASH\$("hello")		
	LINE INPUT "パスワードを入力>"; B\$		
	?"一致確認="; PASSWORD_VERIFY(B\$, A\$)		
	パスワード文字列 "hello" のハッシュ文字列をA\$に取得しておき、		
	LINE INPUTで、ユーザーにパスワード文字列を入力してもらいます。		
	その内容が一致しているか、確認して結果を表示します。		

3. 2. 31 RIGHT\$

関数			
機能	文字列の右側から任意の長さの文字列を抜き出します。		
書式	<(戻り値)抜き出し後文字列> = RIGHT\$(<①文字列>, <②抜き出す文字数>)		
戻り値	戻り値 <抜き出し後文字列> 文字列		
	文字列の右側から任意の長さの文字列を抜き出した文字列が得られます。		
パラ	①		
メータ	抜き出し対象の文字列を指定します。		
	② < 抜き出す文字数> 数値		
	抜き出す文字列の長さを0以上で指定します。		
	<文字列>の長さより大きい場合、<文字列>をそのまま返します。		
使用例1	SMP\$ = RIGHT\$("SAMPLE", 4)		
X(11 01) T	oni i i i i i i i i i i i i i i i i i i		
	■ 変数SMP\$に"MPLE"("SAMPLE"の右側4文字を取り出した文字列)を代入します。		
使用例2	SMP\$ = RIGHT\$("あいうえお", 4)		
X/11/12	$SMFQ = RIGHIP(a)V \cdot / ZAS , 4)$		
	対象の文字列が全角文字でも使用できます。		
	変数SMP\$に"いうえお"を代入します。		
使用例3	SMP\$ = RIGHT\$("SAMPLE", 7)		
	▼<抜き出す文字数>が<文字列>の字数を上回っているため、"SAMPLE"をそのまま代入		
	します。		

3. 2. 32 RIGHTB\$

関数			
機能	文字列の右側から任意のバイト数分の文字列を抜き出します。		
書 式	〈(戻り値)抜き出し後文字列〉= RIGHTB\$(〈①文字列〉,〈②抜き出すバイト数〉)		
戻り値	戻り値 <抜き出し後文字列> 文字列		
	文字列の右側から任意のバイト数分の文字列を抜き出した文字列が得られます。		
パラ	(文字列) 文字列		
メータ	抜き出し対象の文字列を指定します。		
	② 		
	抜き出す文字列の長さを0以上のバイト数単位で指定します。		
	〈文字列〉の長さより大きい場合、〈文字列〉をそのまま返します。		
備考	・ この関数は、文字列のデータをバイトデータとして扱う為に用意されています。		
	・ 得られる値は文字列形式ですが、PRINT文などで表示できない場合があります。		
	(PRINT文で表示するには、UTF-8形式の文字列である必要があります)		
使用例	SRC\$=CHRB\$ (0) +CHRB\$ (1) +CHRB\$ (2) +CHRB\$ (3)		
	SMP\$=RIGHTB\$(SRC\$, 2)		
	SRC\$は、4バイトのバイトデータ(文字列形式)です。		
	RIGHTB\$により、後方2バイトのバイトデータを抜き出し、SMP\$には「CHRB\$(2)+CHRB\$(3)」		
	のバイトデータが得られます。		
	7 -		

3. 2. 33 SECOND

関数		\Box
機能	指定時刻(文字列)の秒を返します。	
書 式	〈(戻り値)秒〉= SECOND (〈①時分秒文字列〉[, 〈②エラー送出フラグ〉])	
戻り値	戻り値	
	時分秒文字列の秒の値を返します。	
パラ	① <時分秒文字列> 文字列	1]
メータ	時を求める時刻(「時:分:秒」の形式)を指定します。	
	② ペエラー送出フラグ> 真偽値	直
	TRUEを指定すると、不正な時分秒文字列を渡すと、エラーとします。	
	FALSEを指定すると、不正な時分秒文字列の場合に、0を返します。	
	省略すると、FALSEとします。	
備考	〈時分秒文字列〉が時刻でない場合、0を返します。	
	時刻の書式は、24時間表記とします。	
	閏年ではない年に閏秒を入力すると、翌分の0秒に繰り越されます。	
使用例1	NUM = SECOND("14:03:15")	
	変数NUMにSECONDの実行結果15を代入します。	

3. 2. 34 STR_BASE64_DECODE\$

関数		
機能	BASE64形式にエンコードされた文字列を、元の文字列にデコード(逆変換)します。	
書 式	<(戻り値)逆変換後文字列> = STR_BASE64_DECODE\$(<①BASE64形式文字列>)	
戻り値	戻り値 <逆変換後文字列> 文字列	
	BASE64形式にエンコードされた文字列を、元の文字列にデコード(逆変換)	
	した文字列が得られます。	
パラ	① <base64形式文字列></base64形式文字列> 文字列	
メータ	STR_BASE64_ENCODE\$でBASE64形式に変換した文字列を与えます。	
備考	・BASE64とは、日本語を含んだ文字列やバイナリ形式の文字列を、6ビットずつ分割して 64種	
	の印字可能な文字列に表現する、文字列表現方式を言います。	
	•	
使用例	'BASE64形式に文字列「インタフェース」を変換します	
	S\$ = STR_BASE64_ENCODE\$("インタフェース")	
	'BASE64形式の文字列を、元の文字列に逆変換します	
	M\$ = STR_BASE64_DECODE\$ (S\$)	

3. 2. 35 STR_BASE64_ENCODE\$

関数	
機能	文字列を、BASE64形式にエンコード(変換)します。
書 式	<(戻り値)変換後文字列> = STR_BASE64_ENCODE\$(<①文字列>)
戻り値	戻り値 <変換後文字列> 文字列
	BASE64形式にエンコード(変換)した文字列が得られます。
パラ	①
メータ	変換元の文字列を与えます。
備考	・BASE64とは、日本語を含んだ文字列やバイナリ形式の文字列を、6ビットずつ分割して 64種
	の印字可能な文字列に表現する、文字列表現方式を言います。
	•
使用例	'BASE64形式に文字列「インタフェース」を変換します
	S\$ = STR_BASE64_ENCODE\$("インタフェース")
	'BASE64形式の文字列を、元の文字列に逆変換します
	M\$ = STR_BASE64_DECODE\$ (S\$)

3. 2. 36 STR_DUMP\$

機能 単一値をダンプ文字列化 書式 〈(戻り値)ダンプ文字列〉= STR_DUMP\$(〈①単一値〉[,〈②オプショ			
書 式 〈(戻り値) ダンプ文字列〉= STR_DUMP\$(〈①単一値〉[, 〈②オプショ			
	ン>])		
戻り値 戻り値 <ダンプ文字列>	文字列		
単一値をダンプ文字列化した値が得られます。			
パラ ① <単一値>			
メータ 文字列や整数、実数などの単一値を指定します。			
値は、パソコン内部のメモリ表現がダンプ形式で得られます。			
配列は、最初の添字の値が採用されます。	+ N H		
②			
	TRUE(デフォルト値)を指定すると、ヘッダ付きでダンプ出力されます。		
FALSEを指定すると、ヘッダ無しの簡易なダンプ出力が得られます			
	A\$ = "hello"+CHRB\$(0)+"AJAN"		
_ ' ' ' ' '	PRINT STR_DUMP\$(A\$)		
1	dump addr:0x557279735870~0x557279735879 size:10 +0 +1 +2 +3 +4 +5 +6 +7 - +8 +9 +A +B +C +D +E +F 0123456789ABCDEF		
0x0000557279735870 : 68 65 6c 6c 6f 00 41 4a - 41 4e : hello	. AJAN		
, Pio は、L 記の性が出力は用が狙されませ			
(**) ' 例えば、上記の様な出力結果が得られます。			
PRINT STR DUMP\$ (A\$, FALSE)			
68 65 6c 6c 6f 00 41 4a 41 4e			
00 00 00 00 01 00 41 40 41 40			
, スイッチにFALSEを指定すると、上のような簡易的なダンプ出力を	が得られます。		
使用例3 PRINT STR_DUMP\$(123%)	, 14 24000 7 0		
dump addr:0x7ffee0f5941c~0x7ffee0f5941f size:4			
+0 +1 +2 +3 +4 +5 +6 +7 - +8 +9 +A +B +C +D +E +F 01234	+0 +1 +2 +3 +4 +5 +6 +7 - +8 +9 +A +B +C +D +E +F 0123456789ABCDEF		
0x00007ffee0f59410 : - 7b 00 00 00 :	{		
10 00 00 00	····		
が数値を指定すると、パソコン内部のメモリ表現が得られます。			

3. 2. 37 STR_AND\$

関数	
機能	文字列同士に対して、論理積(AND)を求めた結果を返します。
書 式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_AND\$(〈①文字列1〉,〈①文字列2〉)
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字列
	文字列の1バイト毎に、〈文字列1〉AND〈文字列2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① <文字列1>, <文字列2> 文字列
メータ	対象となる文字列を指定します。
使用例	PRINT STR_DUMP\$(STR_AND\$("abc", "aaa"))
	文字列同士に AND 演算を行った結果文字列が得られます。

3. 2. 38 STR_OR\$

関数		
機能	文字列同士に対して、論理和(OR)を求めた結果を返します。	
書 式	<(戻り値)結果文字列> = STR_OR\$(<①文字列1>, <①文字列2>)	
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文	字列
	文字列の1バイト毎に、〈文字列1〉OR〈文字列2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	字列
メータ	対象となる文字列を指定します。	
使用例	PRINT STR_DUMP\$(STR_OR\$("abc", "aaa"))	
	文字列同士に OR 演算を行った結果文字列が得られます。	

3. 2. 39 STR_XOR\$

関数		
機能	文字列同士に対して、排他的論理和(XOR)を求めた結果を返します。	
書式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_XOR\$(〈①文字列1〉,〈①文字列2〉)	
戻り値	戻り値 <結果文字列>	文字列
	文字列の1バイト毎に、〈文字列1〉 XOR〈文字列2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	① <文字列1>, <文字列2>	文字列
メータ	対象となる文字列を指定します。	<u>.</u>
使用例	PRINT STR_DUMP\$(STR_XOR\$("abc", "aaa"))	
	文字列同士に XOR 演算を行った結果文字列が得られます。	

3. 2. 40 STR_IMP\$

関数	
機能	文字列同士に対して、包含(IMP)を求めた結果を返します。
書 式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_IMP\$(〈①文字列1〉,〈①文字列2〉)
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字列
	文字列の1バイト毎に、〈文字列1〉IMP〈文字列2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる文字列を指定します。
使用例	PRINT STR_DUMP\$(STR_IMP\$("abc", "aaa"))
	文字列同士に IMP 演算を行った結果文字列が得られます。

3. 2. 41 STR_EQV\$

関数		
機能	文字列同士に対して、同値(EQV)を求めた結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_EQV\$(〈①文字列1〉,〈①文字列2〉)	
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字	字列
	文字列の1バイト毎に、〈文字列1〉EQV〈文字列2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	字列
メータ	対象となる文字列を指定します。	
使用例	PRINT STR_DUMP\$(STR_EQV\$("abc", "aaa"))	
	文字列同士に EQV 演算を行った結果文字列が得られます。	

3. 2. 42 STR_REPEAT\$

関数		
機能	文字列を指定回数繰り返し連結した文字列を返します。	
書 式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_REPEAT\$(〈①文字列〉,〈②繰り返し回数〉)	
戻り値	戻り値 <結果文字列>	文字列
	文字列に対して、指定回数繰り返し連結した結果が得られます。	
パラ	①	文字列
メータ	対象となる文字列を指定します。	
	② <繰り返し回数>	数値
	文字列を繰り返す回数を指定します。	
	1以上の数値を指定してください。	
使用例	PRINT STR_REPEAT\$("abc", 3)	·
	"abc"を3回繰り返すので、"abcabcabc"と画面に出力されます。	

3. 2. 43 STR_HAN2ZEN\$

関数	
機能	文字列の半角文字を全角文字に変換します。
書式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_HAN2ZEN\$(〈①文字列〉[, 〈②除外文字〉, 〈③変換スイッ
	チ文字〉])
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字列
	文字列中の半角文字を全角文字に変換した結果が得られます。
パラ	① 〈文字列 〉 文字列
メータ	変換対象となる文字列を指定します。
	② <除外文字> 文字列
	変換から除外したい文字を列挙します。
	省略すると、除外指定はありません。
	② <変換スイッチ文字> 文字列
	変換対象としたい文字の種別を指定できます。
	省略すると、全ての文字の種別を変換対象とします。
	スイッチ文字 効果 "A" 英文字を変換対象とします。
	"A" 英文字を変換対象とします。 "D" 数文字を変換対象とします。
	数
_	
備考	カタカナの変換は、例えば 半角の「ア」は文字コード(ユニコード)では
vm ·· J	CHR\$(&HFF71)に相当し、全角に変換すると CHR\$(&H30A2) になります。
使用例1	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 7x\")
	AJAN!! 2020 テスト
使用例2	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 テスト", "AJN")
	AJAN!! 2020 テスト
	↑除外文字を指定すると「AJAN」のみ半角のままになります。
使用例3	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 テスト", "", "D")
	AJAN!! 2020 77
	↑数文字変換のみ指定すると、数文字のみ全角になります。

3. 2. 44 STR_ZEN2HAN\$

関数	
機能	文字列の全角文字を半角文字に変換します。
書 式	〈(戻り値)結果文字列〉= STR_ZEN2HAN\$(〈①文字列〉[, 〈②除外文字〉, 〈③変換スイッ
	チ文字〉])
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字列
	文字列中の全角文字を半角文字に変換した結果が得られます。
	①
メータ	変換対象となる文字列を指定します。
	② <除外文字> 文字列
	変換から除外したい文字を列挙します。
	省略すると、除外指定はありません。
	② <変換スイッチ文字> 文字列
	変換対象としたい文字の種別を指定できます。
	省略すると、全ての文字の種別を変換対象とします。
	スイッチ文字 効果 "A" 英文字を変換対象とします。
	"A" 英文字を変換対象とします。 "D" 数文字を変換対象とします。
	が
	ルースタルアを変換が家としより。
備考	カタカナの変換は、例えば 全角の「ア」は文字コード(ユニコード)では
VIN V	CHR\$(&H30A2)に相当し、半角に変換すると CHR\$(&HFF71) になります。
使用例1	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 テスト")
	AJAN!! 2020 テスト
使用例2	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 テスト", "AJN")
	A J A N!! 2020 テスト
	↑除外文字を指定すると「A J A N」のみ全角のままになります。
使用例3	PRINT STR_HAN2ZEN\$("AJAN!! 2020 テスト", "", "D")
	A J A N !! 2020 テスト
	↑数文字変換のみ指定すると、数文字のみ半角になります。

3. 2. 45 STR_HIRA2KATA\$

関数		
機能	文字列のひらがな文字をカタカナ文字に変換します。	
書式	<(戻り値)結果文字列> = STR_HIRA2KATA\$(<①文字列> [, <②除外文字>])	
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字	列
	文字列中のひらがな文字をカタカナ文字に変換した結果が得られます。	
パラ	① <文字列> 文字	列
メータ	変換対象となる文字列を指定します。	
	②	列
	変換から除外したい文字を列挙します。	
	省略すると、除外指定はありません。	
備考	カタカナへの変換は、全角のカタカナに変換されます。	
使用例1	PRINT STR_HIRA2KATA\$("いろはニホヘト")	
	イロハニホヘト	
使用例2	PRINT STR_HIRA2KATA\$("いろはニホヘト", "いろ")	
	いろハニホヘト	
	↑除外文字を指定すると「いろ」のみ、ひらがな のままになります。	

3. 2. 46 STR_KATA2HIRA\$

関数		
機能	文字列のカタカナ文字をひらがな文字に変換します。	
書 式	<(戻り値)結果文字列> = STR_KATA2HIRA\$(<①文字列> [, <②除外文字>])	
戻り値	戻り値 <結果文字列> 文字	列
	文字列中のカタカナ文字をひらがな文字に変換した結果が得られます。	
パラ	① <文字列> 文字	列
メータ	変換対象となる文字列を指定します。	Ī
	② <除外文字> 文字	列
	変換から除外したい文字を列挙します。	
	省略すると、除外指定はありません。	
備考	カタカナの変換は、全角のカタカナのみが対象です。	
使用例1	PRINT STR_KATA2HIRA\$("いろはニホヘト")	
	いろはにほへと	
使用例2	PRINT STR_KATA2HIRA\$("いろはニホヘト", "ニホ")	
	いろはニホへと	
	↑除外文字を指定すると「ニホ」のみ、カタカナ のままになります。	

3. 2. 47 STR_STARTSWITH

関数	
機能	文字列が特定文字列で始まるか判断します。
書 式	〈(戻り値)一致判定〉= STR_STARTSWITH(〈①文字列〉,〈②特定文字列〉[, 〈③オフセッ
	h>])
戻り値	戻り値 <一致判断> 真偽値
	文字列が特定文字列で始まっていれば TRUE。
	そうでなければ FALSEが得られます。
パラ	①
メータ	調査対象となる文字列を指定します。
	② <特定文字列> 文字列
	調査する文字列を指定します。
	複数調査する為に、文字列配列で指定できます。
	③ 数値
	調査を開始する位置を指定できます。
	省略すると、先頭から調査します。
使用例	PRINT STR_STARTSWITH("あいうえお", "あいう")
	TRUE
	PRINT STR_STARTSWITH("あいうえお", "あいい")
	FALSE

3. 2. 48 STR_ENDSWITH

関数		
機能	文字列が特定文字列で終わるか判断します。	
書 式	<(戻り値)一致判定> = STR_ENDSWITH(<①文字列>, <②特定文字列>)	
戻り値	戻り値 <一致判断>	真偽値
	文字列が特定文字列で終わっていれば TRUE。	
	そうでなければ FALSEが得られます。	
パラ	② <文字列>	文字列
メータ	調査対象となる文字列を指定します。	
	② <特定文字列>	文字列
	調査する文字列を指定します。	
	複数調査する為に、文字列配列で指定できます。	
使用例	PRINT STR_ENDSWITH("あいうえお", "うえお")	
	TRUE	
	PRINT STR_ENDSWITH("あいうえお", "ええお")	
	FALSE	

3. 2. 49 STR_REMOVEPREFIX\$

関数	
機能	文字列の先頭部分が指定文字列と一致すれば、これを削除します。
書 式	〈(戻り値)削除後文字列〉= STR_REMOVEPREFIX\$(〈①文字列〉,〈②削除文字列〉)
戻り値	戻り値 <削除後文字列> 文字列
	文字列の先頭部分が、削除文字列と一致すれば、文字列から削除文字列部分を
	削除して得られます。
	一致しなければ、元の文字列が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる文字列を指定します。
	② <削除文字列> 文字列
	削除対象となる文字列を指定します。
使用例	PRINT STR_REMOVEPREFIX\$("abcaabbccabc", "abc")
	aabbccabc

3. 2. 50 STR_REMOVESUFFIX\$

関数		
機能	文字列の末尾部分が指定文字列と一致すれば、これを削除します。	
書式	〈(戻り値)削除後文字列〉= STR_REMOVESUFFIX\$(〈①文字列〉,〈②削除文字列〉)	
戻り値	戻り値 <削除後文字列> 文字列	1
	文字列の末尾部分が、削除文字列と一致すれば、文字列から削除文字列部分を	
	削除して得られます。	
	一致しなければ、元の文字列が得られます。	
パラ	②	1
メータ	対象となる文字列を指定します。	
	②	1
	削除対象となる文字列を指定します。	
使用例	PRINT STR_REMOVESUFFIX\$("abcaabbccabc", "abc")	
	abcaabbcc	

3. 2. 51 STR_VALIDUTF8

関数	
機能	文字列全てがUTF8文字列として妥当であるか判定します。
書 式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_VALIDUTF8(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てがUTF8文字列として妥当であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	①
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	この関数は、あくまでUTF8形式として正しいかを検証します。
	他の文字列エンコーディングでも、UTF8形式としては妥当な場合がありえます。
使用例1	PRINT STR_VALIDUTF8("ハローAJAN")
	UTF8文字列として正しいので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_VALIDUTF8("不正"+CHRB\$(&H80))
	UTF8文字列(途中不正なコード値)として正しくないので、FALSEが得られます。

3. 2. 52 STR_ISALNUM

関数	
機能	文字列全てが英数文字であるか判定します。
書 式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISALNUM(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが英数文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	①
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISALNUM("123AJAN")
	全て英数文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISALNUM("あいうAJAN")
	全て英数文字(一部ひらがな)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 53 STR_ISALPHA

関数	
機能	文字列全てが英文字であるか判定します。
書式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISALPHA(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが英文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	(文字列) 文字列
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISALPHA("AJANxyz")
	全て英文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISALPHA("AJAN123")
	全て英文字(一部数字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 54 STR_ISCNTRL

関数	
機能	文字列全てが制御文字であるか判定します。
書式	<(戻り値)判定結果> = STR_ISCNTRL(<①文字列>)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが制御文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	②
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISCNTRL(CHRB\$(9)+CHRB\$(10))
	全て制御文字(タブコードと改行コード)なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISCNTRL("AJAN")
	全て制御文字(英字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 55 STR_ISDIGIT

関数	
機能	文字列全てが数文字であるか判定します。
書 式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISDIGIT(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが数文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	(文字列) 文字列
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISDIGIT("12345")
	全て数文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISDIGIT("123AJAN")
	全て数文字(一部英字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 56 STR_ISGRAPH

関数	
機能	文字列全てが表示可能な文字であるか判定します。
書 式	<(戻り値)判定結果> = STR_ISGRAPH(<①文字列>)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが表示可能な文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。(空白、制御文字、書式文字が該当)
パラ	①
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISGRAPH("123AJAN")
	全て表示可能な文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISGRAPH("123"+CHRB\$(10))
	全て表示可能な文字(一部制御文字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 57 STR_ISLOWER

関数	
機能	文字列全てが小文字であるか判定します。
書式	<(戻り値)判定結果> = STR_ISLOWER(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが小文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	(文字列) 文字列
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISLOWER("helloajan")
	全て小文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISLOWER("helloAJAN")
	全て小文字(一部大文字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 58 STR_ISPRINT

関数		
機能	文字列全てが表示可能な文字(空白含む)であるか判定します。	
書 式	<(戻り値)判定結果> = STR_ISPRINT(〈①文字列〉)	
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値	直
	文字列全てが表示可能な文字であれば TRUEを、	
	(STR_ISGRAPHに対して空白も TRUE 判定に含みます)	
	そうでなければ FALSE を返します。	
パラ	② 《文字列》 文字列	闸
メータ	判定対象となる文字列を指定します。	
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。	
使用例1	PRINT STR_ISPRINT("123 AJAN")	
	全て表示可能な文字(空白含む)なので、TRUEが得られます。	
使用例2	PRINT STR_ISPRINT("123 AJAN"+CHRB\$(9))	
	全て表示可能な文字(一部制御文字)ではないので、FALSEが得られます。	

3. 2. 59 STR_ISPUNCT

関数		
機能	文字列全てが表示可能な文字(空白と英数字を含まない)であるか判定します。	
書式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISPUNCT(〈①文字列〉)	
戻り値	戻り値	真偽値
	文字列全てが表示可能な文字(空白と英数字は含みません)であれば TRUEを、	
	そうでなければ FALSE を返します。	
パラ	①	文字列
メータ	判定対象となる文字列を指定します。	
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定しまで	す。
使用例1	PRINT STR_ISPUNCT("%&!#")	
	全て表示可能(空白と英数字を含まない)な文字なので、TRUEが得られます。	
使用例2	PRINT STR_ISPUNCT("%&!#123")	
	全て表示可能な文字(一部数字)ではないので、FALSEが得られます。	

3. 2. 60 STR_ISSPACE

関数	
機能	文字列全てが空白、タブ、行区切りであるか判定します。
書式	<(戻り値)判定結果> = STR_ISSPACE(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが空白、タブ、行区切り(改行など)であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	②
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISSPACE(" "+CHRB\$(9)+CHRB\$(10)+CHRB\$(13))
	全て空白、タブ、行区切り文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISSPACE("123 "+CHRB\$(9)+CHRB\$(10)+CHRB\$(13))
	全て空白、タブ、行区切り文字(一部数字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 61 STR_ISUPPER

関数	
機能	文字列全てが大文字であるか判定します。
書 式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISUPPER(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが大文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	(文字列) 文字列
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISUPPER("HELLOAJAN")
	全て大文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISUPPER("helloAJAN")
	全て大文字(一部小文字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 62 STR_ISXDIGIT

関数	
機能	文字列全てが16進数文字であるか判定します。
書式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISXDIGIT(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てが16進数文字であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	①
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISXDIGIT("123ABCDEF")
	全て16進数文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISXDIGIT("123ABCDEFXZY")
	全て16進数文字(16進数以外の英字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 63 STR_ISASCII

関数	
機能	文字列全てがASCII文字であるか判定します。
書 式	〈(戻り値)判定結果〉= STR_ISASCII(〈①文字列〉)
戻り値	戻り値 <判定結果> 真偽値
	文字列全てがASCII文字(&HOO~&H7Fまで)であれば TRUEを、
	そうでなければ FALSE を返します。
パラ	①
メータ	判定対象となる文字列を指定します。
備考	UTF8文字列で構成されていれば文字単位、そうでなければバイト単位で判定します。
使用例1	PRINT STR_ISASCII("123ABCxzy")
	全てASCII文字なので、TRUEが得られます。
使用例2	PRINT STR_ISASCII("123ABCxzy歩")
	全てASCII文字(一部漢字)ではないので、FALSEが得られます。

3. 2. 64 CHRTYPE

関数		
機能	文字列の各文字の情報を	得ます。
書式		CHRTYPE(〈①文字列〉,〈②情報ID〉)
戻り値	戻り値	<情報配列> 配列
247 III		字毎の情報を1次元の数値配列で得られます。
パラ		〈 文字列 〉 文字列
メータ	ジI 情報を得る文字列を指	
		「能な文字列である必要があります。
	2	〈情報 ID〉 文字列
	文字列に対して、1文学	字ずつ得たい情報の種別を指定します。
	設定値	内容
	"bytes"	1文字のバイト数を得ます。
	"isalnum"	英数文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"isalpha"	英文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"iscntrl"	制御文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"isdigit"	数文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"isgraph"	非空白出力文字なら1、そうでないなら0を得ます。
		(空白、制御文字、書式文字は0です)
	"isprint"	表示可能文字(空白含む)なら1、そうでないなら0を得
	<i>"</i> • <i>"</i>	ます。
	"isspace"	空白、タブ、行区切りなら1、そうでないなら0を得ます。
	"islower"	・ 小文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"isupper"	大文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"isxdigit"	16進数文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"iswide"	ワイド文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"iswide_cjk"	東アジア方面のロケールに従ってワイド文字なら1、そ
		うでないなら0を得ます。
	"iszerowidth"	ゼロ幅文字なら1、そうでないなら0を得ます。
	"type"	Unicode仕様の文字種を得ます。
		「<情報ID:"type" の値>」を参照ください。
	"break_type"	Unicode仕様の区切り文字種を得ます。
	" "	「<情報ID:"break_type"の値>」を参照ください。
	"todigit"	数文字を数値に変換します。そうでないものは - 1 が
	"toxditit"	得られます。
	τοχαιτιτ	16進数文字を数値に変換します。そうでないものは
		1 27 7 7 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2
備考	・ 文字列がUTF8とし	て読み取り可能かどうかは、STR VALIDUTF8 で確認できます。
使用例	? chrtype("123abcDEFZ	<u> </u>
	' [1, 1, 1, 1, 1, 1,	1, 1, 1, 1, 1, 3, 3, 3] が得られます
	? chrtype("123abcDEFZ	‡ あいう", "isalnum")
		1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0] が得られます。
	? chrtype("123abcDEFZ	
		0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0] が得られます
	? chrtype("123abcDEFZ;	
	[1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0] が得られます t あいう" "islower")
		+ めいり, 1slower) 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0] が得られます
	L U, U, U, 1, 1, 1,	o, o, o, o, o, o, o 」 パイff ウィレよ ソ

3.2.64.1 <情報ID: "type" の値>

Unicode仕様の文字種の一覧値です。

文字種の各名称と意味は、以下のURLの資料を参考ください。

 Unicode Character Database https://www.unicode.org/reports/tr44/#General Category Values

値	説明(文字種)
0	General category "Other Control" (Cc)
1	General category "Other Format" (Cf)
2	General category "Other Not Assigned" (Cn)
3	General category "Other Private Use" (Co)
4	General category "Other Surrogate" (Cs)
5	General category "Letter Lowercase" (Ll)
6	General category "Letter Modifier" (Lm)
7	General category "Letter Other" (Lo)
8	General category "Letter Titlecase" (Lt)
9	General category "Letter Uppercase" (Lu)
10	General category "Mark Spacing" (Mc)
11	General category "Mark Enclosing" (Me)
12	General category "Mark Nonspacing" (Mn)
13	General category "Number Decimal Digit" (Nd)
14	General category "Number Letter" (NI)
15	General category "Number Other" (No)
16	General category "Punctuation Connector" (Pc)
17	General category "Punctuation Dash" (Pd)
18	General category "Punctuation Close" (Pe)
19	General category "Punctuation Final quote" (Pf)
20	General category "Punctuation Initial quote" (Pi)
21	General category "Punctuation Other" (Po)
22	General category "Punctuation Open" (Ps)
23	General category "Symbol Currency" (Sc)
24	General category "Symbol Modifier" (Sk)
25	General category "Symbol Math" (Sm)
26	General category "Symbol Other" (So)
27	General category "Separator Line" (Zl)
28	General category "Separator Paragraph" (Zp)
29	General category "Separator Space" (Zs)

3.2.64.2 <情報ID: "break_type"の値>

Unicode仕様の区切り文字種の一覧値です。

区切り文字種の各名称と意味は、以下のURLの資料を参考ください。

• Unicode Standard Annex #14 – Unicode line breaking algorithm

https://www.unicode.org/unicode/reports/tr14/

値	説明(区切り文字種)
0	Mandatory Break (BK)
1	Carriage Return (CR)
2	Line Feed (LF)
3	Attached Characters and Combining Marks (CM)
4	Surrogates (SG)
5	Zero Width Space (ZW)
6	Inseparable (IN)
7	Non-breaking ("Glue") (GL)
8	Contingent Break Opportunity (CB)
9	Space (SP)
10	Break Opportunity After (BA)
11	Break Opportunity Before (BB)
12	Break Opportunity Before and After (B2)
13	Hyphen (HY)
14	Nonstarter (NS)
15	Opening Punctuation (OP)
16	Closing Punctuation (CL)
17	Ambiguous Quotation (QU)
18	Exclamation/Interrogation (EX)
19	Ideographic (ID)
20	Numeric (NU)
21	Infix Separator (Numeric) (IS)
22	Symbols Allowing Break After (SY)
23	Ordinary Alphabetic and Symbol Characters (AL)
24	Prefix (Numeric) (PR)
25	Postfix (Numeric) (PO)
26	Complex Content Dependent (South East Asian) (SA)
27	Ambiguous (Alphabetic or Ideographic) (AI)
28	Unknown (XX)
29	Next Line (NL)
30	Word Joiner (WJ)
31	Hangul L Jamo (JL)
32	Hangul V Jamo (JV)
33	Hangul T Jamo (JT)
34	Hangul LV Syllable (H2)
35	Hangul LVT Syllable (H3)
36	Closing Parenthesis (CP). Since 2.28
37	Conditional Japanese Starter (CJ). Since: 2.32
38	Hebrew Letter (HL). Since: 2.32
39	Regional Indicator (RI). Since: 2.36
40	Emoji Base (EB). Since: 2.50
41	Emoji Modifier (EM). Since: 2.50
42	Zero Width Joiner (ZWJ). Since: 2.50

3. 2. 65 STR2ARRAY

		1
関数		
機能	文字列を指定したバイト単位の数値配列に変換します。	
書 式	〈(戻り値)数値配列〉= STR2ARRAY (〈①文字列〉[, 〈②分割バイト単位〉])	
戻り値	戻り値 <数値配列>	配列
	文字列から指定したバイト単位で数値配列に変換します。	
パラ	(文字列>	文字列
メータ	操作対象の文字列を指定します。	
	② <分割バイト単位>	数值
	文字列から数値に変換するバイト単位数を指定します。	
	1/2/4/8 のどれかを選択します。省略すると、1 が採用されます。	
備考	・ 数値配列を元の文字列に変換するには、「ARRAY2STR\$」を使用します。	
使用例1	PRINT STR2ARRAY ("123")	
	' "[49, 50, 51]" が出力されます。	
使用例2	'? STR2ARRAY("ABC", 1) を指定した際の動作と同じ処理を記述した例です。	
	S\$ = "ABC"	
	LIST ARY	
	REDIM ARY (LENB(S\$)-1)	
	FOR I=0 TO LENB(S\$)-1	
	ARY(I) = ASCB(MIDB\$(S\$, 1+I, 1))	
	NEXT I	
	PRINT ARY	

3. 2. 66 STRDELB\$

関数	
機能	文字列の任意の位置から指定したバイト長の文字列を削除します。
書 式	〈(戻り値)削除後文字列〉= STRDELB\$(〈①文字列〉,〈②開始位置〉[,〈③削除するバイ
	ト数>])
戻り値	戻り値 <削除後文字列> 文字列
	文字列中、開始位置から指定したバイト長の文字列を削除した結果が得られます。
パラ	②
メータ	操作対象の文字列を指定します。
	②
	削除する開始位置をバイト単位(1はじまり)で指定します。
	〈文字列〉の格納バイト数より大きいと格納バイト長と同じになります。
	③
	削除するバイト数を0以上で指定します。
	省略した場合や、〈開始位置〉以降のバイト数より大きい値を指定した場合は、
	〈開始位置〉以降の文字列をすべて削除します。
備考	・ この関数は、文字列のデータをバイトデータとして扱う為に用意されています。
	・ 得られる値は文字列形式ですが、PRINT文などで表示できない場合があります。
	(PRINT文で表示するには、UTF-8形式の文字列である必要があります)
使用例	SRC\$=CHRB\$ (0) +CHRB\$ (1) +CHRB\$ (2) +CHRB\$ (3)
	SMP\$ = STRDELB\$(SRC\$, 2, 2)
	SRC\$は、4バイトのバイトデータ(文字列形式)です。
	STRDELB\$により、先頭2バイト目から2バイトのバイトデータを削除します。
	変数SMP\$には、「CHRB\$(0)+CHRB\$(3)」のバイトデータが得られます。

3. 2. 67 STRINSB\$

関数		
機能	文字列の任意の位置に指定したバイトデータ文字列を挿入します。	
書 式	〈(戻り値)挿入後文字列〉= STRINSB\$(〈①文字列〉,〈②開始位置〉,〈③挿入する文字	字列
	>)	
戻り値	戻り値 <挿入後文字列> 文字	字列
	文字列中、開始位置にバイトデータ文字列を挿入した結果が得られます。	
パラ	(文字列) 文字	字列
メータ	操作対象の文字列を指定します。	
	② 	値
	挿入する開始位置をバイト単位(1はじまり)で指定します。	
	〈文字列〉の格納バイト数より大きいと格納バイト長と同じになります。	
	③ <挿入する文字列> 文字	字列
	挿入するバイトデータ文字列を指定します。	
備考	●・ この関数は、文字列のデータをバイトデータとして扱う為に用意されています	0
	・ 得られる値は文字列形式ですが、PRINT文などで表示できない場合があります。	
	(PRINT文で表示するには、UTF-8形式の文字列である必要があります)	
使用例	SRC\$=CHRB\$ (0) +CHRB\$ (1) +CHRB\$ (2) +CHRB\$ (3)	
	SMP = $STRINSB$ (SRC , 2, $CHRB$ (10) + $CHRB$ (11))	
	■ SRC\$は、4バイトのバイトデータ(文字列形式)です。	
	STRDELB\$により、先頭2バイト目から2バイトのバイトデータを挿入します。	
	変数SMP\$には、	
	「CHRB\$ (0) + CHRB\$ (10) + CHRB\$ (11) + CHRB\$ (1) + CHRB\$ (2) + CHRB\$ (3)」のバイトデータだ	が得
	られます。	

3. 2. 68 STRREVERSE\$

関数		
機能	文字列の並びを逆にします。	
書 式	<(戻り値)反転文字列> = STRREVERSE\$(<①文字列>)	
戻り値	戻り値 <反転文字列> 文字	列
	指定した文字列の並びを逆にした文字列を得ます。	
パラ	①	:万(
メータ		<u> </u>
備考	・ 指定する文字列は UTF-8 形式の文字列を渡してください。	
使用例1	PRINT STRREVERSE\$("123")	
	'"321" が出力されます。	
使用例2	PRINT STRREVERSE\$("あいう")	
	' "ういあ" が出力されます。	

3. 2. 69 STRREVERSEB\$

関数		
機能	ベイナリ文字列の並びを逆にします。	
書 式	(戻り値)反転文字列> = STRREVERSEB\$(〈①文字列〉)	
戻り値	戻り値 <反転文字列>	文字列
	 指定した文字列の並びをバイト単位で逆にした文字列を得ます。	
パラ	① <文字列>	文字列
メータ	操作対象のバイナリ文字列を指定します。	
備考	・この関数は、文字列のデータをバイトデータとして扱うために用意されている	ます。
	・ 得られる値は文字列形式ですが、PRINT文などで表示できない場合があります	0
使用例	\$\ = STRREVERSEB\$ (CHRB\$ (0) +CHRB\$ (1) +CHRB\$ (2))	
	S\$ には、CHRB\$(2)+CHRB\$(1)+CHRB\$(0) 相当のバイナリ文字列が得られます	0

3. 2. 70 TRUNC

関数	
機能	指定数値を指定位置で切り捨てます。
書 式	<(戻り値)切捨て後数値> = TRUNC(<①数値>[, <②指定位置>])
戻り値	戻り値 <切捨て後数値> 数値
	数値を指定位置で切り捨てた値が得られます。
パラ	① <数値> 数值
メータ	切り捨てる対象の数値を指定します。
	② <指定位置> 数值
	正数時、小数点以下の有効桁数を指定します。
	負数時、整数部の切捨て位置を指定します。
	省略すると小数点以下を切り捨てます。
備考	正の値を指定すると小数点以下を、負の値だと小数点以上を切り捨てます。
使用例1	NUM = TRUNC(123.456)
	変数NUMに123(123.456の小数部を切り捨てた数値)を代入します。
使用例2	NUM = TRUNC(123.456, 1)
	変数NUMに123.4(123.456の小数第2位以下を切り捨てた数値)を代入します。
使用例3	NUM = TRUNC(123.456, −1)
	変数NUMに120(123.456の整数部の1桁目以下を切り捨てた数値)を代入します。

3. 2. 71 UCASE\$

関数	
機能	文字列中の小文字(半角英字)を大文字に変換します。
書 式	<(戻り値)大文字文字列> = UCASE\$ (<①文字列>)
戻り値	戻り値 <大文字文字列> 文字列
	文字列中の小文字(半角英字)を大文字に変換した結果が得られます。
パラ	(文字列) 文字列
メータ	変換対象の文字列を指定します。
備考	大文字を小文字に変換するには「LCASE\$」を使用します。
使用例1	SMP\$ = UCASE\$("sample")
	変数SMP\$に"SAMPLE"を代入します。
使用例2	SMP\$ = UCASE\$("samPLE")
	大文字が混在する場合も使用できます。
	変数SMP\$に"SAMPLE"を代入します。

3. 2. 72 UUIDCOMP

関数		
機能	UUID文字列同士が、同じか比較します。	
書 式	〈(戻り値)比較結果〉= UUIDCOMP(〈①UUID文字列1〉,〈①UUID文字列2〉)	
戻り値	戻り値 <比較結果>	数値
	UUID文字列同士を比較した結果を返します。	
	相互が同じであれば0、そうでなければ非0を返します。	
パラ	①	文字列
メータ	比較対象となるUUID文字列です。	
	MKUUID\$ の戻り値のような形式の文字列を与えてください。	
使用例	A\$ = MKUUID\$()	
	B\$ = MKUUID\$()	
	?UUIDCOMP(A\$, B\$) ′異なるUUIDを比較するので、非0が返ります	
	? UUIDCOMP(A\$, A\$) '同じUUIDを比較するので、Oが返ります。	

3. 2. 73 YEAR

関数		
機能	指定日(文字列)の年を返します。	
書 式	〈(戻り値)年〉= YEAR (〈①年月日文字列〉[,〈②エラー送出フラグ〉])	
戻り値	戻り値 <年>	数値
	年月日文字列の年の値を返します。	
パラ	(年月日文字列>	文字列
メータ	年を求める日付(「年/月/日」の形式)を指定します。	
	② <エラー送出フラグ>	真偽値
	TRUEを指定すると、不正な年月日文字列を渡すと、エラーとします。	
	FALSEを指定すると、不正な年月日文字列の場合に、0を返します。	
	省略すると、FALSEとします。	
備考	〈年月日文字列〉が日付でない場合、0を返します。	
	閏年ではない年に閏日を入力すると、翌月の初日に繰り越されます。	
使用例1	NUM = YEAR("2013/07/15")	
	変数NUMに2013を代入します。	

3.3 配列演算に関する関数・命令

ここでは、配列に対して評価・演算するためのコマンドおよび関数群を紹介します。

3. 3. 1 DIMAVG

関数		
機能	配列の平均を返します。	
書 式	<(戻り値)平均値> = DIMAVG(<①配列変数>)	
戻り値	戻り値 <平均値>	数値
	配列の平均値が得られます。	
パラ	①	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A(100)	
	FOR I = 0 TO 100	
	A(I) = I	
	NEXT I	
	? DIMAVG(A)	
	配列Aの平均値を返します。	

3. 3. 2 DIMMEDIAN

関数	
機能	配列の中央値を返します。
書 式	<(戻り値)中央値> = DIMMEDIAN(<①配列変数>)
戻り値	戻り値 <中央値> 数値
	配列内のデータの値を小さな順に並べた時、中央に位置する値が得られます。
	要素数が奇数の場合、中央の値が得られます。
	要素数が偶数の場合、中央に近い2つの値の算術平均が得られます。
パラ	① <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例	LIST A
	A = [5; 7; 3; 8]
	? DIMMEDIAN(A) ' 6 が得られます

3. 3. 3 DIMMAX

関数	
機能	配列の最大値を返します。
書 式	<(戻り値)最大値> = DIMMAX(<①配列変数>)
戻り値	戻り値 <最大値> 数値
	配列変数の内、最大値が得られます。
パラ	① <配列変数> 配列
メータ	
, ,	数値型である必要があります。
使用例	DIM A(10)
	FOR $I = 0$ TO 10
	A(I) = I - 5
	NEXT I
	? A
	[-5, -4, -3, -2, -1, 0, 1, 2, 3, 4, 5]
	? DIMMAX(A)
	5
	配列Aの最大値を返します。

3. 3. 4 DIMMIN

日日本仁		
関数		
機能	配列の最小値を返します。	
書 式	〈(戻り値)最小値〉= DIMMIN(〈①配列変数〉)	
戻り値	戻り値 <最小値>	数値
	配列変数の内、最小値が得られます。	
パラ	① <配列変数>	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A(10)	
	FOR I = 0 TO 10	
	A(I) = I - 5	
	NEXT I	
	? A	
	[-5, -4, -3, -2, -1, 0, 1, 2, 3, 4, 5]	
	? DIMMIN(A)	
	- 5	
	配列Aの最小値を返します。	

3.3.5 DIMSUM

関数		
機能	配列の合計を返します。	
書 式	<(戻り値)合計値> = DIMSUM(<①配列変数>)	
戻り値	戻り値 <合計値>	数値
	配列変数の全ての要素をあわせた、合計値が得られます。	
パラ	① <配列変数>	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A(100)	
	FOR I = 0 TO 100	
	A(I) = I	
	NEXT I	
	? DIMSUM (A)	
	配列Aの合計値を返します。	

3. 3. 6 DIMSTDEVP

関数	
機能	配列の標準偏差値を返します。
書 式	<(戻り値)標準偏差値> = DIMSTDEVP(<①配列変数>)
戻り値	戻り値 <標準偏差値> 数値
	配列変数に対して、標準偏差を求めた結果が得られます。
パラ	① <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例	LIST ARY
	ARY = [1.2; 2.1; 3.1; 4.1; 5.1]
	PRINT DIMSTDEVP(ARY) ' 1.38621787609308が表示

3. 3. 7 DIMVARP

関数	
機能	配列の分散値を返します。
書 式	<(戻り値)分散値> = DIMVARP(<①配列変数>)
戻り値	戻り値 <分散値> 数値
	配列変数に対して、分散(あるいは標本分散)を求めた結果が得られます。
パラ	① <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例	LIST ARY
	ARY = [1.2; 2.1; 3.1; 4.1; 5.1]
	PRINT DIMVARP(ARY) '1.9216が表示

3. 3. 8 DIMVARS

関数	
機能	配列の不偏分散値を返します。
書 式	<(戻り値)不偏分散値> = DIMVARS(<①配列変数>)
戻り値	戻り値 <不偏分散値> 数値
	配列変数に対して、不偏分散を求めた結果が得られます。
パラ	① <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
備考	与える配列変数は、要素数2以上を与えてください。
使用例	LIST ARY
	ARY = [1.2; 2.1; 3.1; 4.1; 5.1]
	PRINT DIMVARS(ARY) '2.402が表示

3. 3. 9 DIMADD

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、加算した結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全て加算した結果を返します。(書式2)
書 式1	<(戻り値)加算配列値> = DIMADD(<①配列変数1>, <①配列変数2>)
戻り値	戻り値 <加算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉+〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① 《配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)加算結果値> = DIMADD(<②配列変数>)
戻り値	戻り値 < 加算結果値 > 数値 数値
	配列変数の各要素に対して、加算の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	② <配列変数> 配列
メータ	
	数値型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
\(\int \), 13 \(\psi \), 32	$A\% = \begin{bmatrix} -2; & -1; & 0; & 1; & 2 \end{bmatrix}$
	B% = [2; 2; 2; 2]
	PRINT DIMADD (A%, B%)
	[0, 1, 2, 3, 4]
	配列 A%と配列 B% 同士を加算します。
使用例2	DIM A%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	PRINT DIMADD(A%)
	15
	配列A%の各要素を加算します。

3. 3. 10 DIMADD\$

関数	
機能	2つの文字列配列の各要素に対して、連結した結果を返します。
書 式	〈(戻り値)連結配列値〉= DIMADD\$(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <連結配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、文字列同士の〈配列変数1〉+〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	文字列型である必要があります。
使用例	DIM A\$(4), B\$(4)
	A\$ = ["a"; "b"; "c"; "d"; "e"]
	B\$ = ["c"; "c"; "c"; "c"; "c"]
	PRINT DIMADD\$(A\$, B\$)
	[ac, bc, cc, dc, ec]
	配列 A\$と配列 B\$ 同士を連結します。

3. 3. 11 DIMSUB

関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、減算した結果を返します。	
書 式	<(戻り値)減算配列値> = DIMSUB(<①配列変数1>, <①配列変数2>)	
戻り値	戻り値 <減算配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉-〈配列変数2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	① <配列変数1>, <配列変数2>	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [-2; -1; 0; 1; 2]	
	B% = [2; 2; 2; 2; 2]	
	PRINT DIMSUB(A%, B%)	
	[-4, -3, -2, -1, 0]	
	配列 A%と配列 B% 同士を減算します。	

3. 3. 12 DIMDIV

関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、割り算した結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)割り算配列値〉= DIMDIV(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)	
戻り値	戻り値 <割り算配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉÷〈配列変数2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [-2; -1; 0; 1; 2]	
	B% = [2; 2; 2; 2; 2]	
	PRINT DIMDIV (A%, B%)	
	[-1, -0.5, 0, 0.5, 1]	
	配列 A%と配列 B% 同士を割り算します。	

3. 3. 13 DIMMOD

関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、剰余算した結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)剰余算配列値〉= DIMMOD(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)	
戻り値	戻り値 <剰余算配列値>	西己歹儿
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉MOD〈配列変数2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	西己歹儿
メータ	対象となる配列変数を指定します。	<u>.</u>
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [-2; -1; 0; 1; 2]	
	B% = [2; 2; 2; 2]	
	PRINT DIMMOD(A%, B%)	
	[0, 0, 0 ,0, 1]	
	配列 A%と配列 B% 同士を剰余算します。	

3. 3. 14 DIMMUL

関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、掛け算した結果を返します。	
書 式	<(戻り値)掛け算配列値> = DIMMUL(<①配列変数1>, <①配列変数2>)	
戻り値	戻り値 <掛け算配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉×〈配列変数2〉の演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	① <配列変数1>, <配列変数2>	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [-2; -1; 0; 1; 2]	
	B% = [2; 2; 2; 2; 2]	
	PRINT DIMMUL (A%, B%)	
	[-4, -2, 0, 2, 4]	
	配列 A%と配列 B% 同士を掛け算します。	

3. 3. 15 DIMNOT

関数		
機能	配列の各要素に対して、否定(NOT)を求めた結果を返します。	
書 式	<(戻り値)NOT演算配列値> = DIMNOT(<①配列変数>)	
戻り値	戻り値 < NOT演算配列値 >	配列
	配列変数の各要素に対して、NOT演算を行った結果が得られます。	
パラ	(配列変数>	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4)	
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]	
	PRINT DIMNOT (A%)	
	[-2, -3, -4, -5, -6]	
	配列 A%に対して、NOT演算します。	

3. 3. 16 DIMAND

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、論理積(AND)を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全てANDを求めた結果を返します。(書式2)
書 式1	<(戻り値)AND演算配列値> = DIMAND(<①配列変数1>, <①配列変数2>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉AND〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① < 配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)AND演算結果値> = DIMAND(<②配列変数>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、AND の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	(A) (第1万11本学) 第1万11
メータ	② <配列変数> 配列 配列 配列 配列
, ,	数値型である必要があります。
 使用例1	数ili主 (めのむ女がもの) りより。 DIM A%(4), B%(4)
DC/11 [7] 1	$A\% = \begin{bmatrix} 1; 2; 3; 4; 5 \end{bmatrix}$
	B% = [5; 5; 5; 5]
	PRINT DIMAND (A%, B%)
	[1, 0, 1, 4, 5]
	配列 A%と配列 B% 同士をANDします。
使用例2	DIM A(2)
	A = [7; 3; 2]
	PRINT DIMAND(A)
	2
	配列Aの各要素をANDします。

3. 3. 17 DIMOR

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、論理和(OR)を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全てORを求めた結果を返します。(書式2)
書 式1	〈(戻り値)OR演算配列値〉= DIMOR(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <or演算配列値></or演算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉OR〈配列変数2〉の演算を
_	行った結果が得られます。
パラ	① <配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)OR演算結果値> = DIMOR(<②配列変数>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、OR の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	② <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [5; 5; 5; 5]
	PRINT DIMOR (A%, B%)
	[5, 7, 7, 5, 5]
Hr III Hrio	配列 A%と配列 B% 同士をORします。
使用例2	DIM A(2)
	A = [7; 3; 2] PRINT DIMOR(A)
	PRINI DIMOR(A) 7
	()
	配列Aの各要素をORします。
	EL/Thv/日久示とVit U A)。

3. 3. 18 DIMXOR

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、排他的論理和(XOR)を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全てXORを求めた結果を返します。(書式2)
書 式1	<(戻り値)XOR演算配列値> = DIMXOR(<①配列変数1>, <①配列変数2>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉XOR〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① < 配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)XOR演算結果値> = DIMXOR(<②配列変数>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、XOR の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	② <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
00/13/73-	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [5; 5; 5; 5]
	PRINT DIMXOR (A%, B%)
	[4, 7, 6, 1, 0]
	配列 A%と配列 B% 同士をXORします。
使用例2	DIM A(2)
	A = [7; 3; 2]
	PRINT DIMXOR(A)
	6
	配列Aの各要素をXORします。

3. 3. 19 DIMIMP

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、包含(IMP)を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全てIMPを求めた結果を返します。(書式2)
書 式1	〈(戻り値)IMP演算配列値〉= DIMIMP(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <imp演算配列値></imp演算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉IMP〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① <配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)IMP演算結果値> = DIMIMP(<②配列変数>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、IMP の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	② <配列変数> 配列
メータ	
	数値型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
W/11/12	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [5; 5; 5; 5]
	PRINT DIMIMP (A%, B%)
	[-1, -3, -3, -1, -1]
	配列 A%と配列 B% 同士をIMPします。
使用例2	DIM A(2)
	A = [7; 3; 2]
	PRINT DIMIMP(A)
	6
	配列Aの各要素をIMPします。

3. 3. 20 DIMEQV

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、同値(EQV)を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全てEQVを求めた結果を返します。(書式2)
書 式1	<(戻り値)EQV演算配列値> = DIMEQV(<①配列変数1>, <①配列変数2>)
戻り値	戻り値 <eqv演算配列値></eqv演算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉EQV〈配列変数2〉の演算を
	行った結果が得られます。
パラ	① <配列変数1>, <配列変数2> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
書 式2	<(戻り値)EQV演算結果値> = DIMEQV(<②配列変数>)
戻り値	戻り値
	配列変数の各要素に対して、EQV の演算を行ったトータル結果が得られます。
パラ	② <配列変数> 配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [5; 5; 5; 5]
	PRINT DIMEQV (A%, B%)
	[-5, -8, -7, -2, -1]
	配列 A%と配列 B% 同士をEQVします。
使用例2	DIM A(2)
	A = [7; 3; 2]
	PRINT DIMEQV(A)
	6
	配列Aの各要素をEQVします。

3. 3. 21 DIMSHL

関数		
機能	配列の各要素に対して、ビット単位に左シフトした結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)左シフト演算配列値〉= DIMSHL(〈①元配列〉, 〈②シフト数〉)	
戻り値	戻り値 <左シフト 演算配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、シフト数で指定した分、左にずらします。	
	最下位ビットは、0が入ります。	
	上記の演算を行った結果が、配列形式で得られます。	
パラ	(元配列>	配列
メータ	演算対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
	② <シフト数>	数值
	左シフトする数を指定します。	
備考	・元配列が実数の場合、戻り値の配列は整数で得られます。	
使用例	? DIMSHL([1; 2; 3; 4; 5], 2)	
	[4, 8, 12, 16, 20]	
	'元配列に指定した配列値を、2ほど左シフトします。	

3.3.22 DIMSHR

関数		
機能	配列の各要素に対して、ビット単位に右シフトした結果を返します。	
書 式	<(戻り値)右シフト演算配列値> = DIMSHR(<①元配列>, <②シフト数>)	
戻り値	戻り値 <右シフト 演算配列値 >	配列
	配列変数の各要素に対して、シフト数で指定した分、右にずらします。	
	最上位ビットは、0が入ります。	
	上記の演算を行った結果が、配列形式で得られます。	
パラ	① 《元配列》	配列
メータ	演算対象となる配列変数を指定します。	
	数値型である必要があります。	
	② <シフト数>	数值
	右シフトする数を指定します。	
備考	・元配列が実数の場合、戻り値の配列は整数で得られます。	
使用例	? DIMSHR([1; 2; 3; 4; 5], 2)	
	[0, 0, 0, 1, 1]	
	'元配列に指定した配列値を、2ほど右シフトします。	

3. 3. 23 DIMROL

関数	
機能	配列の各要素に対して、ビット単位に左回転した結果を返します。
書 式	〈(戻り値)左回転演算配列値〉= DIMROL(〈①元配列〉,〈②シフト数〉)
戻り値	戻り値 <左回転演算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、シフト数で指定した分、左にずらします。
	最上位ビットは、最下位ビットに回転移動します。
	上記の演算を行った結果が、配列形式で得られます。
パラ	(元配列) 配列
メータ	演算対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
	② <シフト数>
	左回転する数を指定します。
備考	・元配列が実数の場合、戻り値の配列は整数で得られます。
使用例	LIST A%
	A% = [1; &H80000000]
	? DIMROL (A%, 2)
	'元配列に指定した配列値を、2ほど左回転します。
	' A%は単精度整数変数なので、&H80000000は、最上位ビットに 1が立った状態です
	'左回転すると、&H80000000 は、最下位ビットに移動するので、2となります。

3. 3. 24 DIMROR

日日 华/	
関数	
機能	配列の各要素に対して、ビット単位に右回転した結果を返します。
書 式	<(戻り値)右回転演算配列値> = DIMROR(<①元配列>,<②シフト数>)
戻り値	戻り値 <右回転演算配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、シフト数で指定した分、右にずらします。
	最下位ビットは、最上位ビットに回転移動します。
	上記の演算を行った結果が、配列形式で得られます。
パラ	① <元配列> 配列
メータ	演算対象となる配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
	② <シフト 数 > 数値
	右回転する数を指定します。
備考	・元配列が実数の場合、戻り値の配列は整数で得られます。
使用例	LIST A%
	A% = [1; 4]
	? DIMROR (A%, 2)
	[1073741824, 1]
	'元配列に指定した配列値を、2ほど右回転します。
	・ 右回転すると、最下位ビットにある値が最上位ビットに回転移動するので、
	'1073741824 のような大きな値が出ます。

3. 3. 25 DIMEQ

機能 2つの配列の各要素に対して、等しいか比較を求めた結果を返します。(書式1)または、1つの配列の各要素を、全て等しいか比較を求めた結果を返します。(書式書 式1 < (戻り値)等しい比較配列値> = DIMEQ(〈①配列変数1〉,〈①配列変数2〉) 戻り値 <等しい比較配列値> 戻り値 <等しい比較配列値> 配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉 = 〈配列変数2〉の比較演算を行った結果が得られます。 パラメータ へ配列変数1>,〈配列変数2> 対象となる配列変数を指定します。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。	î]
書式1 〈(戻り値)等しい比較配列値〉= DIMEQ(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉) 戻り値 〈等しい比較配列値〉 配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉=〈配列変数2〉の比較演算を行った結果が得られます。 パラメータ ① 〈配列変数1〉, 〈配列変数2〉 面 メータ 対象となる配列変数を指定します。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。	î]
戻り値 <等しい比較配列値> 画 配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉 = 〈配列変数2〉の比較演算を 行った結果が得られます。 (配列変数1>, 〈配列変数2> 画 メータ 対象となる配列変数を指定します。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。	
配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉=〈配列変数2〉の比較演算を 行った結果が得られます。	
行った結果が得られます。	ij
パラ (配列変数1>, <配列変数2> 断象となる配列変数を指定します。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。	ij
メータ 対象となる配列変数を指定します。 双方が数値型、または文字列型である必要があります。	刊
双方が数値型、または文字列型である必要があります。	
★ ★ (★) (★)	
書 式2 〈(戻り値)等しい比較結果値〉= DIMEQ(〈②配列変数〉)	
戻り値 戻り値 <等しい比較結果値> 数	直
配列変数の各要素に対して、全て等しい(=)か、比較演算を行った結果が得られます。	
パラ ② <配列変数>	tel .
パラ	1]
数値至 または 文子列至 C める必要がめります。 使用例1 DIM A%(4), B%(4)	
A% = [1; 2; 3; 4; 5]	
B% = [3; 3; 3; 3; 3]	
PRINT DIMEQ(A%, B%)	
[FALSE, FALSE, TRUE, FALSE]	
使用例2 DIM A(2)	
$A = \begin{bmatrix} 5; 5; 5 \end{bmatrix}$	
PRINT DIMEQ(A)	
TRUE	
配列Aの各要素を全て等しいか確認します。	

3. 3. 26 DIMNE

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、等しくないか比較を求めた結果を返します。(書式1)
	または、1つの配列の各要素を、全て等しくないか比較を求めた結果を返します。(書式
	2)
書 式1	〈(戻り値)等しくない比較配列値〉= DIMNE(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <等しくない比 較配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉〈〉〈配列変数2〉の比較演算を
	行った結果が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	双方が数値型、または文字列型である必要があります。
書 式2	〈(戻り値)等しくない比較結果値〉= DIMNE(〈②配列変数〉)
戻り値	戻り値 <等しくない比較結果値> 数値
	配列変数の各要素に対して、全て等しくない(<>)か、比較演算を行った結果が得られま
	す。
パラ	② < 配列変数>
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	数値型 または 文字列型である必要があります。
使用例1	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [3; 3; 3; 3]
	PRINT DIMNE (A%, B%)
	[TRUE, TRUE, FALSE, TRUE, TRUE]
使用例2	DIM A(2)
	A = [5; 5; 5]
	PRINT DIMNE(A)
	FALSE
	配列Aの各要素を全て等しくないか確認します。

3.3.27 DIMLT

関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、小なりか比較を求めた結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)小なり比較配列値〉= DIMLT(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)	
戻り値	戻り値 <小なり比較配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉〈〈配列変数2〉の比較演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	
	双方が数値型、または文字列型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]	
	B% = [3; 3; 3; 3]	
	PRINT DIMLT (A%, B%)	
	[TRUE, TRUE, FALSE, FALSE]	

3.3.28 DIMGT

日日本7.		
関数		
機能	2つの配列の各要素に対して、大なりか比較を求めた結果を返します。	
書 式	〈(戻り値)大なり比較配列値〉= DIMGT(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)	
戻り値	戻り値 <大なり比較配列値>	配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉〉〈配列変数2〉の比較演算を	
	行った結果が得られます。	
パラ	①	配列
メータ	対象となる配列変数を指定します。	<u>.</u>
	双方が数値型、または文字列型である必要があります。	
使用例	DIM A%(4), B%(4)	
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]	
	B% = [3; 3; 3; 3]	
	PRINT DIMGT(A%, B%)	
	[FALSE, FALSE, TRUE, TRUE]	

3. 3. 29 DIMLTE

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、小なりイコールか比較を求めた結果を返します。
書 式	〈(戻り値)小なりイコール比較配列値〉= DIMLTE(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <小なりイコール比較配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉〈=〈配列変数2〉の比較演算を
	行った結果が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	双方が数値型、または文字列型である必要があります。
使用例	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [3; 3; 3; 3]
	PRINT DIMLTE (A%, B%)
	[TRUE, TRUE, FALSE, FALSE]

3. 3. 30 DIMGTE

関数	
機能	2つの配列の各要素に対して、大なりイコールか比較を求めた結果を返します。
書 式	〈(戻り値)大なりイコール比較配列値〉= DIMGTE(〈①配列変数1〉, 〈①配列変数2〉)
戻り値	戻り値 <大なりイコール比較配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、〈配列変数1〉〉=〈配列変数2〉の比較演算を
	行った結果が得られます。
パラ	①
メータ	対象となる配列変数を指定します。
	双方が数値型、または文字列型である必要があります。
使用例	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [3; 3; 3; 3]
	PRINT DIMGTE (A%, B%)
	[FALSE, FALSE, TRUE, TRUE]

3.3.31 DIMIIF

関数	
機能	評価用の配列の各要素に対して、結果が真であれば真用の配列値を、偽であれば偽用の
	配列値を返します。
書 式	〈(戻り値)評価結果配列値〉= DIMIIF(〈①評価用配列変数〉,〈②真用配列変数〉,〈②偽
	用配列変数〉)
戻り値	戻り値 <評価結果配列値> 配列
	評価用配列変数の各要素に対して、
	評価結果が真ならば、真用の配列変数の値を、
	評価結果が偽であれば、偽用の配列変数の値が、結果用の配列変数に得られます。
パラ	② ② ② ② ② ② ② ② ② ②
メータ	評価を行う数値型の配列変数を指定します。
	② <真用配列変数>、<偽用配列変数> 配列
	評価が真の場合と偽の場合で採用する配列変数を指定します。
	数値型である必要があります。
使用例	BOOL EX(4)
	EX = [TRUE; FALSE; TRUE; FALSE; TRUE]
	DIM A%(4), B%(4)
	A% = [1; 2; 3; 4; 5]
	B% = [-5; -5; -5; -5; -5]
	PRINT DIMIIF (EX, A%, B%)
	[1, -5, 3, -5, 5]
	評価式(EX)の真値(A%)と偽値(B%)を渡して結果を得ます。

3.3.32 DIMIIF\$

関数	
機能	評価用の配列の各要素に対して、結果が真であれば真用の文字列配列値を、偽であれば
	偽用の文字列配列値を返します。
書 式	〈(戻り値)評価結果配列値〉= DIMIIF\$(〈①評価用配列変数〉,〈②真用配列変数〉,〈②偽
	用配列変数〉)
戻り値	戻り値 <評価結果配列値> 配列
	評価用配列変数の各要素に対して、
	評価結果が真ならば、真用の配列変数の値を、
	評価結果が偽であれば、偽用の配列変数の値が、結果用の文字列配列変数に得られます。
パラ	② ② ② ② ② ② ② ② ② ②
メータ	評価を行う数値型の配列変数を指定します。
	② <真用配列変数>,<偽用配列変数> 配列 配列
	評価が真の場合と偽の場合で採用する配列変数を指定します。
	文字列型である必要があります。
使用例	BOOL EX(4)
	EX = [TRUE; FALSE; TRUE; FALSE; TRUE]
	DIM A\$(4), B\$(4)
	A\$ = ["A"; "B"; "C"; "D"; "E"]
	B\$ = ["-"; "-"; "-"; "-"]
	PRINT DIMIIF\$ (EX, A\$, B\$)
	[A, -, C, -, E]
	評価式(EX)の真値(A\$)と偽値(B\$)を渡して結果を得ます。

3. 3. 33 DIMCINT

関数	
機能	文字列または数値配列から、単精度整数の配列に変換します。変換する対象をマスク用
	に配列指定できます。
書 式	〈(戻り値)単精度整数配列値〉 = DIMCINT (〈①変換元配列変数〉 [, 〈②マスク配列変数〉])
戻り値	戻り値 <単精度整数配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、単精度整数を得た結果が、配列形式で得られます。
パラ	①
メータ	変換元となる配列変数を指定します。文字列配列または数値配列が指定できます。
	文字列を変換指定する時、数文字を与えてください。
	② <マスク配列変数> 配列
	指定した配列の添字の値のみ変換するよう、マスク配列変数で指定できます。
	マスク配列変数の、変換したい配列の添字位置に、TRUEを指定します。
	省略時、全ての配列要素が変換対象となります。
使用例	DIM SRC\$(2)
	SRC\$ = ["123.4"; "456.7"; "hello"]
	DIM MSK(2)
	MSK = [TRUE; TRUE; FALSE]
	PRINT DIMCINT(SRC\$, MSK)
	「[123, 457, 0] 」と表示されます。

3. 3. 34 DIMCLNG

文字列または数値配列から、倍精度整数の配列に変換します。変換する対象をマスク用
に配列指定できます。
<(戻り値)倍精度整数配列値> = DIMCLNG(<①変換元配列変数> [, <②マスク配列変数>])
戻り値 <倍精度整数配列値> 配列
配列変数の各要素に対して、倍精度整数を得た結果が、配列形式で得られます。
① <変換元配列変数> 配列
変換元となる配列変数を指定します。文字列配列または数値配列が指定できます。
文字列を変換指定する時、数文字を与えてください。
② <マスク配列変数> 配列
指定した配列の添字の値のみ変換するよう、マスク配列変数で指定できます。
マスク配列変数の、変換したい配列の添字位置に、TRUEを指定します。
省略時、全ての配列要素が変換対象となります。
DIM SRC\$(2)
SRC\$ = ["123.4"; "456.7"; "hello"]
DIM MSK(2)
MSK = [TRUE; TRUE; FALSE]
PRINT DIMCLNG(SRC\$, MSK)
11212 2216 (6164)
「[123, 457, 0] 」と表示されます。

3. 3. 35 DIMCSNG

関数	
機能	文字列または数値配列から、単精度実数の配列に変換します。変換する対象をマスク用
	に配列指定できます。
書 式	〈(戻り値)単精度実数配列値〉 = DIMCSNG(〈①変換元配列変数〉[,〈②マスク配列変数〉])
戻り値	戻り値 <単精度実数配列値> 配列
	配列変数の各要素に対して、単精度実数を得た結果が、配列形式で得られます。
パラ	① < 変換元配列変数> 配列
メータ	変換元となる配列変数を指定します。文字列配列または数値配列が指定できます。
	文字列を変換指定する時、数文字を与えてください。
	② <マスク配列変数> 配列
	指定した配列の添字の値のみ変換するよう、マスク配列変数で指定できます。
	マスク配列変数の、変換したい配列の添字位置に、TRUEを指定します。
	省略時、全ての配列要素が変換対象となります。
使用例	DIM SRC\$(2)
	SRC\$ = ["123.4"; "456.7"; "hello"]
	DIM MSK(2)
	MSK = [TRUE; TRUE; FALSE]
	PRINT DIMCSNG(SRC\$, MSK)
	「[123.4, 456.7, 0] 」と表示されます。

3. 3. 36 DIMCDBL

関数						
機能	文字列または数値配列から、倍精度実数の配列に変換します。変換する対象をマスク用					
	に配列指定できます。					
書 式	〈(戻り値)倍精度実数配列値〉= DIMCDBL(〈①変換元配列変数〉[,〈②マスク配列変数〉])					
戻り値	戻り値 <倍精度実数配列値> 配列					
	配列変数の各要素に対して、倍精度実数を得た結果が、配列形式で得られます。					
パラ	② (変換元配列変数) 配列					
メータ	変換元となる配列変数を指定します。文字列配列または数値配列が指定できます。					
	文字列を変換指定する時、数文字を与えてください。					
	② <マスク配列変数> 配列					
	指定した配列の添字の値のみ変換するよう、マスク配列変数で指定できます。					
	マスク配列変数の、変換したい配列の添字位置に、TRUEを指定します。					
	省略時、全ての配列要素が変換対象となります。					
使用例	DIM SRC\$(2)					
	SRC\$ = ["123.4"; "456.7"; "hello"]					
	DIM MSK(2)					
	MSK = [TRUE; TRUE; FALSE]					
	PRINT DIMCDBL(SRC\$, MSK)					
	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,					
	「[123.4, 456.7, 0] 」と表示されます。					

3.3.37 DIMCSTR\$

		1				
関数						
機能	数値配列から、数文字に変換した文字列の配列に変換します。変換する対象をマスク用					
	に配列指定できます。					
書 式	〈(戻り値)文字列配列値〉= DIMCSTR\$(〈①変換元配列変数〉[, 〈②マスク配列変数〉])					
戻り値	戻り値 <文字列配列値>	配列				
	配列変数の各要素に対して、数文字に変換して得た結果が、配列形式で得られま	す。				
パラ	<変換元配列変数>	配列				
メータ	変換元となる配列変数を指定します。数値配列が指定できます。					
	② <マスク配列変数> 配列					
	指定した配列の添字の値のみ変換するよう、マスク配列変数で指定できます。					
	マスク配列変数の、変換したい配列の添字位置に、TRUEを指定します。					
	省略時、全ての配列要素が変換対象となります。					
使用例	DIM SRC(2)					
	SRC = [123.4; 456.7; -100]					
	DIM MSK(2)					
	MSK = [TRUE; TRUE; FALSE]					
	PRINT DIMCSTR\$ (SRC, MSK)					
	「[123.400000, 456.700000,] 」と表示されます。					
	「[123.400000, 456.700000,] 」と表示されます。					

3.3.38 DIMFIND

関数							
機能	配列に対して、検索値と一致する要素の添字番号を求めます。						
書 式	<(戻り値)添字番号配列> = DIMFIND(<①配列>, <②検索値> [, <③モード> [,	〈④検索					
	開始位置〉,〈④検索終了位置〉]])						
戻り値							
	配列に対して検索値と一致した要素の添字番号を、配列に得られます。						
	配列が2次元配列の場合、一致した要素の情報は、n × 2の2次元配列形式が得られます。						
	配列に対して、一致する要素が無い時、-1 を返します。						
パラ	(配列) 配列						
メータ	検索対象となる配列を指定します。						
	1次元配列もしくは、2次元配列を指定してください。						
	 《検索値 >	数値 /					
		文字列					
	配列に対して、検索を行う値を指定します。	₩/./→					
	③ <モード>	数値					
	検索方法を指定します。複数のモード値同士を OR する事ができます。						
	省略時、0とみなします。						
	モード値内容						
	&H1 配列が文字列配列の時、検索値が部分一致で一致とみなします。						
	0の時は、完全一致を必要とします。						
	&H2 検索が1つ一致すれば、それ以上の検索を中断します。						
	0の時は、全要素に対して検索を行います。						
	&H4 部分一致(&H1) と OR すると、前方一致で一致とみなします。						
	&H8 部分一致(&H1) と OR すると、後方一致で一致とみなします。						
	④ <検索開始位置>, <検索終了位置> 数値 検索を開始する添字番号と検索を終了する添字番号を指定します。 2次元配列の場合、2要素の1次元配列で指定します。						
	省略時、配列の全要素を検索するように、開始位置と終了位置が設定されます。						
使用例1	LIST ARY ARY = [1; 2; 3; 1; 2; 3; 4; 5] PRINT DIMFIND(ARY, 2)						
	^ 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。						
使用例2	'1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5)						
使用例2	'1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1)						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2)						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y						
使用例2	<pre>' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5])</pre>						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3, 5], [4, 5], [5, 5]」が表 	表示され					
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1,4]」が表示されます。 DIM ARY(5,5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3,5], [4,5], [5,5]」が表ます。 						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) ' 2次元配列に対して検索を行います。「[3, 5], [4, 5], [5, 5]」が記ます。 * 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1,4]」が表示されます。 DIM ARY(5,5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3,5], [4,5], [5,5]」が表ます。 						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1,4]」が表示されます。 DIM ARY(5,5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3,5], [4,5], [5,5]」が記ます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。 ① 1 2 3 4 5 ←2次元目 ① 1 2 3 4 5 ① 1 2 3 4 5 						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1,4]」が表示されます。 DIM ARY(5,5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3,5], [4,5], [5,5]」が記ます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当しまます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当しまます。 0 1 2 3 4 5 ←2次元目 0 1 2 3 4 5 						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3, 5], [4, 5], [5, 5]」が表ます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。 0 1 2 3 4 5 ←2 次元目 0 1 2 3 4 5 						
使用例2	 1次元配列に対して検索を行います。「[1,4]」が表示されます。 DIM ARY(5,5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) 2次元配列に対して検索を行います。「[3,5], [4,5], [5,5]」が記ます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当しまます。 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当しまます。 0 1 2 3 4 5 ←2次元目 0 1 2 3 4 5 						
使用例2	' 1次元配列に対して検索を行います。「[1, 4]」が表示されます。 DIM ARY(5, 5) FOR Y=0 TO UBOUND(ARY, 1) FOR X=0 TO UBOUND(ARY, 2) ARY(Y, X) = X NEXT X NEXT Y PRINT DIMFIND(ARY, 5, 0, [3;5], [5;5]) ' 2次元配列に対して検索を行います。「[3, 5], [4, 5], [5, 5]」が表ます。 ' 検索開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。 0 1 2 3 4 5 ←2次元目 0 0 1 2 3 4 5 1 0 1 2 3 4 5 1 0 1 2 3 4 5 1 5 1 0 1 2 3 4 5 1 0 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1 2 1 2 3 4 5 1						

3.3.39 DIMGET

関数						
機能	1次元または2次元の数値配列に対して、指定した範囲を部分配列として取り出します。					
書 式	<(戻り値)部分配列> = DIMGET(<①元配列>, <②開始位置> [, <③終了位置>])					
戻り値	戻り値 <部分配列> 配列					
	元配列に対して、指定した開始位置から終了位置までを部分配列として取得します。					
パラ	① 《元配列》 配列					
メータ	取得対象となる配列を指定します。					
	1次元もしくは、2次元の数値配列を指定してください。					
	②、③					
	取得する部分配列の開始の添字位置から、終了の添字位置を指定します。					
	2次元配列の場合、2要素の1次元配列で指定します。					
	終了位置を省略もしくは、-1 を指定すると、配列の末尾が設定されます。					
使用例	DIM ARY(3, 3)					
	ARY = [0 to 15]					
	LIST TMP					
	TMP = DIMGET(ARY, [0; 1], [3; 2])					
	PRINT TMP					
	, 2次元配列に対して部分配列を取得します。					
	'「[1,2], [5,6], [9,10], [13,14]」が表示されます。					
	プログラストン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン					
	0 1 2 3 ←2 次元目					
	$egin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$					
	$egin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$					
	3 12 13 14 15					
	↑1 次元目					

3. 3. 40 DIMGET\$

関数							
機能	1次元または2次元の文字列配列に対して、指定した範囲を部分配列として取り出しま						
	す。						
書 式	<(戻り値)部分配列> = DIMGET\$(<①元配列>, <②開始位置> [, <③終了位置>])						
戻り値	戻り値 <部分配列> 配列						
	元配列に対して、指定した開始位置から終了位置までを部分配列として取得します。						
パラ	(1) (元配列) 配列						
メータ	① ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○						
7 7	取得対象となる配列を指定します。 1次元もしくは、2次元の文字列配列を指定してください。						
	②、③						
	取得する部分配列の開始の添字位置から、終了の添字位置を指定します。						
	2次元配列の場合、2要素の1次元配列で指定します。						
	終了位置を省略もしくは、-1 を指定すると、配列の末尾が設定されます。						
使用例	DIM ARY\$ (3, 3)						
	ARY\$ = SPLIT\$("a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p", ",")						
	LIST TMP\$						
	TMP\$ = DIMGET\$(ARY\$, [0; 1], [3; 2])						
	PRINT TMP\$						
	, 2次元配列に対して部分配列を取得します。						
	'「[b,c], [f,g], [j,k], [n,o]」が表示されます。						
	プログログログログログ						
	0 1 2 3 ←2 次元目 0 a b c d						
	$ \begin{array}{c ccccc} 0 & a & b & c & d \\ 1 & e & f & g & h \end{array} $						
	2 i j k l						
	3 <u>m n o p</u>						
	↑1 次元目						

3. 3. 41 DIMMAP

関数							
機能	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、返された値からなる配列を作りま						
	す。						
書 式	〈(戻り値)結果配列〉= DIMMAP(〈①呼び出し関数〉,〈②配列〉,〈③オプション値〉)						
戻り値	戻り値 <結果値> 配列						
	配列の各要素に対して、呼び出し関数を呼び出した戻り値からなる数値配列が得られます。						
パラ	①						
メータ	配列の各要素に対して呼び出す、ユーザー定義関数名を指定します。						
	ユーザ定義関数名は、以下の定義に従います。						
	' A 配列の各要素値です						
	' OPT オプション値が渡されます						
	, POS Aの添え字情報を、次元毎に整理した1次元配列が渡されます						
	FUNCTION 呼び出し関数名(A, OPT, POS AS LIST)						
	处理内容						
	呼び出し関数名 = 戻り値						
	END FUNCTION						
	END PUNCTION						
	② <配列> 配列						
	対象となる配列変数を指定します。						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。						
備考	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③ <オプション値> 値						
備考	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③ <オプション値> 値 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。						
備考	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③ <オプション値> 値 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。						
備考	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。						
備考	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	対象となる配列変数を指定します。 数値型または文字列型である必要があります。 ③						

3. 3. 42 DIMMAP\$

関数							
機能	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、返された値からなる文字列配列を作						
	ります。						
書 式	〈(戻り値)結果配列〉= DIMMAP\$(〈①呼び出し関数〉,〈②配列〉,〈③オプション値〉)						
戻り値	戻り値 <結果値> 配列						
	配列の各要素に対して、呼び出し関数を呼び出した戻り値からなる文字列配列が得られます。						
パラ	① <呼び出し関数> 関数名						
メータ	配列の各要素に対して呼び出す、ユーザー定義関数名を指定します。						
	ユーザ定義関数名は、以下の定義に従います。						
	'A 配列の各要素値です						
	' OPT オプション値が渡されます						
	'POS Aの添え字情報を、次元毎に整理した1次元配列が渡されます						
	FUNCTION 呼び出し関数名\$(A, OPT, POS AS LIST)						
	<u>如理内容</u>						
	呼び出し関数名\$ = 戻り値						
_	END FUNCTION						
	②						
	対象となる配列変数を指定します。						
	数値型または文字列型である必要があります。						
	数値型または文字列型である必要があります。 <オプション値> 値						
借娄	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値) 値 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。						
備考	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値> 値 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。						
備考	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値) 値 9 マオプション値を指定します。 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。 FOR I=0 TO UBOUND(配列)						
備考	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値> 値 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。						
	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値) 値 ③ マプション値を指定します。 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。 FOR I=0 TO UBOUND(配列) 新配列\$(I) = 呼び出し関数名\$(配列(I), オプション値, 添え字情報) NEXT I NEXT I						
備考	数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	数値型または文字列型である必要があります。 (オプション値) 値 ③ マプション値を指定します。 呼び出し関数の事例で、OPT に渡すオプション値を指定します。 本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。 FOR I=0 TO UBOUND(配列) 新配列\$(I) = 呼び出し関数名\$(配列(I), オプション値, 添え字情報) NEXT I NEXT I						
	数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	数値型または文字列型である必要があります。 ③						
	数値型または文字列型である必要があります。 ③						

3. 3. 43 DIMREDUCE

関数							
機能	配列の各要素に対して指定した関数を呼び出して、一つの値にまとめます。						
書 式	<(戻り値)結果値> = DIMREDUCE(<①呼び出し関数>, <②配列>)						
戻り値	戻り値 <結果値> 数値						
	元配列に対して、指定した開始位置から終了位置までを部分配列として取得します。						
パラ	① <呼び出し関数> 関数名						
メータ	配列の各要素に対して呼び出す、ユーザー定義関数名を指定します。						
	ユーザ定義関数名は、以下の定義に従います。						
	FUNCTION 呼び出し関数名(A, B)						
	处理内容						
	呼び出し関数名 = 戻り値						
	END FUNCTION						
	② <配列> 配列						
	対象となる配列変数を指定します。						
	数値型である必要があります。						
備考	本関数は、以下の仮想コード例のように動作します。						
	A = 配列(0)						
	FOR I=1 TO UBOUND (西己列)						
	A = 呼び出し関数名(A, 配列(I))						
井田を	NEXT I						
使用例	FUNCTION ADD (A, B)						
	ADD = A + B END FUNCTION						
	END FUNCTION						
	LIST ARY						
	ARY = [1; 2; 3; 4; 5; 6; 7; 8; 9]						
	PRINT DIMREDUCE (ADD, ARY)						
	ARYの各要素に対して ADD 関数が呼ばれた結果、「45」が表示されます。						
	1111111 女家での して 1111 内数が 1111は 111に 111人、 1110 112人のできます。						

3. 3. 44 DIMSET

命令							
機能	1次元または2次元の配列に対して、指定領域をコピー元配列で上書きします。						
書式	DIMSET 〈①コピー先配列〉, 〈②コピー元配列〉, 〈③開始位置〉 [, 〈④終了位置〉]						
パラ	(コピー先配列) 配列						
メータ	コピー元配列から上書きされる配列を指定します。						
	1次元もしくは、2次元の数値または文字列配列を指定してください。						
	② <コピー元配列> 配列						
	上書きする元となる配列を指定します。						
	コピー先配列と同じ型の、1次元もしくは、2次元の数値または文字列配列を指定して						
	ください。						
	②、③ <開始位置>, <終了位置> 数値						
	コピー元配列からコピー先配列に対して上書きする、開始の添字位置から、終了の添字位置						
	を指定します。						
	2次元配列の場合、2要素の1次元配列で指定します。						
	終了位置を省略もしくは、-1 を指定すると、開始位置からコピー元配列の末尾に相当する位						
	置が設定されます。						
	終了位置が、開始位置からコピー元配列より大きい位置を指定した時、繰り返し上書きされ						
ملد ملد	ます。						
備考	・終了位置がコピー元配列の大きさを超えて指定した場合、コピー元配列の大きさで上書						
法田島	きは終わります。						
使用例1	DIM LV(3, 6), RV(2, 2) LV = [1 to 28]						
	RV = [100 to 108]						
	DIMSET LV, RV, [2; 1]						
	PRINT LV						
	' [[1, 2, 3, 4, 5, 6, 7], [8, 9, 10, 11, 12, 13, 14], [15, 100, 101, 102, 19,						
	20, 21], [22, 103, 104, 105, 26, 27, 28]]」が表示されます。						
	20, 21 引, 22, 100, 101, 100, 20, 21, 20 引 が 3人 で 20, 21 引 が						
	Mark Lie Land						
	0 1 2 3 4 5 6 7						
	1 8 9 10 11 12 13 14						
	2 15 50 51 52 19 20 21						
	3 <u>22 <mark>53 54 55</mark> 26 27 28</u> ↑1 次元目						
使用例2	DIM LV(3, 6), RV(2, 2)						
	LV = [1 to 28]						
	RV = [100 to 108]						
	DIMSET LV, RV, [1; 1], [4; 5]						
	PRINT LV						
	' 「[[1, 2, 3, 4, 5, 6, 7], [8, 9, 10, 11, 12, 13, 14], [15, 100, 101, 102, 19,						
	20, 21],[22, 103, 104, 105, 26, 27, 28]]」が表示されます。						
	' 開始位置と検索終了位置は、ARY配列に対して下図の水色部分が該当します。						
	0 1 2 3 4 5 6 ←2 次元目 0 1 2 3 4 5 6 7						
	$egin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$						
	2 15 53 54 55 53 54 21						
	3 22 56 57 58 56 57 28						
	↑1 次元目						

3. 3. 45 NUM2BIT

書 式 <(原ビッ 戻り値 戻り値 パラ メータ		最上位 配列 数值					
書 式 <(原ビッ 戻り値 戻り値 パラ メータ	9値) ビット配列> = NUM2BIT(〈①変換元数値〉,〈②マスクビット数〉[,〈③ト開始〉]) 値	配列					
戻り値 戻り値 戻 数単 パラメータ 交 文 3 () と 単 信 () と	ト開始〉]) (ビット配列> (でット配列> (でット単位に 1 ないしは 0 に分解した配列が得られます。 (本度整数の配列となります。 (本度整数の配列となります。 (本度を表しての数値を指定します。 (本度を表しての数値を指定します。 (本度を表して必要します。 (本度を表しを表して必要します。 (本度を表しを表しを表してを表して必要します。 (本度を表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを表しを	配列					
戻り値 戻り値 戻り値 パラメータ ダメリータ ダメリー・ と 単 信 に と に と に と に かんし と で で かんし と に で と に と に を で かんし と に を で かんし と に を で かんし と に と に と に と に と に と に と に と に と に と							
がラ メータ 変 文 リ に 単 信	値をビット単位に 1 ないしは 0 に分解した配列が得られます。 精度整数の配列となります。 変換元数値> 換対象となる元の数値を指定します。 象となる数値は、単精度整数あるいは倍精度整数です。 数を与えると、整数に変換して処理します。						
学 パラ メータ 変 文 () () () () () () () () ()	精度整数の配列となります。	数值					
パラ メータ 変 文 ま () に は	<変換元数値> 換対象となる元の数値を指定します。 象となる数値は、単精度整数あるいは倍精度整数です。 数を与えると、整数に変換して処理します。	数值					
メータ 変 文 3 () L は () L に	換対象となる元の数値を指定します。 象となる数値は、単精度整数あるいは倍精度整数です。 数を与えると、整数に変換して処理します。	数值					
文 (() () () () () ()	象となる数値は、単精度整数あるいは倍精度整数です。 数を与えると、整数に変換して処理します。						
() () () () () () () () ()	数を与えると、整数に変換して処理します。						
(上 住 (上							
·····································		実数を与えると、整数に変換して処理します。					
単 信 	②						
信 (ビット分解する数値のビット数を指定します。						
(t	単精度整数は、1から32まで指定できます。						
t	倍精度整数は、33から64まで指定できます。						
	③ <最上位ビット開始> 真偽値						
F	ビット分解を開始するのを、最下位ビットから行うか最上位ビットから行うか指定できます。						
1.	ALSE:最下位ビットから開始します。(省略時)						
T	P						
備考 変換	RUE:最上位ビットから開始します。						
使用例 PRII	RUE: 最上位ピットから開始します。 :元数値は、配列を指定可能です。						

3. 3. 46 BIT2NUM

関数					
機能	ビット単位の配列を数値に結合します。				
書 式	〈(戻り値)結合数値〉= BIT2NUM(〈①ビット配列〉,〈②マスクビット数〉[, 〈③最上位ビ				
	ット開始>])				
戻り値	戻り値 <結合数値> 配列				
	ビット配列を結合して数値に変換した値が得られます。				
	マスクビット数の指定により、単精度整数の配列か、倍精度整数の配列が得られます。				
パラ	① <ビット配列> 配列				
メータ	変換対象となる元のビット配列を指定します。				
	「NUM2BIT」関数の戻り値を期待します。				
	② <マスクビット数> 数値				
	ビット結合する数値のビット数を指定します。				
	単精度整数は、1から32まで指定できます。				
	倍精度整数は、33から64まで指定できます。				
	③ <最上位ビット開始> 真偽値				
	ビット結合を開始するのを、最下位ビットから行うか最上位ビットから行うか指定できます。				
	FALSE:最下位ビットから開始します。(省略時)				
	TRUE: 最上位ビットから開始します。				
備考					
使用例	LIST ARY				
	ARY = NUM2BIT(&H12, 8)				
	PRINT BIT2NUM(ARY, 8)				

3.3.47 ONEDIM SORT

関数				
機能	数値の1次元配列に対	してソートした結果を得ます。		
書 式	く(戻り値)結果配列>	= ONEDIM SORT(<①元配列> [, <②オプション>])		
戻り値	戻り値	<結果配列>	配列	
	ソートされた、新たな配列変数が得られます。			
パラ	1)	<元配列>	配列	
メータ	ソートしたい配列変数を指定します。			
	数値型の1次元配列を指定して下さい。			
	②			
	ソート方法を指示します。省略すると、0が採用されます。			
	オプション	動作	_	
	0	昇順にソートします。		
	1	降順にソートします。		
	2	予約値		
		•	-	
	LIST A			
使用例	A = [1;2;3;4;5]			
	? ONEDIM SORT(A)			

3. 3. 48 ONEDIM SORT\$

関数			
機能	文字列の1次元配列(こ対してソートした結果を得ます。	
書 式	く(戻り値)結果配列	> = ONEDIM SORT\$(<①元配列> [, <②オプション>])	
戻り値	戻り値	<結果配列>	配列
	ソートされた、新	たな配列変数が得られます。	-
パラ	1	<元配列>	配列
メータ	ソートしたい配列	川変数を指定します。	
'		配列を指定して下さい。	
	2	<オプション>	数值
	ソート方法を指え		
	オプション	動作	
	0	昇順にソートします。	
	1	降順にソートします。	
	2	予約値	
	4	文字列が数値として扱える時、数値として比較します。	-
			1
備考	オプション:4を指	定しつつ降順ソートする場合、4 or 1 = 5 を指定します	0
	LIST A\$		
使用例	A\$ = ["abc"; "12	3"; "hoge"]	
	? ONEDIM SORT\$(A\$)	

3.3.49 TWODIM FILTER

関数	
機能	2次元の数値配列の指定された添え字の値に対して、指定した関数を呼び出し、結果が
.,,	真の行ないしは列からなる配列を作ります。
書 式	<(戻り値)新配列> = TWODIM FILTER <①方向> (〈②呼び出し関数〉,〈③元配列>,〈④
	インデックス〉)
戻り値	戻り値 <新配列> 配列
	元配列に対して、行列を入れ替えた配列を得ます。
パラ	(方向) キーワート・
メータ	ROW を指定すると、行毎の配列を作ります。
	COLUMN を指定すると、列毎の配列を作ります。
	②
	元配列の指定した添え字に対して呼び出す、ユーザー定義関数名を指定します。
_	ユーザー定義関数名は、以下の定義に従います。
	'A 評価したい配列の要素値です
	'POS A の添え字情報を、次元毎に整理した1次元配列が渡されます
	' 戻り値 新配列に抽出したいとき TRUE を返します
	FUNCTION 呼び出し関数名(A, POS AS LIST) AS BOOL 処理内容
	呼び出し関数名 = 戻り値
	END FUNCTION
	END TOTOTION
	(3) (元配列) 配列
	③ <元配列> 配列
	③ <元配列> 配列 評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。
	評価対象となる配列を指定します。
	評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。
	評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。 ④ <インデックス> 数値
	評価対象となる配列を指定します。2次元の数値配列を指定してください。※インデックス>数値呼び出し関数を呼び出す際に走査する、行ないしは列番号を指定します。
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。 ④
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。 ④ <インデックス> 数値 呼び出し関数を呼び出す際に走査する、行ないしは列番号を指定します。 方向引数で ROW を指定した時、列番号を指定します。 方向引数で COLUMN を指定した時、行番号を指定します。
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の数値配列を指定してください。 ④

3.3.50 TWODIM FILTER\$

関数	
機能	2次元の文字列配列の指定された添え字の値に対して、指定した関数を呼び出し、結果
1/A 14E	が真の行ないしは列からなる配列を作ります。
書式	<(戻り値)新配列> = TWODIM FILTER\$ <①方向> (<②呼び出し関数>, <③元配列>, <
	(4/2)
 戻り値	戻り値 <新配列> 配列
77 7 III	元配列に対して、行列を入れ替えた配列を得ます。
	7
パラ	① <方向> キーワード
メータ	ROW を指定すると、行毎の配列を作ります。
	COLUMN を指定すると、列毎の配列を作ります。
	② <呼び出し関数> 関数名
	元配列の指定した添え字に対して呼び出す、ユーザー定義関数名を指定します。
	ユーザー定義関数名は、以下の定義に従います。
	,A 評価したい配列の要素値です
	' POS A の添え字情報を、次元毎に整理した 1 次元配列が渡されます
)戻り値 新配列に抽出したいとき TRUE を返します
	FUNCTION 呼び出し関数名(A\$, POS AS LIST) AS BOOL
	处理内容
	呼び出し関数名 = 戻り値
	END FUNCTION
	्राह्म
	③ <元配列> 配列 配列
	評価対象となる配列を指定します。
	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。
	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④ <インデックス> 数値
	評価対象となる配列を指定します。2次元の文字列配列を指定してください。※インデックス>数値呼び出し関数を呼び出す際に走査する、行ないしは列番号を指定します。
	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④ <インデックス> 呼び出し関数を呼び出す際に走査する、行ないしは列番号を指定します。 方向引数で ROW を指定した時、列番号を指定します。 方向引数で COLUMN を指定した時、行番号を指定します。
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④ <インデックス> 呼び出し関数を呼び出す際に走査する、行ないしは列番号を指定します。 方向引数で ROW を指定した時、列番号を指定します。 方向引数で COLUMN を指定した時、行番号を指定します。
使用例	評価対象となる配列を指定します。 2次元の文字列配列を指定してください。 ④

3.3.51 TWODIM JOIN

関数			
機能	2つの数値の2次元配列を指定した結合列を基準に、結合した配列を得ます。		
書 式	〈(戻り値)新配列〉= TWODIM JOIN〈①方向〉(〈②結合方法〉,〈③元配列A〉,〈④結合列		
	番号A>,〈③元配列B>,〈④結合列番号B>)		
戻り値	戻り値 <新配列> 配列		
	結合列を基準に、結合した新規配列を返します。		
パラ	(方向>	キーワート゛	
メータ			
	②	数值	
	2つの配列の、結合列の各値を比較し、合致した行を、どの	ように結合させるか、その方法を	
	指示します。		
	結合方法 動作	備考	
	元配列 A 元配列 B	SQL では、INNER JOIN(内	
		部結合)に相当する処理です。	
	両方の配列で合致した行のみが抽出&結合	9 0	
	されます。		
	2 元配列 A 元配列 B	SQL では、LEFT OUTER	
		JOIN(左外部結合) に相当 する処理です。	
	元配列Aの全てと、元配列Bの合致した行が抽	7.002.07.	
	出&結合されます。		
		ボコズル	
	③ <元配列A>, <元配列B> 配列		
	2次元の数値配列を指定してください。		
	④ <結合列番号A>, <結合列番号	B> 数值	
	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。	1	
使用例	DIM LV(2, 3)		
	LV = [[1; 2; 3; 4], [5; 6; 7; 8], [9; 10; 11;	12]]	
	DIM RV(2, 2)	٦ -	
	RV = [[10; 2; 12], [13; 6; 15], [16; 17; 18]]		
	,INNTER JOIN の例		
	PRINT TWODIM JOIN ROW(1, LV, 1, RV, 1)		
	「[[1; 2; 3; 4; 10; 12], [5; 6; 7; 8; 13; 15]] が得られます		
	、LEFT OUTER JOIN の例		
	PRINT TWODIM JOIN ROW(2, LV, 1, RV, 1)		
	' [[1; 2; 3; 4; 10; 12], [5; 6; 7; 8; 13; 15], 得られます	[9; 10; 11; 12; 0; 0]] $\cancel{5}^{5}$	
	付り40よ9		

3.3.52 TWODIM JOIN\$

関数			
機能	2つの文字列の2次元配列を指定した結合列を基準に、結合した配列を得ます。		
書式	(戻り値)新配列> = TWODIM JOIN\$ 〈①方向〉(〈②結合方法〉,〈③元配列A〉,〈④結合		
I	列番号A〉, 〈③元配列B〉, 〈④結合列番号B〉)		
戻り値	戻り値		
	結合列を基準に、結合した新規配列を返します。		
パラ	(方向)	キーワート゛	
メータ	ROW を指定してください。行毎の配列が作られます。	*L-1-±	
	② <結合方法>	ようには今されるか、その古法な	
	2500配列の、福音列の各個を比較し、音致した行を、との指示します。	よりに稲台させるが、その方法を	
	結合方法・動作	備考	
	1	SQL では、INNER JOIN(内	
	元配列 A 元配列 B	部結合) に相当する処理で	
	五十の町でもなり と行のたが 地川 0 休人	す。	
	両方の配列で合致した行のみが抽出&結合 されます。		
	2	SQL では、LEFT OUTER	
	元配列 A 元配列 B	JOIN(左外部結合) に相当	
		する処理です。	
	元配列Aの全てと、元配列Bの合致した行が抽出を結合されます。		
	ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш ш		
	③ <元配列A>, <元配列B> 配列		
	2次元の文字列配列を指定してください。		
	④ <結合列番号A>, <結合列番号B> 数值		
	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。		
使用例	DIM LV\$(2, 3)	5 11 2 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11	
	LV\$ = [["1"; "2"; "3"; "4"], ["5"; "6"; "7"; "8"]	, ["9"; "10"; "11"; "12"]]	
	DIM RV\$(2, 2) RV\$ = [["10"; "2"; "12"], ["13"; "6"; "15"], [″16″・″17″・″19″]]	
	$\mathbf{R}^{V\phi} = [[\ 10\ ,\ 2\ ,\ 12\],\ [\ 13\ ,\ 0\ ,\ 13\],\ [\]$	10 , 17 , 18]]	
	'INNTER JOIN の例		
	PRINT TWODIM JOIN\$ ROW(1, LV\$, 1, RV\$, 1)		
	「[[1; 2; 3; 4; 10; 12], [5; 6; 7; 8; 13; 15]] が得られます		
	'LEFT OUTER JOIN の例		
	PRINT TWODIM JOIN\$ ROW(2, LV\$, 1, RV\$, 1)	5 0 10 11 12 33 33	
	[1; 2; 3; 4; 10; 12], [5; 6; 7; 8; 13; 15],	[9; 10; 11; 12; ;]」が得	
	られます		

3.3.53 TWODIM EXISTS

関数			
機能	2つの数値の2次元配列を指定した評価列を基準に、一致した行を抜き出した配列を得ま		
	す。		
書 式	〈(戻り値)新配列〉= TWODIM EXISTS 〈①方向〉([〈②モード〉,] 〈③元配列A〉, 〈④評		
	価列番号A〉,〈③元配列B〉,〈④評価列番号B〉)		
戻り値	戻り値 <新配列> 配列		
	評価列を基準に、一致した行を抜き出した新規配列を返します。		
	抜き出す対象は、元配列Aです。		
パラ	(方向) (キーワート・)		
メータ	ROW を指定してください。行毎の配列が作られます。		
	② <モード> 数値		
	2つの配列を比較し、抜き出す方法を指定します。		
	モード動作		
	1 元配列AとBの指定した評価列の値が一致すればOK。		
	元配列AとB それぞれに重複があっても、重複削除はしません。 元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。		
	プログラン・ファイン (ローラン)		
	元配列Bに重複があると、重複削除します。		
	元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。		
	③ <元配列A>, <元配列B> 配列		
	走査対象となる配列を指定します。		
	2次元の数値配列を指定してください。		
	④ <評価列番号A>, <評価列番号B> 数值		
	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。		
使用例	DIM X(4, 2)		
	X = [[1; 1; 100], [2; 2; 200], [1; 3; 300], [2; 4; 400]; [3; 5; 500]]		
	DIM Y(1, 1)		
	Y = [[1; 10], [2; 20]]		
	? TWODIM EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)		
	'「[[1, 1, 100], [2, 2, 200], [1, 3, 300], [2, 4, 400]]」と表示されます。		
	? TWODIM NOT EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)		
	'「[[3,5,500]]」と表示されます。		

3.3.54 TWODIM EXISTS\$

関数		
機能	2つの文字列の2次元配列を指定した評価列を基準に、一致した行を抜き出した配列を得	
	ます。	
書 式	<(戻り値)新配列> = TWODIM EXISTS\$ <①方向> ([<②モード>,] <③元配列A>, <④	
	評価列番号A>,〈③元配列B>,〈④評価列番号B>)	
戻り値	戻り値 <新配列> 配列	
	評価列を基準に、一致した行を抜き出した新規配列を返します。	
	抜き出す対象は、元配列Aです。	
パラ	① <方向> キーワード	
メータ	ROW を指定してください。行毎の配列が作られます。	
	②	
_	2つの配列を比較し、抜き出す方法を指定します。	
	モード動作	
	1 元配列AとBの指定した評価列の値が一致すればOK。	
	元配列AとB それぞれに重複があっても、重複削除はしません。 元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。	
	2 元配列AとBの指定した評価列の値が一致すればOK。	
	元配列Bに重複があると、重複削除します。	
	元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。	
	③ <元配列A> , <元配列B> 配列	
	走査対象となる配列を指定します。	
_	2次元の文字列配列を指定してください。	
	④ <評価列番号A>, <評価列番号B>	
11. PH 5-1	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。	
使用例	DIM X(4, 2)	
	X = [[1; 1; 100], [2; 2; 200], [1; 3; 300], [2; 4; 400]; [3; 5; 500]]	
	DIM Y(1, 1)	
	Y = [[1; 10], [2; 20]]	
	2 TWODIN EVICES DOW (V O V O)	
	? TWODIM EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	'「[[1, 1, 100], [2, 2, 200], [1, 3, 300], [2, 4, 400]]」と表示されます。	
	? TWODIM NOT EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	'「[[3, 5, 500]]」と表示されます。	

3.3.55 TWODIM NOT EXISTS

関数		
機能	2つの数値の2次元配列を指定した評価列を基準に、不一致の行を抜き出した配列を得ま	
	す。	
書 式	<(戻り値)新配列〉= TWODIM NOT EXISTS 〈①方向〉(〈②元配列A〉,〈③評価列番号A〉,〈	
	②元配列B>,〈③評価列番号B>)	
戻り値	戻り値 <新配列> 配列	
	評価列を基準に、不一致の行を抜き出した新規配列を返します。	
	抜き出す対象は、元配列Aです。	
パラ	① <方向> キーワード	
メータ	ROW を指定してください。行毎の配列が作られます。	
	② <元配列A>, <元配列B> 配列	
	走査対象となる配列を指定します。	
	2次元の数値配列を指定してください。	
	③ <評価列番号A> , < 評価列番号B> 数值	
	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。	
備考	本関数は、以下のように動作します。	
	1. 元配列AとBの指定した評価列の値が全て不一致すればOK。	
	(元配列Aの評価値に対して、元配列Bの全ての評価値が不一致である事)	
	2. 元配列Bに重複があると、重複削除します。	
	3. 元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。	
使用例	DIM X(4, 2)	
	X = [[1; 1; 100], [2; 2; 200], [1; 3; 300], [2; 4; 400]; [3; 5; 500]]	
	DIM Y(1, 1)	
	Y = [[1; 10], [2; 20]]	
	? TWODIM EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	' 「[[1, 1, 100],[2, 2, 200],[1, 3, 300],[2, 4, 400]]」と表示されます。	
	? TWODIM NOT EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	'「[[3, 5, 500]]」と表示されます。	

3.3.56 TWODIM NOT EXISTS\$

関数		
機能	2つの文字列の2次元配列を指定した評価列を基準に、不一致の行を抜き出した配列を得	
	ます。	
書 式	<(戻り値)新配列>= TWODIM NOT EXISTS\$〈①方向〉(〈②元配列A〉,〈③評価列番号A〉,	
	〈②元配列B〉,〈③評価列番号B〉)	
戻り値	戻り値 <新配列> 配列	
	評価列を基準に、不一致の行を抜き出した新規配列を返します。	
_	抜き出す対象は、元配列Aです。	
パラ	(方向) キーワート*	
メータ	ROW を指定してください。行毎の配列が作られます。	
	② <元配列A>, <元配列B> 配列	
	走査対象となる配列を指定します。	
	2次元の文字列配列を指定してください。	
	③ <評価列番号A>, <評価列番号B> 数值	
	元配列の評価対象となる結合列の番号を指定します。	
備考	本関数は、以下のように動作します。	
	1. 元配列AとBの指定した評価列の値が全て不一致すればOK。	
	(元配列Aの評価値に対して、元配列Bの全ての評価値が不一致である事)	
	2. 元配列Bに重複があると、重複削除します。	
	3. 元配列の順序通りで結果が得られます。整列されません。	
使用例	DIM X(4, 2)	
	X = [[1; 1; 100], [2; 2; 200], [1; 3; 300], [2; 4; 400]; [3; 5; 500]]	
	DIM Y(1, 1)	
	Y = [[1; 10], [2; 20]]	
	? TWODIM EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	'「[[1, 1, 100], [2, 2, 200], [1, 3, 300], [2, 4, 400]]」と表示されます。	
	? TWODIM NOT EXISTS ROW(X, 0, Y, 0)	
	'「[[3,5,500]]」と表示されます。	

3.3.57 TWODIM SORT

関数			
機能	数値の2次元配列の指定した行/列位置に対してソートした結果を得ます。		
書 式	〈(戻り値)結果配列〉= TWODIM SORT〈①方向〉(〈②元配列〉,〈③添え字〉[,〈④オプ		
	ション〉〕)		
戻り値	戻り値 <結果配列> 配列		
	ソートされた、新たな配列変数が得られます。		
	(1) (方向) キーワート・		
メータ	ROW を指定すると、行方向にソートします。		
	COLUMN を指定すると、列方向にソートします。		
	② <元配列> 配列		
	ソートしたい配列変数を指定します。		
	数値型の2次元配列を指定して下さい。		
	③		
	ソート対象とする位置を指定します。(0始まり)		
	方向を ROW 指定時、インデックスで指定した列番号をソート対象とします。		
	方向を COLUMN 指定時、インデックスで指定した行番号をソート対象とします。 数値		
	オプション動作		
	0 昇順にソートします。		
	1 降順にソートします。		
	2 予約値		
	DIM ARY (2, 2)		
	ARY = [1 to 9] ? ARY		
	' AKI ' [[1, 2, 3], [4, 5, 6], [7, 8, 9]] と表示されます		
使用例	? TWODIM SORT ROW(ARY, 1, 1)		
	'[[7, 8, 9], [4, 5, 6], [1, 2, 3]] と表示されます		
	? TWODIM SORT COLUMN(ARY, 1, 1)		
	'[[3,2,1],[6,5,4],[9,8,7]] と表示されます		

3.3.58 TWODIM SORT\$

関数			
機能	文字列の2次元配列の指定した行/列位置に対してソートした結果を得ます。		
書 式	〈(戻り値)結果配列〉= TWODIM SORT\$〈①方向〉(〈②元配列〉,〈③添え字〉[,〈④オ		, 〈④オ
	プション>])		
戻り値	戻り値	<結果配列>	配列
	ソートされた、新たれ	な配列変数が得られます。	
パラ	(Ī)	<方向>	+ n °
メータ		<カロ> テ方向にソートします。	キーワート゛
<i>y. y</i>		、列方向にソートします。	
_	(2)	<u>、 </u>	配列
			1
		列を指定して下さい。	
	3	<インデックス>	数値
	ソート対象とする位置	を指定します。(0始まり)	
		インデックスで指定した列番号をソート対象とします。	
_		官時、インデックスで指定した行番号をソート対象とします。	Net I I
	(4) <オプション> 数値		
	■ ソート万法を指示し ■	ます。省略すると、0が採用されます。	
	オプション	助作	
	0 身	昇順にソートします。	
	1	拳順にソートします。	
	2	予約値	
	4 3	文字列が数値として扱える時、数値として比較します。	
備考		しつつ降順ソートする場合、4 or 1 = 5 を指定します。	
	DIM ARY\$ (2, 2)		
	ARY\$ = $SPLIT$ \$ ("a, b, c	, d, e, f, g, h, i", ",")	
	? ARY\$		
使用例	'[[a, b, c], [d, e, f], [g, h, i]] と表示されます		
	? TWODIM SORT\$ ROW(A	.KYֆ, 1, 1) e, f], [a, b, c]] と表示されます	
	? TWODIM SORT\$ COLUM		
		m(AKT4, 1, 1) e, d], [i, h, g]] と表示されます	
	, ~, ~, ~ _, ,,	-, - 1, L +, 11, 0 11 C X(1.C 1/05)	

3.3.59 TWODIM TRANSPOSE

関数		
機能	2次元の数値配列の行列を入れ替えた配列を得ます。	
書 式	<(戻り値)新配列> = TWODIM TRANSPOSE(<①元配列>)	
戻り値	戻り値 <新配列> 配列	
	元配列に対して、行列を入れ替えた配列を得ます。	
パラ	① <元配列> 配列	
メータ	取得対象となる配列を指定します。	
	2次元の数値配列を指定してください。	
使用例	DIM ARY (2, 2)	
	ARY = [0 to 9]	
	LIST TMP	
	'[[0,1,2],[3,4,5],[6,7,8]]と表示されます	
	TMP = TWODIM TRANSPOSE(ARY)	
	PRINT TMP	
	'[[0,3,6],[1,4,7],[2,5,8]]と表示されます。	

3. 3. 60 TWODIM TRANSPOSE\$

関数		
機能	2次元の文字列配列の行列を入れ替えた配列を得ます。	
書 式	<(戻り値)新配列> = TWODIM TRANSPOSE\$(<①元配列>)	
戻り値	戻り値 <新配列> 配列	
	元配列に対して、行列を入れ替えた配列を得ます。	
パラ	① <元配列> 配列	
メータ	取得対象となる配列を指定します。	
	2次元の文字列配列を指定してください。	
使用例	DIM ARY\$ (2, 2)	
	ARY\$ = SPLIT\$("a, b, c, d, e, f, g, h, i", ",")	
	LIST TMP\$	
	' [[a, b, c], [d, e, f], [g, h, i]] と表示されます	
	TMP\$ = TWODIM TRANSPOSE\$ (ARY\$)	
	PRINT TMP	
	' [[a, d, g], [b, e, h], [c, f, i]] と表示されます。	

3.4 Python連携に関する関数・命令

ここでは、Pythonと連携するためのコマンドおよび関数群を紹介します。

3. 4. 1 PYOBJ CREATE CODE

関数	
機能	Pythonと連携する為のコード文字列を渡して初期化します。
書 式	〈(戻り値) ID値〉= PYOBJ CREATE CODE(〈①Pythonコード文字列〉)
戻り値	戻り値 数値 Pythonのコード文字列を受け取って初期化した結果に対する、 一意のID値が得られます。 このID値は、その他のPython連携の関数およびコマンドで利用します。
パラ メータ	①< Pythonコード文字列>文字列Pythonのコード文字列を与えてください。
備考	 Python連携で利用できるモジュール群は、python3から利用できるモジュールです。 python2のモジュールは使用できません。 ・以下のモジュールは、利用できません。 tkinter
使用例	s\$ = "def hoge(s):" + chr\$(10) s\$ = s\$ +" print(s)" + chr\$(10) s\$ = s\$ +" s = s.upper()" + chr\$(10) s\$ = s\$ +" return s" + chr\$(10) id = PYOBJ CREATE CODE(s\$) print "pyobj create:"; id ? PYOBJ CALL FUNCTION(id, "hoge", "hello") PYOBJ CLOSE id s\$のPythonコード文字列を渡して、PYOBJ CREATE CODE関数で初期化し、後から呼び出せるようにしています。 Pythonコード文字列内に、「hoge」関数を定義して、PYOBJ CALL FUNCTIONから呼び出しています。 内部では、文字列に対する upperメソッドが呼ばれて、"hello"の表示結果は"HELLO"となります。
	内部では、文字列に対する upperメソッドが呼ばれて、"hello"の表示結果は"HELLO"とな

3.4.2 PYOBJ CALL FUNCTION

関数			
機能	Pythonの指定した関数を呼び出します。		
書 式	<(戻り値)結果値> = PYOBJ CALL FUNCTION(<①ID値>, <②関数名>, [<③引数値>,])		
戻り値	値 戻り値 <結果値> Pythonの関数を呼び出した結果値を得ます。 Pythonの戻り値の型とAJANで受け取る型の関係は、以下の通りです。		
	Python の型 AJA	AN の型	
	int型 倍	情度整数型	
	float 型 倍	情度実数型	
	str型 文:	字列型	
		字列型	
		DL 型	
	1	[M や LIST などの)配列	
		TT型	
		字列型	
	L (P)	ython の repr 関数を呼び出したのと類似の結果)	
パラ メータ	① <id値></id値> 数 PYOBJ CREATE CODEで得られたID値を与えてください。		
	② <関数名> 文 PYOBJ CREATE CODEで定義されたコード中の関数名を指定してください。		
	3	<引数値> 値	
	関数に渡す引数値を指定し		
		取る型の関係は、以下の通りです。	
	AJAN の型	Python の型	
	単精度整数型	int 型	
	倍精度整数型	int 型	
	単精度実数型	float 型	
	倍精度実数型	float 型	
	文字列型	str 型	
	B00L 型	bool 型	
	(DIM やLIST などの)配列	list オブジェクト	
	DICT 型	dict オブジェクト	
 備 考	・Ver.1.00より、Pythonが空のlistオブジェクトを返すと、空の配列となります。 空か否かは、LDIM関数で確認ください。		
使用例	PYOBJ CREATE CODE関数の使用例を参照ください。		
V/11/1		22, 22. M. 1. 22. V	

3.4.3 PYOBJ CALL METHOD

関数		
HORE AN	D.J. の性点のよづい	カーファキャナフ・ノ・ハ・ハ かと 15.57 ドロコーナート
		クトに対するメソッドを呼び出します。
書 式	<(戻り値)結果値> = PYO >, [〈④引数値>,]〉	BJ CALL METHOD(<①ID値>, <②オブジェクト名>, <③メソッド名
戻り値	戻り値	<結果値> 値
	Pythonの指定したオブ	ジェクトのメソッドを呼び出した結果値を得ます。 AJANで受け取る型の関係は、以下の通りです。 AJANの型
	1.1100//	(Python の repr 関数を呼び出したのと類似の結果)
	<u> </u>	(4) min (2) payed (4) page (2) and (4)
パラ	(<u>1</u>)	<id値></id値> 数值
メータ	- I	Eで得られたID値を与えてください。
	指定してください。	<オブジェクト名> 文字列 Eで定義されたコード中のオブジェクト名を 文字列 とメソッド名> 文字列 とで定義されたコード中のオブジェクトに対するください。
	(4)	< 引数値 >
	メソッドに渡す引数値	
	単精度整数型	int 型
	倍精度整数型	int 型
	単精度実数型	float 型
	倍精度実数型	float 型
	文字列型	str 型
	BOOL 型	bool 型
	(DIM や LIST などの)配列	刊 list オブジェクト
	DICT 型	dict オブジェクト
	<u> </u>	
	· · · · · ·	が空のlistオブジェクトを返すと、空の配列となります。 で確認ください
備考	空か否かは、LDIM関数	
備考使用例	空か否かは、LDIM関数 s\$ = "s = 'hoge, fuga, te	
		est'" + chr\$(10)

? PYOBJ CALL METHOD(id, "s", "replace", ",", "+")

s\$に、Python文字列を設定して、PYOBJ CREATE CODEで初期化しています。
Python文字列は、内部で「s」変数に"hoge, fuga, test"という文字列を設定します。
PYOBJ CALL METHODは、「s」変数に対して、「replace」メソッドを呼び出して、結果を得ています。

この動きは、Pythonの記述では、おおよそ以下と同じです。

s = 'hoge, fuga, test'
print(s.replace(",", "+"))

3.4.4 PYOBJ CLOSE

命令			
機能	Pythonとの	の連携処理を閉じます。	
書 式	PYOBJ CLO	OSE 〈①ID値〉	
パラ	1)	<id値></id値> 数	値
メータ	PYOBJ	CREATE CODEで得られたID値を与えてください。	
使用例	PYOBJ C	REATE CODE関数の使用例を参照ください。	

3.5 オーディオ入出力を使ったアナログ変換に関する関数・命令

3. 5. 1 SNDOPEN

命令						
機能	オーディオ入出	カをオープンします。				
書式		バイス名および追加パラメータ>" FOR 〈②入出力方向〉AS #〈③オーディオ				
	番号〉	1 / Magas O Jeons / / John John Magas John Manda Magas John Magas John Magas John Magas John Magas John Magas				
パラ	(<u>1</u>)	<デバイス名および追加パラメータ> 文字列				
メータ						
'		タはデバイス名の後に、「?」の後に、「キー1=値1&キー2=値2」				
		で記述します。				
		追加パラメータは省略可能であり、省略時 OSの設定が採用されます。				
	34 L					
	追加パラメー キーワード	タのキーと値の組み合わせを、以下に示します。 値				
		,, <u></u>				
	RATE	サンプリング周波数を、Hz 単位で指定します。 1~192000 の範囲で指定する事が推奨されます。				
		1~192000 の配西で指定する事が推奨されます。 省略時、8000Hz です。				
	FORMAT	入出力時の数値型を指定します。				
	1 OKWIYI	省略時、S16LEです。				
		値 効果				
		U8 内部では、8 ビット単位で入出力します。				
		S16LE 内部では、16 ビット単位で入出力します。				
		得られる範囲は、-32,768~32,767の単精度整数です。				
		S32LE 内部では、32 ビット単位で入出力します。				
		得られる範囲は、-2,147,483,648~2,147,483,647の単精				
		度整数です。				
		FLOAT32LE 内部では、32 ビット単位で入出力します。				
		得られる範囲は、-1.0~1.0 の単精度実数です。				
	TLENGTH	出力バッファ長を指定します。(バイト単位)				
	TEENGIII	省略時、システムが最適な値を決めます。				
	PREBUF	出力開始するサイズ長を指定します。(バイト単位)				
		省略時、システムが最適な値を決めます。(TLENGTH と同じ値が採用される)				
	FRAGSIZE	入力バッファ長を指定します。(バイト単位)				
		省略時、システムが最適な値を決めます。				
	MAXLENGTH	入出力バッファの最大長を指定します。(バイト単位)				
		省略時、システムが最適な値を決めます。				
	MINREQ	出力時の最小要求長を指定します。(バイト単位) 省略時、システムが最適な値を決めます。				
	2	<入出力方向> キーワート゛				
	オーディオ入	力の場合「INPUT」、オーディオ出力の場合「OUTPUT」を指定します。				
	③ オーディオ入	<オーディオ番号> 数値 出力に関連付けるオーディオ番号を、1~15の範囲で指定します。				
備考	・オーディオ入	出力の操作は、内部でPulseAudioシステムが使用されています。				
VIII J		し出力を行いたい場合、入力バッファ(FRAGSIZEなど)や出力バッファ				
		びPREBUFなど)の長さを調整してください。				
		OFFICIONなどの強さを調整して、たさい。 ENGTHなどの値を変更した際、SNDREADLEN関数やSNDWRITELEN関数				
	. LVAGSIVE, II	ENGINA C ツ胆で多丈しに际、SINDREADLEIN				

AJAN 拡張コマンドリファレンス

	の得られる値に影響はしますが、指定した値と同じになるとは限りません。 ・FRAGSIZEやTLENGTHなどで指定する際、バッファに用意したい件数から必要なバイト長を計算するには、件数 × FORMATで必要なバイト長 で求めます。
使用例	SNDOPEN "?FORMAT=FLOAT32LE&RATE=8000" FOR INPUT AS #1 8kHzでオーディオ入力としてオープンします。

3. 5. 2 SNDCLOSE

命令	
機能	オーディオ入出力をクローズします。
書式	SNDCLOSE #<①オーディオ番号>
パラ	① <オーディオ番号> 数値
メータ	SNDOPENでオープンしたオーディオ番号を指定します。
使用例	SNDOPEN "" FOR OUTPUT AS #1
	SNDCLOSE #1

3. 5. 3 SNDREAD

関数					
機能	指定件数をオーディオ入力からアナログ変換し、データ配列を得ます。				
書 式	<(戻り値)データ配列> = SNDREAD(<①オーディオ番号>, <②入力件数>)				
戻り値	戻り値 <データ 配列 > 配列				
	入力件数で指定した分のオーディオ入力データが、1次元の数値配列で得られます。 数値配列内の個々の値は、SNDOPENのFORMATパラメータで指定した値に準じます。				
	数ieitzがjy jv/ieiな、SivDOI Liv/ji olumiy · クラ・ フ Ciii C ひにieiで中しよす。				
パラ	①				
メータ	SNDOPENでオープンしたオーディオ番号を指定します。				
	② < 入力件数> 数值				
	オーディオ入力するデータの件数を指定します。				
	2022/4より、件数に負数を指定すると、入力バッファに有る一塊分のデータを取得でき				
	ます。(取得できる件数は、下位ライブラリが自動調整するので不定です)				
備考	・SNDOPEN の呼び出し後、SNDREAD または SNDREADLEN を呼び出す事で、オーデ				
	ィオ入力が開始されます。				
	・オーディオ入力開始から、入力データは一旦入力バッファに格納されます。				
	SNDREAD で指定した入力件数分のデータが、入力バッファに有れば、データ配列に取得				
	して即戻ります。 入力供料に対して、入力が以ファのデータが不見する場合、指定した入力供料を満たす。				
	入力件数に対して、入力バッファのデータが不足する場合、指定した入力件数を満たすまで、SNDREAD の呼び出しは待機されます。				
	・2022/4より、入力件数を負数で指定したとき、入力バッファに有る一塊のデータを取得				
	します。(取得できる件数は、下位ライブラリが自動調整するので不定です)				
	このため、SNDREAD の呼び出しは待機されずに、データを取得できます。				
使用例	SNDOPEN "?FORMAT=FLOAT32LE" FOR INPUT AS #1				
	LIST ARY				
	ARY = SNDREAD(1, 256) '256件のオーディオ入力します				
	SNDCLOSE #1				

3. 5. 4 SNDREADLEN

関数				
機能	オーディオ入力の入力バッファの件数を取得します。			
書 式	<(戻り値)入力バッファ件数> = SNDREADLEN(<①オーディオ番号>)			
戻り値	戻り値 <入力バッファ件数> 数値			
	オーディオ入力から入力バッファに蓄えられた、入力バッファ件数が得られます。			
パラ	①			
メータ	SNDOPENでオープンしたオーディオ番号を指定します。			
備考	・SNDOPEN の呼び出し後、SNDREAD または SNDREADLEN を呼び出す事で、オーデ			
	ィオ入力が開始されます。			
使用例	SZ = SNDREADLEN(1) '入力バッファ件数を得ます			
	LIST ARY			
	ARY = SNDREAD(1, SZ) '入力バッファ件数分を入力します			

3.5.5 SNDWRITE

命令						
機能	数値配列のデータを、アナログ変換してオーディオ出力します。					
書 式	SNDWRITE #<①オーディオ番号>,〈②データ配列〉					
パラ	① <オーディオ番号>	数値				
メータ	SNDOPENでオープンしたオーディオ番号を指定します。					
	(データ配列)	配列				
	オーディオ出力するデータを、1次元の数値配列で指定します。					
	数値配列の要素数分が、出力される件数に一致します。					
備考	・データ配列に指定する数値型および範囲は、SNDOPENのFORMATパラメータで指定	した型				
	になるよう与えてください。					
	・SNDWRITEの呼び出しで、一旦出力バッファに格納された後、オーディオ出力され	れます。				
	出力バッファが空になると、オーディオ出力は停止します。					
	・データ配列の件数が、出力バッファの件数を下回る時、SNDWRITE の呼び出しで、出	力デー				
	タを出力バッファに格納した後、即戻ります。					
	データ配列の件数が、出力バッファの件数を上回る時、出力データが出力バッファに格					
	納されるまで、SNDWRITEの呼び出しは待機されます。					
使用例	SNDOPEN "?FORMAT=FLOAT32LE" FOR OUTPUT AS #1					
	DIM ARY (255)					
	FOR I=0 TO LDIM(ARY)-1					
	ARY(I) = RND()					
	NEXT I					
	SNDWRITE #1, ARY 'ARY配列(256件)をオーディオ出力します。					
	SNDCLOSE #1					

3.5.6 SNDWRITELEN

関数		
機能	オーディオ出力の出力バッファの書き込み可能件数を取得します。	
書式	<(戻り値)出力バッファ可能件数> = SNDWRITELEN(<①オーディオ番号>)	
戻り値	戻り値 <出力バッファ可能件数>	数値
	オーディオ出力の出力バッファの書き込み可能件数が得られます。	
パラ	① <オーディオ番号>	数値
メータ	SNDOPENでオープンしたオーディオ番号を指定します。	-
使用例	SZ = SNDWRITELEN(1) '出力バッファの書き込み可能件数を得ます	
	LIST ARY	
	REDIM ARY (SZ / 2)	
	SNDWRITE #1, ARY ' 出力バッファの1/2まで、出力データを書き込みます	

3.6 ファイル・フォルダに関する関数・命令

3. 6. 1 CURDIR\$

関数			
機能	現在のカレ	ントディレクトリのパスを取得します。	
書 式	<(戻り値)/	パス名> = CURDIR\$	
戻り値	戻り値	<パス名>	文字列
	現在のカ	カレントディレクトリのパス名を得ます。	
使用例	PRINT CURI	DIR\$	
	「/home/us	ser/AjanProWS/APP」のような、実行時のカレントフォルダ名が得ら	れます。

3.7 プロセスに関する関数・命令

3.7.1 GETCOMMANDLINEARGS\$

関数	
機能	コマンドライン引数を文字列配列形式で得ます。
書 式	<(戻り値)コマンドライン引数配列> = GETCOMMANDLINEARGS\$()
戻り値	戻り値 <コマンドライン 引数配列> 配列
	コマンドライン引数を、文字列配列形式で得ます。
備考	・この関数は、IDE上からでなく、プログラムをコンパイルした結果の、実行プログラム自身を
	外部から呼び出す際の、コマンドライン引数を取得する手段として提供しています。
	・コマンドライン引数の概念については、Linuxに関する書籍を参照ください。
使用例	LIST ARG\$
	ARG\$ = GETCOMMANDLINEARGS\$()
	PRINT ARG\$
	上のコードをコンパイルして、「app1」というプログラム名にしたと仮定します。
	次に、Linuxの端末上(IDEではありません)から、以下のようにプログラムを呼び出した
	と仮定します。
	# app1 hoge fuga
	『 dpp1 logs laga その際に、得られる結果は、"app1"、"hoge"、"fuga"の一次元文字列配列です。
	C v phric、 同 D a v D m A r a c appr 、 noge 、 1 uga v) (人) 人 大 丁 7 i H L 2 i C 9 。

3.7.2 GETSYSTEMINFO\$

関数					
機能	指定した取得IDに対応するシステムに関連する情報を得ます。				
書 式	<(戻り値)情報文字列> = GETSYSTEMINFO\$(〈①取得ID〉)				
戻り値	戻り値	<情報文字列>	文字列		
	取得IDで指定した、シ	ステムに関連する情報を文字列で得ます。			
パラ	①	<取得ID>	文字列		
メータ	取得したい情報を、文	字列で指定します。	-		
	取得 ID	得られる情報			
	"HOSTNAME"	ホスト名を得られます。			
	"USERNAME"	現在実行中のユーザ名を得ます。			
	"USER_DESKTOP_DIR"	現在実行中ユーザの Desktop フォルダのパスを得ます。			
	"USER_DOCUMENTS_DIR"	現在実行中ユーザの Documents フォルダのパスを得ます。			
	"USER_DOWNLOAD_DIR"	現在実行中ユーザの Download フォルダのパスを得ます。			
	"HOME_DIR"	現在実行中ユーザのホームディレクトリを得ます。			
	"CPU_MODEL_NAME"	CPUモデル名を得ます。			
	"CPU_NPROC"	CPUのプロセッサ数を得ます。			
	"CPU_NPROC_AVAIL"	利用可能な CPU のプロセッサ数を得ます。			
	"CPU_FREQ_MHZ"	現在のおおよその周波数を得ます。(MHz 単位)			
使用例	PRINT GETSYSTEMINFO\$("	USERNAME")			
	'ユーザ名を得ます。例えば「user」などが得られます。				
	PRINT GETSYSTEMINFO\$("	HOME_DIR")			
	, ログインしているユー	ザのホームディレクトリのパスを得ます。			
	'例えば、「/home/user	」などが得られます。			

3. 7. 3 ENVIRON\$

HH M//			
関数			
機能	環境変数文字列テーブル内の環境文字列を得ます。		
書 式1	<(戻り値)環境変数値> = ENVIRON\$(<①環境文字列名>)		
戻り値	戻り値 <環境変数値> 文字列		
	<環境文字列名>に対応する、環境変数の値文字列が得られます。		
パラ	②		
メータ	環境変数文字列テーブルから、取得したい環境変数名を指定します。		
書 式2	<(戻り値)環境変数名配列> = ENVIRON\$()		
戻り値	戻り値 ペ環境変数名配列> 配列		
	全環境変数の環境変数名を文字列配列で得られます。		
備考	・この関数は、Linuxの端末上から、実行プログラム自身を呼び出す際に、Linux端末のシェル		
	から引き渡される環境変数と呼ばれる情報を、参照する為に用意しています。		
	・どのような環境変数情報があるか確認するには、Linux端末上から、「env」コマンドを打鍵		
	して呼び出す事で確認できます。		
	・環境変数の概念やシェルについては、Linuxに関する書籍を参照ください。		
使用例	PRINT ENVIRON\$("HOME")		
	/home/user		
	環境変数"HOME"の値が得られます。		

3.8 グローバル共有に関する関数・命令

3.8.1 COMMON OPEN

命令				
機	能	グローバル共有機能をオー	プンします。	
書		COMMON OPEN "<①IPアドレ	スとポート番号>" AS #<②管理番号>	
パ	ラ	① <ipアドレスとポート番号></ipアドレスとポート番号> 文字列		
メー	-タ	グローバル共有にアクセスする為のIPアドレスとポート番号を指定します。		
		指定は、「IPアドレス: ポート番号」の形式で記述します。		
			IPアドレス」の形式でも記述できます。	
		(省略したとき、ボート↑ 	番号は、redisの基本ポート番号 6379 が採用されます)	
			皆す場合、IPアドレスは「127.0.0.1」を指定してください。 す場合は、相手先のIPアドレスを指定してください。	
		〈IPアドレスとポート番 す。	号>を文字列配列で、添字1からオプション設定を指定できま	
		このオプション設定は、	グローバル共有が使用している redis の機能に強く関係し	
		ます。 設定できるオプション記	没定は、以下の通りです。	
		1	Wall	
			<u>挙動</u>	
		3.1,2	redisサーバに対して、使用するデータベースの番号を指定します。何も指定しないと、0 が採用されます。	
			redisサーバがパスワード保護されているとき、認証を受けるためのパスワード文字列を指定できます。	
			備考2を、参照ください。	
			COMMON OPEN時のタイムアウト時間を秒単位で指定します。何も 指定しないと、OSの設定に依存します。	
		1	読み書き時のタイムアウト時間を秒単位で指定します。何も指 定しないと、OSの設定に依存します。	
			1を設定すると、自動再接続機能を有効にします。 何も指定しないと、0が採用され、自動再接続は行いません。	
		2	<管理番号> 数值	
		グローバル共有に関連付	ける管理番号を、1~15の範囲で指定します。	
備	考	・グローバル共有機能は、	プロセス同士で値をやり取りできる機能です。	
			あり、ネットワークをまたぐ事もできます。	
			作は、内部で redis-server サービスが使用されます。	
備考	2 2	• •	ル共有への値の格納方法が変更となりました。	
		この為、2021/6より以前に書き込んだ値を読み取ろうとする場合、「OLD=1」で一旦オープンしてから値を読み取ってください。		
		・古い形式の値を、「OLD=1」を指定せずに読み取ろうとするとエラーとなります。 (例:「古い形式のシリアライズフォーマットのデータを、新しい形式で読み取ろうとし		
		「例: 「古い形式のシリノライスフォーマットのデータを、新しい形式で読み取ろうとし」 ている可能性があります」のようなメッセージ)		
			切断などの事由によりコマンドエラーが発生した後、	
			た時、COMMON OPEN に相当する処理を自動で行います。	
			呼び出し時のパラメータが採用されます。	
		・TIMEOUTパラメータの適用	月対象は、COMMON OPEN 以外のグローバル共有コマンドが対	

AJAN 拡張コマンドリファレンス

	象です。 ・グローバル共有のサーバがTLS暗号化通信を必要とする設定の時、「CACERT_FILENAME」などのオプションを何も設定しないと、オープン自体は成功するかも知れませんが、実際の読み書き時にはエラーとなります。
使用例1	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	自身のコンピュータに対して、グローバル共有をオープンします。
使用例2	LIST NM\$
	NM\$ = ["127. 0. 0. 1"; "SELECT=1"]
	COMMON OPEN NM\$ AS #1
	データベース番号1を指定しつつ、自分のコンピュータに対して、グローバル共有をオープンします。

3.8.2 COMMON CLOSE

命令	
機能	グローバル共有をクローズします。
書 式	COMMON CLOSE #<①管理番号>
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
備考	・ON COMMON CALL による割り込み処理中に COMMON CLOSE を呼び出すと、割り込み 処理は中断されます。 (Ver. 1. 00より前は、割り込み処理が完了するまでブロッキングされていました)
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 CNT = 123 COMMON PRINT #1, CNT CNT = 0 ' 一旦クリア COMMON INPUT #1, CNT PRINT CNT ' グローバル共有に格納された値が表示されます COMMON CLOSE #1

3.8.3 COMMON FREEFILE

関数	
機能	使用可能な、グローバル共有の管理番号を得ます。
書 式	〈(戻り値)管理番号〉= COMMON FREEFILE([〈検索開始番号〉])
戻り値	戻り値 <管理番号> 数値
	COMMON OPENで使用可能な、グローバル共有の管理番号が得られます。
	全て使用中で空きが無い場合、0が得られます。
パラ	① <検索開始番号> 数値
メータ	使用可能なグローバル共有の管理番号を検索開始する番号を指定します。
	1から15までを指定すると、指定した番号から昇順に、使用可能か検索します。
	-1から-15までを指定すると、末尾の番号(15)から逆順に、使用可能か検索します。
	(-1を指定すると15から14, 13,の順に。-15を指定すると 1 を検索します)
	省略すると、-1 を指定したものとしてみなします。
使用例	NUM = COMMON FREEFILE()
	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #NUM
	空いている管理番号を求めて、グローバル共有をオープンします。

3.8.4 COMMON ERASE

命令			
機能	グローバル共有に格納された、変数名で指定した内容を削除します。		
書 式	COMMON ERASE #<①管理番号>,<②変数名>		
パラ	① <管理番号> 数值		
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。		
	② <変数名> 変数名		
	グローバル共有に格納されている変数名を指定します。		
	ここで指定した変数名が、グローバル共有に格納された名前です。		
備考	・グローバル共有に、変数名で指定した名前の情報が無くとも、エラーにはなりません。		
	・変数名を指定するとき、配列の添字や、連想配列のキーを、同時に指定できません。		
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。		
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1		
	CNT = 123		
	COMMON PRINT #1, CNT ' グローバル共有にCNTを格納します		
	COMMON ERASE #1, CNT ' グローバル共有に格納されたCNTを削除します		
	COMMON CLOSE #1		

3.8.5 COMMON INPUT

命令	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された値を読み取ります。
書 式	COMMON INPUT #<①管理番号>, <②変数名>
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有から読み取る名前です。
	指定できる変数は、数値または文字列、構造体。および配列と連想配列のみです。
	連想配列の配列は、指定できません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ
	なりません。
	・変数名で指定した名前の値が、グローバル共有にない場合、エラーとなります。
	・読み取り可否を都度確認したい場合、COMMON INPUTR 関数を使います。
	・配列や連想配列を指定する時、添字を指定すると、指定した添字の値のみ読み取ります。 添字を指定しないと、全体が読み取られます。
	・配列を指定する時、グローバル共有と指定する変数の次元数と要素数が異なる時、グロー
	バル共有の次元数と要素数の情報が優先されます。
	・一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバル共
	有の読み書き対象とするのは、避けてください。
	(参照「読み書きを行う変数名の注意とお願い」)
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	COMMON INPUT #1, CNT
	PRINT CNT
	COMMON CLOSE #1

3.8.6 COMMON INPUTR

関数	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された値を読み取り、成功可否が得られます。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON INPUTR(<①管理番号>, <②変数名>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
	グローバル共有から値が読み取りできたか、結果が得られます。
	0:読み取りできた。
	0以外:読み取りできなかった。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	②
	グローバル共有から入力する変数を指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有から読み取る名前です。
	指定できる変数は、数値または文字列、構造体。および配列と連想配列のみです。
	連想配列の配列は、指定できません。
	足心間がい間がいまたできません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ
	なりません。
	・COMMON INPUT 命令との違いは、読み取り可否が得られる事です。
	・配列や連想配列を指定する時、添字を指定すると、指定した添字の値のみ読み取ります。
	添字を指定しないと、全体が読み取られます。
	・配列を指定する時、グローバル共有と指定する変数の次元数と要素数が異なる時、グローバル共和に関するという。
	バル共有の次元数と要素数の情報が優先されます。 ・一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバル共
	・一又子日が「I」 C、二又子日が「A」がら「Z」を接頭品に持つ复数名を、クローバル共 有の読み書き対象とするのは、避けてください。
	(参照「読み書きを行う変数名の注意とお願い」)
	・戻り値が負数の場合例を以下に示します。
	-1:変数名が見つからなかった
	-2:グローバル共有から情報を正しい情報を取得できなかった
	-3:通信切断などの事由で、グローバル共有にアクセスできなかった
	-4:変数名と異なる型だった
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	PRINT "CNTの読み取り結果="; COMMON INPUTR(1, CNT)
	PRINT CNT
	COMMON CLOSE #1

3.8.7 COMMON READ

関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で値を読み取って変数に格納し、成功可否 が得られます。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON READ(〈①管理番号>,〈②変数名>,〈③入力変数>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値 グローバル共有から値が読み取りできたか、結果が得られます。 0:読み取りできた。 0以外:読み取りできなかった。
パラ メータ	① <管理番号> 数値 COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 文字列 グローバル共有から入力する変数名を指定します。 ここで指定した変数名が、グローバル共有から読み取る名前です。
	② <入力変数> 変数名 グローバル共有から、変数名で指定した名前の値を読み取り、ここで指定した入力変数に格納します。 指定できる変数は、数値または文字列、構造体。および配列と連想配列のみです。 連想配列の配列は、指定できません。
備考	 グローバル共有に格納されている値の型と、入力変数で指定する型は、同じ型でなければなりません。 COMMON INPUTR 関数との違いは、任意の名前の変数名を指定できることです。 配列や連想配列を指定する時、添字を指定すると、指定した添字の値のみ読み取ります。添字を指定しないと、全体が読み取られます。 配列を指定する時、グローバル共有と指定する変数の次元数と要素数が異なる時、グローバル共有の次元数と要素数の情報が優先されます。 変数名に、「_(アンダーバー)」を接頭辞に付ける事はできません。 一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバル共有の読み書き対象とするのは、避けてください。(参照「読み書きを行う変数名の注意とお願い」) 戻り値が負数の場合例を以下に示します。 -1:変数名が見つからなかった -2:グローバル共有から情報を正しい情報を取得できなかった -3:通信切断などの事由で、グローバル共有にアクセスできなかった
使用例	-4:変数名と異なる型だった PRINT "読み取り結果="; COMMON READ(1, "カウンター", CNT)
	'COMMON INPUTR と異なり、任意の変数名を指定して、値を読み取る事ができます。

3.8.8 COMMON PRINT

命令		
機能	変数名で指定した値を、グローバル共有に格納します。	
書式	COMMON PRINT #<①管理番号>,〈②変数名〉	
	Common TRINT IN COLUMN TO THE COLUMN TRINT IN	
パラ	① < 管理番号>	値
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
	② <変数名> 変数	汝名
	グローバル共有に格納する変数を指定します。	
	ここで指定した変数名が、グローバル共有に格納する名前です。	
	指定できる変数は、数値または文字列、構造体。および配列と連想配列のみです	0
	連想配列の配列は、指定できません。	
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、同じ型でなり	けれ
	ばなりません。	
	・配列や連想配列を指定する時、添字を指定すると、指定した添字の値のみ書き換えり	られ
	ます。添字を指定しないと、全体が書き込まれます。	
	・添字を指定せずに、配列や連想配列を指定すると、グローバル共有の情報は一旦消息	去さ
	れて書き込まれます。	
	・一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバ	ル共
	有の読み書き対象とするのは、避けてください。	
	(参照「読み書きを行う変数名の注意とお願い」)	
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1	
	CNT = 123	
	COMMON PRINT #1, CNT	
	COMMON CLOSE #1	

3.8.9 COMMON WRITE

命令	
機能	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有に格納します。
書 式	COMMON WRITE #<①管理番号>,〈②変数名〉,〈③出力変数〉
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 文字列
	グローバル共有に格納する変数名を文字列で指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有に格納する名前です。
	③
	グローバル共有に格納する変数を指定します。
	ここで指定した変数の値が、グローバル共有に格納されます。
	指定できる変数は、数値または文字列、構造体。および配列と連想配列のみです。
	連想配列の配列は、指定できません。
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、出力変数は同じ
	型でなければなりません。
	・COMMON PRINT 命令との違いは、任意の名前の変数名を指定できることです。
	・配列や連想配列を指定する時、添字を指定すると、指定した添字の値のみ書き換えられます。添字を指定しないと、全体が書き込まれます。
	・ 添字を指定せずに、配列や連想配列を指定すると、グローバル共有の情報は一旦消去さ
	れて書き込まれます。
	変数名に、「(アンダーバー)」を接頭辞に付ける事はできません。
	・一文字目が「I」で、二文字目が「A」から「Z」を接頭辞に持つ変数名を、グローバル共
	有の読み書き対象とするのは、避けてください。
	(参照「読み書きを行う変数名の注意とお願い」)
使用例	CNT = 123
	COMMON WRITE #1, "カウンター", CNT
	'COMMON PRINT と異なり、任意の変数名を指定して、値を書き込めます。

3.8.10 COMMON LOCK

〈③有効期限秒〉])		
数値		
数値		
文字列		
Net 11.		
数值		
が読み書きできな		
・ロックの間に、グローバル共有に格納された値を読み書きする対象に対して、同じロットなるなどでは、		
ク名を指定してください。異なるロック名を指定すると、ロックの意味がありません。 ・ロック名に、変数名と同じ名前を指定しないでください。		
ノトアップして格納		

3.8.11 COMMON UNLOCK

関数	
機能	グローバル共有に対して、指定した名前でロックを解除します。
書 式	〈(戻り値)アンロック可否〉= COMMON UNLOCK(〈①管理番号〉,〈②ロック名〉)
戻り値	戻り値 <アンロック可否> 数値
	ロックが解除できたか、結果が得られます。
	2:有効期限を過ぎたが、ロック解除できた。
	1:有効期限内に、ロック解除できた。
	0:ロック解除できなかった。
	-1:ロック名が見つからなかった。(ロック名の指定ミスか有効期限を過ぎたか)
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② 文字列
	ロックを解除したい名前を指定します。
	COMMON LOCK で指定したロック名を指定してください。
備考	・COMMON LOCKとCOMMON UNLOCKを併用する事で、
	グローバル共有に格納された値を、読み書きする間、他のプログラムが読み書きできな
	いように、排他処理を作る事ができます。
	・ロックの間に、グローバル共有に格納された値を読み書きする対象に対して、同じロッ
	ク名を指定してください。異なるロック名を指定すると、ロックの意味がありません。
	・ロック名に、変数名と同じ名前を指定しないでください。
使用例	COMMON LOCK の使用例を参照ください。

3.8.12 COMMON NOTIFY

関数	
機能	グローバル共有を介して、トピック名にメッセージを通知します。
書式	〈(戻り値)受信者数〉= COMMON NOTIFY(〈①管理番号〉,〈②トピック名〉,〈③メッセージ〉)
戻り値	戻り値 <受信者数> 数値
	メッセージを受信しようとする相手の数が得られます。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <トピック名> 文字列
	受信者がメッセージを選択的に受け取る為の、一種のキーワードを文字列で指定しま
	す。
	②
	受信者に向けて送るメッセージを文字列で指定します。
注意	・受信者数は、すなわち ON COMMON CALL で、本コマンドのメッセージを受け取ろう
	としている数です。
	このコマンド発行時に、相手側にメッセージが受け取れているか否かは、通信状態に依
	存するので、確定できません。
使用例	CNT = COMMON NOTIFY(1, "TEST", "Hello AJAN")
	PRINT "メッセージを受信したい人の数="; CNT

3.8.13 ON COMMON CALL

命令	
機能	グローバル共有を介して、指定したトピック名に合致するメッセージを受信するサブルー
	チンを定義します。
書 式	ON COMMON (#<①管理番号>, <②トピック名>) CALL <③サブルーチン名>
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <トピック名> 文字列
	メッセージを選択的に受け取る為の、一種のキーワードを文字列で指定します。
	ここで指定したトピック名が合致するメッセージのみ、受信できます。
	トピック名を指定する時、「*」文字を任意の文字列を意味するワイルドカード文字
	として指定できます。
	② マリブルーチン名> サブルーチン名
	サブルーチン名を指定します。
	サブルーチンは、以下の定義に従います。
	サブルーチンで受け取る、トピック名とメッセージは、COMMON NOTIFY で通知され
	た内容と同じです。
	SUB サブルーチン名(〈管理番号〉,〈トピック名〉,〈メッセージ〉)
	処理内容 - DND GUD
	END SUB
備考	・同じ管理番号で本コマンドを呼び出すと、前回の呼び出しの設定が上書きされます。
	・ON COMMON CALL による割り込み処理中に、別から COMMON NOTIFY が呼ばれた時、
	現在の割り込み処理が完了してから、続けて割り込み処理が呼ばれます。
	・ON COMMON CALL による割り込み処理中に、ON COMMON CALL または COMMON CLOSE を
	呼び出すと、割り込み処理は中断されます。
	(Ver. 1. 00より前は、割り込み処理が完了するまでブロッキングされて、COMMON CLOSE な
	どの呼び出しが待たされ続けていました)
注意	・redis-sentinel デーモンが稼動中の場合(端末から「systemctl status redis-sentinel」
, ,	で「acitve(running)」の時に稼動しています)、デーモンは「_sentinel_:hello」を
	トピック名に定期的にメッセージが発信されます。
	COMMON NOTIFY による割り込みメッセージと混同しないよう、注意ください。
使用例1	ON COMMON(#1, "TEST") CALL CB_TEST
	COMMON ON #1
	SUB CB_TEST (NUM%, TOPIC\$, MSG\$)
	PRINT "メッセージ受信="; TOPIC\$; ","; MSG\$
	END SUB
	2 //mpon// 1 \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \
	' "TEST"というトピック名で指定したメッセージを受け取ると、CB_TEST ルーチンが呼び
法 甲 510	出されます。
使用例2	ON COMMON(#1, "*") CALL CB_TEST
	, 毎田伽Lレけ思わり - ビしわトピッカタでもマッヤージも平け版スト - CD TECTUR - エン
	′使用例1とは異なり、どんなトピック名でもメッセージを受け取ると、CB_TESTルーチン
	が呼び出されます。

3.8.14 COMMON ON / OFF

命令		
機能	COMMONメッセージ受信の許可、禁止を指定します。	
	メッセージ受信の条件、サブルーチンは、ON COMMON CALL で定義します。	
書 式1	COMMON ON #<①管理番号>	
	メッセージ受信を許可します。これ以降、トピック名に合致したメッセージを受信すると、	
	サブルーチンが呼び出されます。	
書 式2	COMMON OFF #<①管理番号>	
	メッセージ受信を禁止します。これ以降、トピック名に合致したメッセージを受信しても、	
	サブルーチンは呼び出されません。	
パラ	① <管理番号> 数值	
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
使用例	ON COMMON CALLの使用例を参照ください。	

3.8.15 COMMON CDIM

関数			
機能	グローバル共有にある、変数名で指定された配列の次元数を返します。		
書 式	<(戻り値)次元数> = COMMON CDIM(〈①管理番号>,〈②配列変数名〉)		
戻り値	戻り値 <次元数>	数値	
	グローバル共有にある、配列の次元数を返します。		
パラ	① <管理番号>	数值	
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。		
	② 〈配列変数名〉	変数名	
	グローバル共有にある、配列の変数名を指定します。		
	配列でない場合、エラーとなります。		
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。		
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。		
使用例	LIST ARY		
	PRINT "次元数="; COMMON CDIM(1, ARY)		

3. 8. 16 COMMON GET_DICT_KEYS\$

グローバル共有にある、変数名で指定された連想配列のキー一覧を文字列配列として得ま
す。
〈(戻り値)キー一覧配列〉= COMMON GET_DICT_KEYS\$(〈①管理番号〉,〈②連想配列変数
名>)
戻り値 < キー一覧配列> 配列
グローバル共有にある、連想配列のキー一覧を、1次元の文字列配列にして返します。
① <管理番号> 数值
COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
②
グローバル共有にある、連想配列の変数名を指定します。
連想配列でない場合、エラーとなります。
・空の連想配列か否かを判定するには、COMMON LDICT 関数で、0(空)か0以外かで判断
してください。
・空の連想配列に対して、COMMON GET_DICT_KEYS\$を呼び出した結果は、保証されません。
・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。
・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。得られる文字列配列は、順序保障されません。
れません。 DICT ARY
LIST KEYS\$
KEYS\$ = COMMON GET_DICT_KEYS\$(1, ARY)
PRINT "連想配列のキー一覧"
FOR I=O TO UBOUND (KEYS\$)
PRINT KEYS\$(I)
NEXT I

3.8.17 COMMON HAS_DICT_KEY

関数		
	ドニー・ハ・サイン・マー 本料ケンドウトン 古中町でいる レー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	トフル
機能	グローバル共有にある、変数名で指定した連想配列に対して、指定したキーが存在	するか
	否かを得ます。	
書 式	〈(戻り値)キーの有無〉= COMMON HAS_DICT_KEY(〈①管理番号〉,〈②連想配列変数名〉, "〈	
	③キー名>")	
戻り値	戻り値 <キーの有無>	真偽値
	グローバル共有にある、連想配列のキー一覧に対して、指定したキー名が存在	すれば
	TRUE、存在しなければFALSEを返します。	
パラ	① <管理番号>	数値
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
	② 〈連想配列変数名〉	変数名
	グローバル共有にある、連想配列の変数名を指定します。	
	連想配列でない場合、エラーとなります。	
	③ 〈キー名〉	文字列
	連想配列に対して探索を行いたいキー名を、文字列形式で与えます。	
備考	・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。	
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。	
使用例	DICT ARY	
	PRINT "連想配列に'TEST'キーはあるか?="; COMMON HAS_DICT_KEY(1, ARY, "TH	EST")

3.8.18 COMMON LDICT

関数			
機能	グローバル共有にある、変数名で指定された連想配列に対して登録されているキーの総数		
	を取得します。		
書 式	〈(戻り値)キーの総数〉= COMMON LDICT(〈①管理番号〉,〈②連想配列変数名〉)		
戻り値	戻り値 <キーの総数> 数値		
	グローバル共有にある、連想配列に対して登録されているキーの総数を取得します。		
パラ	① <管理番号> 数值		
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。		
	② 〈連想配列変数名 〉 変数名		
	グローバル共有にある、連想配列の変数名を指定します。		
	連想配列でない場合、エラーとなります。		
備考	・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。		
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。		
使用例	DICT ARY		
使用例	PRINT "連想配列のキー総数="; COMMON LDICT(1, ARY)		

3.8.19 COMMON LDIM

関数			
機能	グローバル共有にある、変数名の配列の要素数を返します。		
書 式	<(戻り値)配列の要素数> = COMMON LDIM(<①管理番号>, <②配列変数名>[, <③次	(元>])	
戻り値	戻り値 <配列の要素数>	数値	
	グローバル共有にある、配列の要素数を返します。		
パラ	(管理番号>	数値	
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。		
_			
	(配列変数名)	変数名	
	グローバル共有にある、配列の変数名を指定します。		
	配列でない場合、エラーとなります。		
	③ 〈次元〉	数値	
	1から始まる、要素数を返す次元を指定します。		
	指定しない場合、全要素数を返します。		
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。		
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。		
	・存在しない次元を指定するとエラーが返ります。		
	・指定した次元の添字最大値を得たい場合は「COMMON UBOUND」を使用してく	ださい。	
使用例	LIST ARY		
	PRINT "1次元目の要素数="; COMMON LDIM(1, ARY, 1)		

3.8.20 COMMON UBOUND

関数		
機能	グローバル共有にある、変数名で指定された配列の指定した次元の添字最大値	直を得ま
	す。	
書 式	〈(戻り値)添字最大値〉 = COMMON UBOUND(〈①管理番号〉,〈②配列変数名〉[,〈③ガ	(元>])
戻り値	戻り値 <添字最大値>	数値
	グローバル共有にある、配列の指定した次元の添字最大値が返ります。	
パラ	① <管理番号>	数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
	(配列変数名)	変数名
	グローバル共有にある、配列の変数名を指定します。	
	配列でない場合、エラーとなります。	
	③ 〈次元〉	数值
	1から始まる、添字最大値を返す次元を指定します。	•
	省略すると1が指定されたものとします。	
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。	
	・変数名を指定するとき、文字列では指定できません。	
	・配列変数でない、または存在しない次元を指定するとエラーが返ります。	
	・指定した次元の要素数を得たい場合は「COMMON LDIM」を使用してください	0
使用例	LIST ARY	
	PRINT "1次元目の添字最大値="; COMMON UBOUND(1, ARY, 1)	
	PRINT "2次元目の添字最大値="; COMMON UBOUND(1, ARY, 2)	

3. 8. 21 COMMON VARTYPE

関数			
機能	グローバル共有にある、変数名で指定した値の型を調べます。		
書 式	〈(戻り値)型の値〉	= COMMON VARTYPE(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)	
戻り値	戻り値	<型の値> 数値	
	グローバル共有に	こある、値の型情報が、以下の組み合わせ(OR)で得られます。	
	例えば、倍精度等	実数型の配列の場合、&H10(倍精度実数型) OR &H8000000(配列) =	
	&H8000010 が得ら	られます。	
	返値	解説	
	&h01	文字列型	
	&h02	単精度整数型	
	&h04	· 倍精度整数型	
	&h08	単精度実数型	
	&h10		
	&h20	論理型	
	&h40	列挙値型	
	&h80	構造体型	
	&h1000	日付時刻型	
	&h4000000	両端キュー	
	&h8000000	配列	
	&h20000000	連想配列	
	&h40000000	可変長配列	
	┃ ┃ ₺.しグローバル±	共有に、指定した変数名の値が存在しない場合や、情報が取得できな	
		めの値が返ります。	
パラ	1	<管理番号> 数值	
メータ	COMMON OPEN	でオープンした管理番号を指定します。	
	2	◇変数名 〉 変数名	
		こある、値の変数名を指定します。	
備考		とき、配列の添字や、連想配列のキーを、同時に指定できません。	
		とき、文字列では指定できません。	
		合例を以下に示します。	
	-1:変数名が見つ	からなかった :有から情報を正しい情報を取得できなかった	
		·有から情報を止しい情報を取得できなかった `の事由で、グローバル共有にアクセスできなかった	
	1	の事由で、クローバル共有にナクセスできなからた の の両端キューは、COMMON DEQUE PUSH などの両端キューに値	
	を追加した際に有		
使用例	RET = COMMON VART		
D 4/ 14 D 4	IF RET < 0 THEN		
	PRINT "グローバ	ル共有に、ARYの値は存在しません"	
	ELSE		
	PRINT "グローバ	ル共有の、ARYの型情報="; ARY	
	END IF		

3.8.22 COMMON DEQUE PUSH

命令		
	本料なる化ウトをはた、ガローバルサケの正型とし、の土民に泊加します	
機能	変数名で指定した値を、グローバル共有の両端キューの末尾に追加します。	
書式	COMMON DEQUE PUSH #<①管理番号>,<②変数名>	
パラ	① <管理番号> 数値	
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
	② <変数名> 変数名	
	グローバル共有の両端キューの末尾に追加する変数を指定します。	
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。	
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。	
	配列、連想配列などは、指定できません。	
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、同じ型でなけれ	
	ばなりません。	
	・例えば、COMMON PRINT 命令で、同じ名前の変数名で値を設定済みの時、両端キュー	
	は追加できません。COMMON ERASE 命令で、一旦削除してください。	
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1	
	LV = 123	
	COMMON DEQUE PUSH #1, LV	
	COMMON CLOSE #1	

3. 8. 23 COMMON DEQUE LPUSH

命令	
機能	変数名で指定した値を、グローバル共有の両端キューの先頭に追加します。
書 式	COMMON DEQUE LPUSH #<①管理番号>, <②変数名>
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	②
	グローバル共有の両端キューの先頭に追加する変数を指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。 配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、同じ型でなけれ
	ばなりません。
	・例えば、COMMON PRINT 命令で、同じ名前の変数名で値を設定済みの時、両端キュー
	は追加できません。COMMON ERASE 命令で、一旦削除してください。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	LV = 123
	COMMON DEQUE LPUSH #1, LV
	COMMON CLOSE #1

3.8.24 COMMON DEQUE POP

関数	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの末尾より値を取り出します。
書式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON DEQUE POP(<①管理番号>, <②変数名>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
パラ メータ	①<管理番号>数値COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> グローバル共有の両端キューの末尾から取り出す変数を指定します。 ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。 指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。 配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ なりません。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON DEQUE POP(1, LV) PRINT LV COMMON CLOSE #1

3.8.25 COMMON DEQUE LPOP

関数	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの先頭より値を取り出します。
書 式	〈(戻り値)読み取り結果〉= COMMON DEQUE LPOP(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
	グローバル共有から値が読み取りできたか、結果が得られます。
	1:読み取りできた。
	0:両端キューが空だったので読み取れなかった。
=	Aft 700 75. D
パラ	(************************************
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 変数名
	プローバル共有の両端キューの先頭から取り出す変数を指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。
	配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ
	なりません。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON DEQUE LPOP(1, LV)
	PRINT LV
	COMMON CLOSE #1

3.8.26 COMMON DEQUE BACK

関数	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの末尾より値を参照します。
書 式	〈(戻り値)読み取り結果〉= COMMON DEQUE BACK(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
パラ メータ	① <管理番号> 数値 COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 変数名 グローバル共有の両端キューの末尾から取り出す変数を指定します。 ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。 指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。 配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ なりません。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON DEQUE BACK(1, LV) PRINT LV
	COMMON CLOSE #1

3.8.27 COMMON DEQUE FRONT

関数	
機能	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの先頭より値を参照します。
書 式	〈(戻り値)読み取り結果〉= COMMON DEQUE FRONT(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
	グローバル共有から値が読み取りできたか、結果が得られます。
	1:読み取りできた。
	0:両端キューが空だったので読み取れなかった。
=	Aft TEL TE
パラ	① < 管理番号> 数値
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 変数名
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。
	配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ
	なりません。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1
	PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON DEQUE FRONT(1, LV)
	PRINT LV
	COMMON CLOSE #1

3.8.28 COMMON DEQUE LEN

日日本仁		\neg
関数		
機能	グローバル共有から、変数名で指定された両端キューの個数を得ます。	
書式	<(戻り値)両端キューの個数> = COMMON DEQUE LEN(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)	
戻り値	戻り値 <両端キューの個数> 数値	ĺ
	グローバル共有の両端キューの個数を得ます。	
パラ		Î
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。	
	② <変数名> 変数名>	名
	グローバル共有にある、両端キューの変数名を指定します。	
	両端キューでない場合、エラーとなります。	
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、変数名で指定する型は、同じ型でなければ	ば
	なりません。	
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1	
	PRINT "両端キューLVの個数="; COMMON DEQUE LEN(1, LV)	
	COMMON CLOSE #1	

3.8.29 COMMON VLIST\$

関数	
機能	グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得ます。
書 式	<(戻り値)変数名の配列> = COMMON VLIST\$(〈①管理番号〉)
戻り値	戻り値 <変数名の配列>
	グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得られます。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
使用例	'AJANの変数名を使った書き込み
	CNT% = 123
	COMMON PRINT #1, CNT%
	LC& = 456
	COMMON PRINT #1, LC&
	'任意の名前を使った書き込み
	S\$ = "hello"
	COMMON PRINT #1, S\$
	COMMON WRITE #1, "TEST", "AJAN"
	PRINT COMMON VLIST\$(1)
	'グローバル共有の変数名のリストが配列で得られます。
	'[TEST\$, LC&, S\$, CNT%] のような結果が得られます。

3.8.30 COMMON SWAPDB

命令	
機能	グローバル共有に対して、指定したデータベースの番号を入れ替えます。
書 式	COMMON SWAPDB #<①管理番号>,〈②DB番号1>,〈②DB番号2>
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	① <db番号1>, <db番号2></db番号2></db番号1> 数值
	交換したいデータベースの番号を指定します。
備考	・データベースの番号を入れ替えると、データベースを参照していたアプリは、入れ替え
	られた番号のデータベースを参照する事になります。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	'inta という名前のユーザを追加
	COMMON ADDUSER #1, "inta", "paso"
	'追加したユーザの情報を記録します
	COMMON SAVEACL #1

3.8.31 COMMON2 ERASE

命令	
機能	グローバル共有に格納された、文字列で指定した変数名の内容を削除します。
書 式	COMMON2 ERASE #<①管理番号>,〈②変数名〉
パラ	① <管理番号> 数値
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 文字列
	グローバル共有に格納されている変数名を、文字列で指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有に格納された値の名前です。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
備考	・グローバル共有に、変数名で指定した名前の情報が無くとも、エラーにはなりません。
	・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
20,1020	COMMON2 PRINT #1, "CNT", 123 ' グローバル共有にCNT名で値を格納します
	COMMON2 ERASE #1, "CNT" ' グローバル共有に格納されたCNTを削除します
	COMMON CLOSE #1
	COMMON CLOSE #1

3.8.32 COMMON2 CDIM

関数		
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の次元数を返します。	
書式	<(戻り値)次元数> = COMMON2 CDIM(<①管理番号>, <②配列変数名>)	
戻り値	戻り値 <次元数>	数値
	グローバル共有にある、配列の次元数を返します。	
パラ	○ (管理番号)	数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。	
	(配列変数名)	文字列
	グローバル共有にある、配列の変数名を、文字列で指定します。	
	指定した変数名の内容が、配列でない場合、エラーとなります。	
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字	が必須
	です。	
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。	
	・2021/3から、配列変数名は大文字扱いとします。	
使用例	PRINT "次元数="; COMMON2 CDIM(1, "ARY")	
	'グローバル共有に「ARY」という配列変数があり、その変数の次元数を得ます	0

3.8.33 COMMON2 GET_DICT_KEYS\$

関数	
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列のキー一覧を文字列配
	列として得ます。
書 式	<(戻り値)キー一覧配列〉= COMMON2 GET_DICT_KEYS\$(<①管理番号>,<②連想配列変数
	名>)
戻り値	戻り値 <キー一 覧配列 > 配列
	グローバル共有にある、連想配列のキー一覧を、1次元の文字列配列にして返します。
パラ	① <管理番号> 数値
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	②
	グローバル共有にある、連想配列の変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、連想配列でない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
注意	・空の連想配列か否かを判定するには、「COMMON LDICT」で、0(空)か0以外かで判断
	してください。
	・空の連想配列に対して、COMMON2 GET_DICT_KEYS\$ を呼び出した結果は、保証されません。
備考	・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。
	・得られる文字列配列は、順序保障されません。2021/3から、連想配列変数名は大文字扱いと
	します。
	LIST KEYS\$
	KEYS\$ = COMMON2 GET_DICT_KEYS\$(1, "ARY")
	PRINT "連想配列のキー一覧"
使用例	FOR I=0 TO UBOUND (KEYS\$)
	PRINT KEYS\$(I)
	NEXT I
	'グローバル共有に「ARY」という連想配列があり、その変数のキー一覧を文字列配列
	として得ます。

3. 8. 34 COMMON2 HAS_DICT_KEY

関数	
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列に対して、指定したキー
	が存在するか否かを得ます。
書 式	〈(戻り値)キーの有無〉= COMMON2 HAS_DICT_KEY (〈①管理番号〉,〈②連想配列変数名〉,
	"〈③キー名〉")
戻り値	戻り値 <キーの有無> 真偽値
	グローバル共有にある、連想配列のキー一覧に対して、指定したキー名が存在すれば
	TRUE、存在しなければFALSEを返します。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② 〈連想配列変数名 〉 文字列
	グローバル共有にある、連想配列の変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、連想配列でない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
	③ 〈キー名〉 文字列
	連想配列に対して探索を行いたいキー名を、文字列形式で与えます。
備考	・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。
	・2021/3から、連想配列変数名は大文字扱いとします。
	PRINT "連想配列に' TEST' キーはあるか?="; COMMON2 HAS_DICT_KEY(1, "ARY", "TEST")
使用例	'グローバル共有に「ARY」という連想配列があり、その変数に対して、「TEST」とい
	うキーが有るか否か判定します。

3.8.35 COMMON2 LDICT

日日本仁	
関数	
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の連想配列に対して、登録されて
	いるキーの総数を取得します。
書 式	〈(戻り値)キーの総数〉= COMMON2 LDICT(〈①管理番号〉, 〈②連想配列変数名〉)
戻り値	戻り値 <キーの 総数 > 数値
	グローバル共有にある、連想配列に対して登録されているキーの総数を取得します。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② 〈連想配列変数名〉 文字列
	グローバル共有にある、連想配列の変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、連想配列でない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
備考	・変数名を指定するとき、連想配列のキーを、同時に指定できません。
	・2021/3から、連想配列変数名は大文字扱いとします。
th m to	PRINT "連想配列のキー総数="; COMMON2 LDICT(1, "ARY")
使用例	'グローバル共有に「ARY」という連想配列があり、その変数のキー数を得ます。

3.8.36 COMMON2 LDIM

関数	
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の要素数を返します。
書 式	〈(戻り値)配列の要素数〉= COMMON2 LDIM(〈①管理番号〉,〈②配列変数名〉[,〈③次元〉])
戻り値	戻り値 <配列の要素数> 数値
	グローバル共有にある、配列の要素数を返します。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② 〈配列変数名〉 文字列
	グローバル共有にある、配列の変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、配列でない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
	③ 〈次元〉 数值
	1から始まる、要素数を返す次元を指定します。
	指定しない場合、全要素数を返します。
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。
, i	・存在しない次元を指定するとエラーが返ります。
	・指定した次元の添字最大値を得たい場合は「COMMON UBOUND」を使用してください。
	・2021/3から、配列変数名は大文字扱いとします。
使用例	PRINT "1次元目の要素数="; COMMON2 LDIM(1, "ARY", 1)
	, グローバル共有に「ARY」という配列変数があり、その変数の1次元目の要素数を得ま
	す。

3.8.37 COMMON2 UBOUND

関数	
機能	グローバル共有にある、文字列で指定した変数名の、中の配列の指定した次元の添字最
	大値を得ます。
書 式	<(戻り値)添字最大値> = COMMON2 UBOUND(<①管理番号>, <②配列変数名> [, <③次元
	>])
戻り値	戻り値 <添字最大値> 数値
	グローバル共有にある、配列の指定した次元の添字最大値が返ります。
パラ	(1)
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② 《配列変数名 》 文字列
	グローバル共有にある、配列の変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、配列でない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
	③ 数值 数值
	1から始まる、添字最大値を返す次元を指定します。
مل ملله	省略すると1が指定されたものとします。
備考	・変数名を指定するとき、配列の添字を、同時に指定できません。
	・配列変数でない、または存在しない次元を指定するとエラーが返ります。
	・指定した次元の要素数を得たい場合は「COMMON LDIM」を使用してください。
井田屋	・2021/3から、配列変数名は大文字扱いとします。
使用例	PRINT "1次元目の添字最大値="; COMMON2 UBOUND(1, "ARY", 1)
	PRINT "2次元目の添字最大値="; COMMON2 UBOUND(1, "ARY", 2)
	'グローバル共有に「ARY」という配列変数があり、その変数の1次元目および2次元目 の活字是十値な得ます
	の添字最大値を得ます。

3. 8. 38 COMMON2 VARTYPE

関数		
機能	グローバル共有にる	ある、文字列で指定した変数名の、中の値の型を調べます。
書 式	〈(戻り値)型の値〉	= COMMON VARTYPE(〈①管理番号〉,〈②変数名〉)
戻り値	戻り値	<型の値> 数値
	グローバル共有し	こある、値の型情報が、以下の組み合わせ(OR)で得られます。
		実数型の配列の場合、&H10(倍精度実数型) OR &H8000000(配列) =
	&H8000010 が得り	
	返値	解説
	&h01	文字列型
	&h02	単精度整数型
	&h04	倍精度整数型
	&h08	単精度実数型
	&h10	倍精度実数型
	&h20	論理型
	&h40	列挙値型
	&h80	構造体型
	&h1000	日付時刻型
	&h4000000	両端キュー
	&h8000000	配列
	&h20000000	連想配列
	&h40000000	可変長配列
	もしグローバル	共有に、指定した変数名の値が存在しない場合、負数の値が返ります。
パラ	1	<管理番号> 数值
メータ	COMMON OP	EN」でオープンした管理番号を指定します。
	2	〈 変数名 〉 変数名 変数名
		こある、値の変数名を、文字列で指定します。
		で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
/ -11: -1-/-	です。	
備考		らとき、配列の添字や、連想配列のキーを、同時に指定できません。
		対名は大文字扱いとします。 00 の両端キューは、COMMON DEQUE PUSH などの両端キューに値
	を追加した際に有	
 使用例	RET = COMMON2 VAR	
C/11/71	IF RET < 0 THEN	(1111111, 11111)
		バル共有に、ARYの値は存在しません"
	ELSE	2 - 14 - 1 - 1000 - 1000 - 14 have 5 - 0 - 0 - 15
		ジル共有の、ARYの型情報="; ARY
	END IF	
	, グローバル共有に	こ、「ARY」という値があるか否かを調べます。

3.8.39 COMMON2 DEQUE PUSH

命令	
機能	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有の両端キューの末尾に追加します。
書 式	COMMON2 DEQUE PUSH #<①管理番号>,〈②変数名>,〈③出力変数>
パラ	① 〈管理番号〉 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 文字列 グローバル共有の両端キューの末尾に追加する変数名を、文字列で指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須です。
	③ <出力変数> 変数名 グローバル共有の両端キューの末尾に追加する変数を指定します。 ここで指定した変数の値が、グローバル共有の両端キューに追加格納されます。
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。 配列、連想配列などは、指定できません。
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、同じ型でなければなります。
	ばなりません。 ・例えば、「COMMON WRITE」で、同じ名前の変数名で値を設定済みの時、両端キューは追加できません。「COMMON ERASE」で、一旦削除してください。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	COMMON2 DEQUE PUSH #1, "LV", 123 COMMON CLOSE #1
	'グローバル共有の、「LV」という両端キューに対して、123の値を末尾追加します。

3. 8. 40 COMMON2 DEQUE LPUSH

命令	
機能	文字列で指定した変数名と指定した値を、グローバル共有の両端キューの先頭に追加します。
書 式	COMMON2 DEQUE LPUSH #<①管理番号>,〈②変数名〉,〈③出力変数〉
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	②
	グローバル共有の両端キューの先頭に追加する変数名を、文字列で指定します。
	ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
	③ <出力 変数> 変数名
	グローバル共有の両端キューの先頭に追加する変数を指定します。
	ここで指定した変数の値が、グローバル共有の両端キューに追加格納されます。
	指定できる変数は、単一の数値または文字列、構造体のみです。 配列、連想配列などは、指定できません。
	記が、産心能がなどは、1日だくさよどが。
備考	・変数名で指定した名前が、既にグローバル共有に格納されているとき、同じ型でなけれ
	ばなりません。
	・例えば、「COMMON WRITE」で、同じ名前の変数名で値を設定済みの時、両端キュー
	は追加できません。「COMMON ERASE」で、一旦削除してください。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	- 2021/371-5、 変数石は人文子扱いとしまり。 COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1
וא נות בעו	COMMON2 DEQUE LPUSH #1, "LV", 123
	COMMON CLOSE #1
	'グローバル共有の「1v」という両端キューに対して、123の値を先頭追加します。

3.8.41 COMMON2 DEQUE POP

関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で両端キューの末尾より値を取り出します。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON2 DEQUE POP(<①管理番号>, <②変数名>, <③入力変数>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値 グローバル共有から値が読み取りできたか、結果が得られます。 1:読み取りできた。 0:両端キューが空だったので読み取れなかった。
パラ メータ	① < 管理番号> 数値 「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	マ変数名> 文字列 グローバル共有の両端キューの末尾から取り出す変数名を、文字列で指定します。ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。 変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須です。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、入力変数で指定する型は、同じ型でなければなりません。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON2 DEQUE POP(1, "LV", V) PRINT V COMMON CLOSE #1 ' グローバル共有に「LV」という両端キューがあり、末尾のキュー値をV変数に取り出します。

3.8.42 COMMON2 DEQUE LPOP

関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で両端キューの先頭より値を取り出します。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON2 DEQUE LPOP(<①管理番号>, <②変数名>, <③入力変数>)
戻り値	戻り値
パラ メータ	① <管理番号> 数値 「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	②
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、入力変数で指定する型は、同じ型でなければなりません。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON2 DEQUE LPOP(1, "LV", V) PRINT V COMMON CLOSE #1 ' グローバル共有に「LV」という両端キューがあり、先頭のキュー値をV変数に取り出します。

3.8.43 COMMON2 DEQUE BACK

関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定された変数名で両端キューの末尾より値を参照します。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON2 DEQUE BACK(〈①管理番号>,〈②変数名>,〈③入力変数>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
パラ メータ	① <管理番号> 数値 COMMON OPENでオープンした管理番号を指定します。
	文字列 文字列 文字列 グローバル共有の両端キューの先頭から取り出す変数名を、文字列で指定します。ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。 変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須です。
	②
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、入力変数名で指定する型は、同じ型でなければなりません。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON DEQUE BACK(1, "LV", V) PRINT V COMMON CLOSE #1

3. 8. 44 COMMON2 DEQUE FRONT

関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定された変数名で両端キューの先頭より値を参照します。
書 式	<(戻り値)読み取り結果> = COMMON2 DEQUE FRONT(〈①管理番号>,〈②変数名>,〈③入力変数>)
戻り値	戻り値 <読み取り結果> 数値
パラ メータ	① < 管理番号> 数値
	文字列 文字列 文字列 グローバル共有の両端キューの先頭から取り出す変数名を、文字列で指定します。ここで指定した変数名が、グローバル共有の両端キューの名前です。 変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須です。
	②
備考	・グローバル共有に格納されている値の型と、入力変数名で指定する型は、同じ型でなければなりません。 ・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127.0.0.1" AS #1 PRINT "LVの読み取り結果="; COMMON2 DEQUE FRONT(1, "LV", V) PRINT V COMMON CLOSE #1

3. 8. 45 COMMON2 DEQUE LEN

HH MA	
関数	
機能	グローバル共有から、文字列で指定した変数名で両端キューの個数を得ます。
書 式	<(戻り値)両端キューの個数> = COMMON2 DEQUE LEN(<①管理番号>, <②変数名>)
戻り値	戻り値 <両端キューの個数> 数値
	グローバル共有の両端キューの個数を得ます。
パラ	① <管理番号> 数值
メータ	「COMMON OPEN」でオープンした管理番号を指定します。
	② <変数名> 変数名
	グローバル共有にある両端キューの変数名を、文字列で指定します。
	指定した変数名の内容が、両端キューでない場合、エラーとなります。
	変数名は、英字で始まる英数文字を含む1文字以上の文字列で、英字は大文字が必須
	です。
備考	・グローバル共有に格納されている値の型が、両端キューでなければなりません。
	・2021/3から、変数名は大文字扱いとします。
使用例	COMMON OPEN "127. 0. 0. 1" AS #1
	PRINT "両端キューLVの個数="; COMMON2 DEQUE LEN(1, "LV")
	COMMON CLOSE #1
	,グローバル共有に、「LV」という両端キューがあり、その両端キューの個数を得ます。

3.8.46 COMMON2 VLIST\$

関数	
機能	グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得ます。
書 式	〈(戻り値)変数名の配列〉= COMMON2 VLIST\$(〈①管理番号〉)
戻り値	戻り値 <変数名の配列> 文字列
	グローバル共有の変数名のリストを、文字列配列で得られます。
パラ	① <管理番号> 数値
メータ	「COMMON OPEN」 でオープンした管理番号を指定します。
備考	・「COMMON VLIST\$」と異なり、AJANの変数の型ポストフィクスは、戻り値の変数名に含ま
	れません。
使用例	'AJANの変数名を使った書き込み
	CNT% = 123
	COMMON PRINT #1, CNT%
	LC& = 456
	COMMON PRINT #1, LC&
	S\$ = "hello"
	COMMON PRINT #1, S\$
	'任意の名前を使った書き込み
	COMMON WRITE #1, "TEST", "AJAN"
	PRINT COMMON2 VLIST\$(1)
	'グローバル共有の変数名のリストが配列で得られます。
	'[TEST, LC, S, CNT] のような結果が得られます。

3.9 その他に関する関数・命令

3. 9. 1 QRCODE_GET

関数	
機能QRコード作成に必要な情報を得ます。	
書 式 〈(戻り値)QRコード情報〉= QRCODE_GET(〈①文字列〉[,〈②オプション	>>])
戻り値 戻り値 <qr< b="">コード情報></qr<>	配列
文字列からQRコード作成に必要な情報を、数値の2次元配列形式で得ら	
行(1次元目)×列(2次元目)の配列形式で、値は1ないしは0が得られま	· =
1がQRコードの黒点、0が白部分に相当します。	, 0
パラ ① <文字列>	文字列
メータ QRコードを得るための文字列を指定します。	
② <オプション>	配列
QRコード情報を得る際のオプションを、文字列の配列で指定できま	
オプション挙動	
ECL=<値> QR コードの誤り訂正機能のレベルを指定でき	ます。
	5 / 0
(省略時、レベルLが選択されます)	
"M" <= レベル M(訂正能力 約 15%)	
"Q" <= レベル Q(訂正能力 約 25%)	
"H" <= レベル H(訂正能力 約 30%)	
VER=<値> QR コードのバージョンを指定できます。	
バージョン $1(21x21 $	(177x177
セル)まで指定できます。	(111111
(省略時、文字列から自動推定されます)	
MICRO マイクロ QR コードを指定できます。	
(省略時、通常のQRコードが採用されます)	
UPPER 文字列中の小文字を大文字にします。	
(省略時、大文字・小文字使用可能です)	
(End 4) your The Cyy	
備考 ・QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。	
・本コマンドは、libgrencodeライブラリを使用しています。	
このため、QRコードのモデル2に対応し、連結機能はサポートしていません	ん。
・QRコードについての知識は、書籍およびQRコードドットコム(https://ww	w.qrcode.com) な
どを参照ください。	
使用例 LIST ARY	
ARY = QRCODE_GET("Hello AJAN")	
MARGIN = 4 'マージン	
SZ = 6 '1点のドットサイズ	
FOR Y=0 TO UBOUND (ARY, 1)	
FOR X=0 TO UBOUND (ARY, 2)	
IF ARY (Y, X) THEN	
PX = (MARGIN + X) * SZ	
PY = (MARGIN + Y) * SZ	
GUGRECTANGLE PIC 10, (PX, PY)-(SZ, SZ), 1, 1	
NEXT X	
NEXT Y	

AJAN 拡張コマンドリファレンス

'QRCODE_GET で得たQRコード情報から、GUIコマンドを使って描画するコード断片の例です。

3.10 拡張コマンドのサブルーチン集

ここで紹介しているサブルーチンは、AJANコマンドを組み合わせて作ったサブルーチンです。

サブルーチンは、以下の場所に配置されています。

/usr/share/interface/AJANPro/include/EXT001.AJN

ここで紹介した命令および関数群は、このサブルーチン(EXT001. AJN)で定義&実装したルーチン群と説明です。

紹介したサブルーチンを使用する際は、プログラムの先頭で、INCLUDE命令で読み込んでから利用ください。以下のように。(赤字部分)

INCLUDE "EXTOO1. AJN"

3. 10. 1 GET_OCR\$

関数	
機能	画像ファイルに対して、tesseract コマンドを用いて OCR解析によりテキスト情報を取得し
	ます。
書 式	<(戻り値)解析テキスト> = GET_OCR\$(<①画像ファイルパス>, <②オプション>)
戻り値	戻り値 <解析テキスト > 文字列
	画像ファイルを tesseract コマンドに渡して、OCR解析を行った結果のテキスト情報を得ます。
パラ	① < 画像ファイルパス> 文字列
メータ	解析対象となる画像ファイルのパスを指定します。
	②
	サブルーチンが呼び出す、tesseract コマンドに渡す追加オプションを指定できます。
	空文字列を渡すと、"-ljpn+eng" が採用されます。
備考	・この関数を呼び出すには、「INCLUDE "EXTOO1.AJN"」 で、定義を呼び出してから利用くださ
	V_{\circ}
	・本サブルーチンの内部では、tesseract コマンドを呼び出しています。
	tesseract コマンドを利用する為に、tesseract-ocr パッケージを導入する必要があります。
	・tesseract コマンドが認識できる画像ファイルは、JPEG, PNG, GIF形式などです。
使用例	S\$ = GET_OCR\$("/tmp/1.png", "")
	,画像ファイル(/tmp/1.png) をOCR解析してテキスト情報を得ようとします。

第4章 サンプルプログラム

サンプルプログラムは「/usr/share/interface/AJANPro/samples/EXT/EXT/」に格納されています。 AJAN統合開発環境を起動すると、左ペインのエクスプローラウィンドウ内の「Samples/EXT/EXT/」に、ファイルが取り込まれて配置されます。

4.1 サンプルプログラム

#	ファイル名	内容
	COMMON_INPUT_PRINT.AJN	グローバル共有機能を用いて、プロセス間で、値のやり取りと、メッセージの通知と受信を行うサンプルプログラムです。
1		COMMON OPEN でオープンし、COMMON CLOSE でクローズします。 COMMON INPUTR で読み取り、COMMON PRINT で書き込み、
		COMMON LOCK / UNLOCK でロック処理、COMMON NOTIFY でメッセージ通知と、ON COMMON CALL でメッセージ受信です。
2	CONVBIN_CONVPHY. AJN	CONVBIN 関数で連続量の値をバイナリ値へ、CONVPHY 関数で バイナリ値を連続量の値へ変換するサンプルプログラムで す。
3	DIM_CALC. AJN	配列に対して、平均値(DIMAVG 関数)、中央値(DIMMEDIAN 関数)、最大値(DIMMAX 関数)、最小値(DIMMIN 関数)、合計値(DIMSUM 関数)、標準偏差値(DIMSTDEVP 関数)、分散値(DIMVARP 関数)を求めます。
4	DIM_CAST. AJN	文字列配列に対して、数値を取り出し(DIMCINT / DIMCLNG / DIMCSNG / DIMCDBL 関数)、文字列配列に変換(DIMCSTR*関数)します。
5	DIM_CAST_USE. AJN	CSV 文字列を2次元配列に変換(CSV2ARRAY\$関数) した後、任意の場所の値を取り出したり(DIMCINT 関数)、計算したり(DIMSUM 関数)、文字列配列に戻したり(DIMCSTR\$関数)する応用例です。
6	DIMADD_SUB_DIV_MOD_MUL. AJN	配列の算術演算(DIMADD / DIMSUB / DIMDIV / DIMMOD / DIMMUL 関数) を行います。
7	DIMAND_OR_XOR_IMP_EQV_NOT. AJN	配列の論理演算(DIMAND / DIMOR / DIMXOR / DIMIMP / DIMEQV / DIMNOT 関数) を行います。
8	DIMEQ_NE_LT_GT_LTE_GTE. AJN	配列の関係比較演算(DIMEQ / DIMNE / DIMLT / DIMGT / DIMLTE / DIMGTE 関数) を行います。
9	DIMIIF. AJN	配列に対して、条件判定を使った配列の抽出(DIMIIF / DIMIIF\$関数)を行います。
10	HOUR_MINUTE_SECOND. AJN	今日の時刻から時(HOUR 関数) / 分(MINUTE 関数) / 秒 (SECOND 関数) の値を、それぞれ抽出します。
11	JOIN. AJN	文字列をカンマ(,)で分割(SPLIT\$関数)した後、再び結合 (JOIN\$関数)します。
12	JSON. AJN	JSON_PARSE@関数 で JSON 型オブジェクトを作り、 JSON_DUMP\$関数で文字列に戻す事例です。
13	LCASE_UCASE. AJN	文字列中の大文字を小文字に変換(LCASE\$関数)したり、小 文字を大文字に変換(UCASE\$関数)します。
14	LEFT_MID_RIGHT. AJN	文字列に対して、左(LEFT*関数)から抜き出し、右(RIGHT*関数)から抜き出し、中(MID*関数)から抜き出します。 また、バイト単位で、左(LEFTB*関数)から抜き出し、右 (RIGHTB*関数)から抜き出し、中(MIDB*関数)から抜き出す

AJAN 拡張コマンドリファレンス

#	ファイル名	内容
		事例も紹介します。
15	OCR. AJN	画面キャプチャ ボタンを押すと、gnome-screenshot を呼び
		出して、画面全体の スクリーンショットを撮ります。
		OCR 処理 ボタンを押すと、スクリーンショット画面の画像
		データを元に、 GET_OCR\$ 関数(中は、tesseract (OCR ソフ
		ト))を呼び出して、解析した文字列を表示します。
	PYOBJ. AJN	Python 連携機能を使って Python で作ったコードを読み取
16		り(PYOBJ CREATE CODE 関数)、関数(PYOBJ CALL FUNCTION
10		関数)やメソッド(PYOBJ CALL METHOD 関数)を呼び出した後
		に閉じます。(PYOBJ CLOSE 命令)
	PYOBJ_SCATTER_GUI. AJN	Python 連携機能を使って Python の matplotlib ライブラリ
17		を呼び出して、散布図をGUI に描画します。
		この散布図描画処理は、スケールを変更することで、描画
-	ODGODD ODW ATV	する点数を変更できます。
18	QRCODE_GET. AJN	QRCODE_GET 関数 を使って、GUI 上に QR コードを描画する
-	CAIDDEAD CAIDWDITE AIN	サンプルプログラムです。 オーディオ入力からサンプリング入力(SNDREAD 関数)後、
19	SNDREAD_SNDWRITE. AJN	オーディオ人力からサンノリンク人力(SNDREAD 関級) 後、 オーディオ出力に対して同じデータをサンプリング出力
19		(SNDWRITE 命令) します。
-	SNDREAD_SNDWRITE_GUI.AJN	SNDREAD_SNDWRITE. A.J.N サンプルプログラムの GUI 版です。
	SNDREAD_SNDWRITE_GOT. AJIV	オーディオ入力からサンプリング入力(SNDREAD 関数)しつ
20		つ、データを波形グラフ表示し、同じデータをサンプリン
		グ出力(SNDWRITE 命令) します。
	SNDREADLEN_SNDWRITELEN_GUI.AJN	オーディオ入力の入力バッファ件数(SNDREADLEN)とオーデ
		イオ出力の出力バッファ書き込み可能件数(SNDWRITELEN)
		を読み取って、入出力バッファにデータがある分を、オー
21		ディオ入力(SNDREAD)してからオーディオ出力(SNDWRITE)
		します。
		これにより、データの途切れなく入力と出力ができます。
00	STRDELB_STRINSB. AJN	文字列に対して、STRDELB\$関数で指定バイト長の削除、
22		STRINSB\$関数で挿入を行います。
23	TRUNC_ROUND. AJN	数値を指定位置で切り捨て(TRUNC 関数) / 四捨五入(ROUND
۷۵		関数)します。
24	YEAR_MONTH_DAY. AJN	今日の日付から年(YEAR 関数) / 月(MONTH 関数) / 日(DAY
24		関数)の値を、それぞれ抽出します。

第5章 索引

		COMMON VLIST\$	196
A		COMMON WRITE	177
ARRAY2BINBLK\$	47	COMMON2 CDIM	199
ARRAY2STR\$	48	COMMON2 DEQUE LEN	211
В		COMMON2 DEQUE LPOP	208
	10	COMMON2 DEQUE LPUSH	206
BINBLK2ARRAY	49	COMMON2 DEQUE POP	207
BIT2NUM	141	COMMON2 DEQUE PUSH	205
C		COMMON2 ERASE	198
CBOOL	51	COMMON2 GET_DICT_KEYS\$	200
CDBL	52	COMMON2 HAS_DICT_KEY	201
CHRTYPE	93	COMMON2 LDICT	202
CINT	52	COMMON2 LDIM	202
CLNG	53	COMMON2 UBOUND	203
CLOCK2DATETIMESTR\$	54	COMMON2 VARTYPE	204
COMMON CDIM	183	COMMON2 VLIST\$	212
COMMON CLOSE	171	CONVBIN	55
COMMON DEQUE BACK	193, 209	CONVPHY	57
COMMON DEQUE FRONT	194, 210	CONVUNIT	58
COMMON DEQUE LEN	195	CSNG	53
COMMON DEQUE LPOP	192	CURDIR\$	165
COMMON DEQUE LPUSH	190	D	
COMMON DEQUE POP	191	DAMBADD	~ 0
COMMON DEQUE PUSH	189	DATEADD	59
COMMON ERASE	172	DAY	60
COMMON FREEFILE	171	DAY	61
COMMON GET_DICT_KEYS\$	184	DIMADD®	106
COMMON HAS_DICT_KEY	185	DIMADD\$ DIMAND	107 113
COMMON INPUT	173	DIMAVG	102
COMMON INPUTR	174	DIMCOBL	131
COMMON LDICT	186	DIMCDBL	128
COMMON LDIM	186	DIMCING	129
COMMON LOCK	178	DIMCSNG	130
COMMON NOTIFY	180	DIMOSTR\$	132
COMMON ON / OFF	182	DIMOSTRO	109
COMMON OPEN	169	DIMEQ	120
COMMON PRINT	176	DIMEQV	117
COMMON READ	175	DIMFIND	133
COMMON SWAPDB	197	DIMGET	135
COMMON UBOUND	187	DIMGET\$	136
COMMON UNLOCK	179	DIMGT	123
COMMON VARTYPE	188	DIMGTE	125

AJAN 拡張コマンドリファレンス

DIMIIF	126	J	
DIMIIF\$	127	JOIN\$	69
DIMIMP	116		03
DIMLT	122	L	
DIMLTE	124	LCASE\$	69
DIMMAP	137	LEFT\$	70
DIMMAP\$	138	LEFTB\$	70
DIMMAX	103	M	
DIMMEDIAN	102		
DIMMIN	103	MATH ISEQ	71
DIMMOD	110	MINUTE	72
DIMMUL	111	MKUUID\$	72
DIMNE	121	MONTH	73
DIMNOT	112	N	
DIMOR	114	NUM2BIT	141
DIMREDUCE	139		141
DIMROL	119	0	
DIMROR	119	ON COMMON CALL	181
DIMSET	140	ONEDIM SORT	142
DIMSHL	118	ONEDIM SORT\$	142
DIMSHR	118	P	
DIMSTDEVP	104	1	
DIMSUB	108	PASSWORD_HASH\$	74
DIMSUM	104	PASSWORD_VERIFY	74
DIMVARP	105	PYOBJ CALL FUNCTION	155
DIMVARS	105	PYOBJ CALL METHOD	156
DIMXOR	115	PYOBJ CLOSE	158
E		PYOBJ CREATE CODE	154
ENVIRON\$	168	Q	
F		QRCODE_GET	213
FORMAT\$	62	R	
FORMATDATETIME\$	65	RIGHT\$	75
G		RIGHTB\$	75
GET_OCR\$	216	S	
GETCOMMANDLINEARGS\$	166	SECOND	76
GETSYSTEMINFO\$	167	SNDCLOSE	160
	10.	SNDOPEN	159
H		SNDREAD	161
HASH\$	66	SNDREADLEN	162
HOUR	67	SNDWRITE	163
I		SNDWRITELEN	164
		STR_AND\$	79
ICONV\$	68	STR_BASE64_DECODE\$	77
		STR_BASE64_ENCODE\$	77
		SIIV_DIMIOT_DIMOODE	• •

AJAN 拡張コマンドリファレンス

STR_DUMP\$	78	STR2ARRAY	96
STR_ENDSWITH	84	STRDELB\$	97
STR_EQV\$	80	STRINSB\$	98
STR_HAN2ZEN\$	81	STRREVERSE\$	99
STR_HIRA2KATA\$	83	STRREVERSEB\$	99
STR_IMP\$	80	T	
STR_ISALNUM	86		
STR_ISALPHA	87	TRUNC	100
STR_ISASCII	92	TWODIM EXISTS	147
STR_ISCNTRL	87	TWODIM EXISTS\$	148
STR_ISDIGIT	88	TWODIM FILTER	143
STR_ISGRAPH	88	TWODIM FILTER\$	144
STR_ISLOWER	89	TWODIM JOIN	145
STR_ISPRINT	89	TWODIM JOIN\$	146
STR_ISPUNCT	90	TWODIM NOT EXISTS	149
STR_ISSPACE	90	TWODIM NOT EXISTS\$	150
STR_ISUPPER	91	TWODIM SORT	151
STR_ISXDIGIT	91	TWODIM SORT\$	152
STR_KATA2HIRA\$	83	TWODIM TRANSPOSE	153
STR_OR\$	79	TWODIM TRANSPOSE\$	153
STR_REMOVEPREFIX\$	85	U	
STR_REMOVESUFFIX\$	85		100
STR_REPEAT\$	80	UCASE\$	100
STR_STARTSWITH	84	UUIDCOMP	101
STR_VALIDUTF8	86	Y	
STR_XOR\$	79	YEAR	101
STR_ZEN2HAN\$	82	114110	101

第6章 重要な情報

保証の内容と制限

弊社は本ドキュメントに含まれるソースプログラムの実行が中断しないこと、またはその実行に 誤りが無いことを保証していません。

本製品の品質や使用に起因する、性能に起因するいかなるリスクも使用者が負うものとします。

弊社はドキュメント内の情報の正確さに万全を期しています。万一、誤記または誤植などがあった場合、弊社は予告無く改訂する場合があります。ドキュメントまたはドキュメント内の情報に起因するいかなる損害に対しても弊社は責任を負いません。

ドキュメント内の図や表は説明のためであり、ユーザ個別の応用事例により変化する場合があります。

著作権、知的所有権

弊社は本製品に含まれるおよび本製品に対する権利や知的所有権を保持しています。 本製品はコンピュータ ソフトウェア、映像/音声(例えば図、文章、写真など)を含んでいます。

医療機器/器具への適用における注意

弊社の製品は人命に関わるような状況下で使用される機器に用いられる事を目的として設計、製造された物では有りません。

弊社の製品は人体の検査などに使用するに適する信頼性を確保する事を意図された部品や検査機器と共に設計された物では有りません。

医療機器、治療器具などの本製品の適用により、製品の故障、ユーザ、設計者の過失などにより、 損傷/損害を引き起こす場合が有ります。

複製の禁止

弊社の許可なく、本ドキュメントの全て、または一部に関わらず、複製、改変などを行うことは できません。

責任の制限

弊社は、弊社または再販売者の予見の有無にかかわらず発生したいかなる特別損害、偶発的損害、 間接的な損害、重大な損害について、責任を負いません。

本製品(ハードウェア, ソフトウェア)のシステム組み込み、使用、ならびに本製品から得られる 結果に関する一切のリスクについては、本製品の使用者に帰属するものとします。

本製品に含まれる不都合、あるいは本製品の供給(納期遅延)、性能もしくは使用に起因する付帯 的損害もしくは間接的損害に対して、弊社に全面的に責がある場合でも、弊社はその製品に対す る改良(有償サービスの利用)、代品交換までとし、製品の予防交換並びに、代金減額等、金銭面 での賠償の責任は負わないものとします。

本製品は、日本国内仕様です。

商標/登録商標

本書に掲載されている会社名、製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

改訂履歴

Ver.	年 月	改 訂 内 容		
0.90	2019年10月	新規作成		
1.00	2022年1月	誤記修正		
		コマンド追加。TWDIM SORT / SORT\$, DIMGET, DIMGET\$, TWODIM		
		TRANSPOSE / TRANSPOSE\$, COMMON DEQUE BACK / FRONT,		
		COMMON READ, COMMON WRITE, COMMON VLIST\$, GET_OCR\$,		
		STRREVERSE\$, STRREVERSEB\$, DIMMAP, DIMMAP\$,		
		DIMREDUCE, TWODIM FILTER / FILTER\$, TWODIM JOIN / JOIN\$,		
		DIMSET		
		サンプル追加。OCR.AJN		
1.10	2023年3月	コマンド追加。CLOCK2DATETIMESTR\$, DATETIMESTR2CLOCK,		
		TWODIM EXISTS, TWODIM EXISTS\$, TWODIM NOT EXISTS,		
		TWODIM NOT EXISTS\$, STR_ISUTF8, STR_ISALNUM,		
		STR_ISALPHA, STR_ISCNTRL, STR_ISDIGIT, STR_ISGRAPH,		
		STR_ISLOWER, STR_ISPRINT, STR_ISPUNCT, STR_ISSPACE,		
		STR_ISUPPER, STR_ISXDIGIT, STR_ISASCII, CHRTYPE,		
		GETSYSTEMINFO\$		
		オプション追加。FORMATDATETIME\$, TWODIM SORT\$, ONEDIM		
		SORT\$		

このマニュアルは、製品の改良その他により将来予告なく改訂しますので、予めご了承ください。